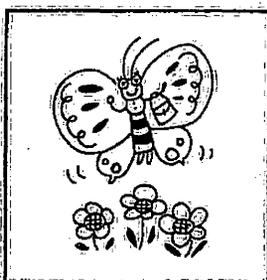
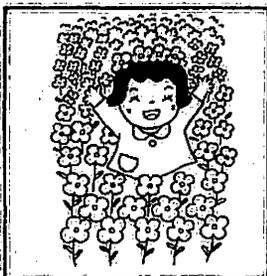
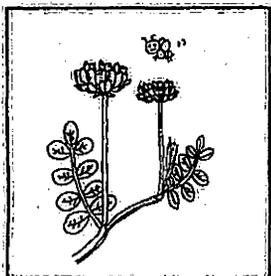


教会学校教案誌



NO.13
2004.4.5.6月



もくじ

まえがき	相馬伸郎 ...	3
巻頭説教「悔るな、天使たちの働きを」	相馬伸郎 ...	4
本誌の基本方針		8
日曜学校・教会学校訪問		
南与力町教会日曜学校の紹介		11
講演録「伝道する日曜学校を目指して」	相馬伸郎...	15
2004年4・5・6月分カリキュラム		26
聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例		27
4月4日		28
4月11日		35
4月18日		42
4月25日		50
5月2日		58
5月9日		66
5月16日		74
5月23日		82
5月30日		90
6月6日		97
6月13日		105
6月20日		113
6月27日		121
成人科		129
自由献金のお願い		137
2004年7・8・9月分カリキュラム		138
2004～2005年度カリキュラム		139
編集後記		141

まえがき

相馬伸郎（教会学校教案誌編集長）

本誌も今号で通巻第13号を迎えることができました。もはや、この企てが人間的業ではなく、まさに信仰的冒険に基く、神の御業、恵みの勝利であることは明らかであると思います。心から御名を崇めると共に、読者の皆様をはじめ、この戦いに協力して下さったすべての方々に心から御礼と感謝を申し上げます。

I. 「日曜学校」教案誌から

「教会学校」教案誌へ

教会学校を扱う、日本キリスト改革派教会礼拝指針第4章第28条には、このような定義がなされています。「教会学校とは、教会の教育事業が主として行なわれる組織を言う。それには、日曜学校・週日・休暇中の聖書学校・その他がある。その目的は、キリスト者の成長と完成であって……。」これによれば、日曜学校とは、教会学校の働きの一部であることは明らかです。およそ、私共の教会・伝道所でなされる各会（男性会・婦人会・青年会など）の働きは「教会学校」の枠の中に位置づけられると思います。

さて、これまで弊誌は、『日曜学校教案誌』と銘打って発行致してまいりました。しかし実は、創刊号にも記しましたが、その目標は高く、全信徒の「教育」と「伝道訓練」を目指し、教会教育に資する定期刊行物として発行したのでした。今号より、いよいよ当初の目標に基いてその名称を『教会学校教案誌』と致しました。もとよりこれまで通り、幼稚科から中学科までを対象にした日曜学校教案が中核となりますが、いよいよ志を高くして、教会教育、教会学校全体への奉仕を目指し、少しでも「教会学校」教案誌の名にふさわしいものとすべく努めてまいりたいと思います。

II. 中会出版から大会出版への橋渡し

第57回定期大会にて大会教育委員会から提案された「『日曜学校教案誌』を大会から発行する」提案は継続審議となり、第58回定期大会にて、この提案は取り下げられました。それは、再編された新しい大会教育委員会から改めて提案する為の措置でした。これを踏まえて本誌はなお、中部中会教育委員会の監督の下、教案誌編集奉仕者の手でなされます。しかしそれに加えて、大会教育委員会の指導をも仰ぎながら大会教案誌として出版する備えをしてまいることとなろうかと思えます。

III. 「子どもカテキズム」に基く

二年間のカリキュラムを

2000年4月に創刊した日曜学校教案誌は、「子どもカテキズム」に基づく二年間のカリキュラムでした。そして今号からの二年間、改めて「子どもカテキズム」に基くカリキュラムで行います。当初のものを参考にしつつもさらに改良、改訂したいと願っています。そもそも本誌は、「教理の体得」を第一に目指して編まれました。契約の子はもちろん、地域の子らにも福音の全体を、そして生けるキリストを伝えることを目指し、そのために教理教育こそ最強な手段と信じ、さらに集中したいと思っています。

私ども「有志」で立ち上げた創刊当初、それは厳しい船出でした。しかし、今号ではまさに大会的な奉仕の陣容となりました。「一人でも多くの子らの為、たった一人の子のために」、皆様と共になお力を合わせ、時間、財、賜物を捧げて教育的伝道の戦いに励んで参りたく願っております。

（名古屋岩の上伝道所宣教教師、中部中会教育委員会委員、大会教育委員会委員）

「悔るな、天使たちの働きを」

—マタイによる福音書18章10節による説教—

相馬伸郎（名古屋岩の上伝道所宣教師）

「彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。」この御言葉は、とても不思議な言葉ではないかと思えます。四福音書の中では、マタイによる福音書だけがこの御言葉を記しました。

おそらく私どもは、「天使」とか「御使い」とか言われても、ほとんど実感が湧かないように思います。丁寧に説明する暇がありませんが、私どもの教理においては、ローマ・カトリック教会のように、天使論を大きな主題として掲げて、いわゆる「守護天使」の存在について語ることはほとんどありません。これは、正しいことであると信じます。ところが、新約聖書には、天使、御使いが何回も登場します。特に、主イエス・キリストの降誕の物語と再臨の教えのなかで集中して出てまいります。確かに、ここで主イエスが仰せられた御言葉から、先ほどの守護の天使の存在と働きを確証することはできないと思えます。しかし、主はここで、子どもたちのためには、天使たちがいつも天の父なる神の御顔を仰ぎ見る仕事をしていると、はっきり告げておられるのです。子どもたちには特別に天使が働きかけてくださっていると仰せられたのです。

これは、私自身が実感していることでありますが、この主イエス・キリストの御言葉は、教理としての表現、言葉ではなく、詩の言葉、詩的な表現として、子どもたちの現実について、鋭く切り取るようにして説明して下さっているように思います。たとえば、乳幼児を見ておられますと、彼らがしばしば現実の世界とファン

タジー、夢の世界とを行ったり来たりしながら生きている、現実と夢とを重ねながら、二つの世界を同時に生きている姿をほほえましく認めることができます。幼児たちにとって、夢のなかで起こった現実とこの覚めた現実とをきちんと識別することは困難なようです。たとえば彼らは、我が家で飼っていますウサギを自分の友だちであるかのようにして接することができます。それだけに、いきなり噛まれたりするとびっくりして、傷つきます。ウサギが生き物であるということがどのようなことなのか、どこまで分かっているのか心もとなようなそぶりをしてみせることもあります。あるいは、昆虫でも花でも自分と同じように生きていると見えるようなそぶりをも見せるときもあります。サンタクロースもイエスさまも同時に受け入れるのです。このような幼児の心、精神の不思議さは、まさに子らに働く天使の働きではないのかとすら思えてしまいます。ただし、この天使の働きとは、主イエス・キリストの父なる神を仰ぎ見ること、つまり、礼拝することであると限定されていることを忘れてはなりません。

さて、私ども日曜学校教師は、このような幼児の前にも、教師として立たされています。そのような私どもは、彼らをどのような眼差しをもって見つめるべきでしょうか。どのように見るのか。これこそ、教師の姿勢、その奉仕の急所となります。万一、教師が「幼児たちにはまだ福音は理解できない、福音の言葉は彼らにはまだ難しい。だから、お絵かきや工作、お遊びをしていれば分級は良い」と考えるなら、これ

はまことに大きな損失となると思います。もったいないと思います。

「彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。」私どもは、幼子のためには、天使がいつも彼らに代わって神を仰いでいると言うことを信じたいのです。つまり、それほどまでに、神に重んじられている存在として理解したいのです。信仰を理解し、受け入れることにおいて大人よりも容易な存在として祝福されている存在として信じたいのです。信じるべきです。

それならそのような私共は、そこで何をするのか、何をすべきか。もちろん、お遊びや工作などを否定するものではありません。しかし、かれらにこそ、神の存在を告げ、福音の物語を語り、祈りを教えるべきです。共に祈ることができるのです。共に祈るべきであります。

先日、私は、大変すばらしい光景を教会で、朝の祈禱会で見ることができました。いつもは、お母さんに連れられて、3歳の女の子一人だけが出席しています。お祈りのときには、母子室でおもちゃで遊んだりして過ごします。しかし、その日は、2歳の女の子のお友だちが来ました。聖書の解き明かしが済んで、お母さんたちが二つに別れてお祈りし始めると、その時、その子たちが、ガラス越しに見える、お母さんたちがしている祈り会の真似をして、自分たちもお祈り会をし始めたのです。私は、ほとんど初めて、教会員のお祈りの途中に、子どもたちが何か言っているのが聞こえたので、そしてすぐにそれがお祈りであることがわかりましたので、私は、その部屋をのぞいてしまいました。彼女たちは、同じ言葉を何度も何度も繰り返しながら延々とお祈りしているのです。

さて、私共は彼女たちの行為をどのように評価できるのでしょうか。これは、お祈りの真似事なのでしょうか。違うと思います。これは、立派なお祈りです。つまり、聖霊の働きなのです。聖霊なる御神のお働きによらなければ、祈

りを祈ることはできません。これは彼女たちに天使が働いたからではなく、聖霊が注がれたから祈っているのです。しかし、この出来事は、まさに主イエスの御言葉、「彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。」と言う御言葉によって、開かれ、解き明かしえるものだと思います。

この御言葉は、特に私ども日曜学校教師に、子どもたちへの伝道へと、心をかきたてる御言葉の一つではないでしょうか。乳幼児は、諸霊、精霊を信じます。子どもたちは精霊や夢の世界と現実とをオーバーラップさせて生きることができるのです。もちろん、言うまでもなく、それは、聖書の信仰とは異質です。しかし、私どもは経験しております。子どもたち、乳幼児に「神さま」と教えると、「神さまなんていやしい」と反発されることはありません。「神をこの目で見るとまでは、触るまでは決して信じはしない」と主張する幼子を見たためしがありません。これは、幼子への神の祝福ではないでしょうか。これを、万一にも、賢い大人たちが「幼子は知的に劣っているから、まだ人生の深いところなど分からないから、宗教教育を施す意味がない、ほどこすべきでない」などと言うのであれば、それこそ、まったく見当違い、愚かなことあります。

主イエス・キリストは、仰いました。「彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。」だからこそ、福音を教える必要があり、実ることは容易なのです。ただしそれは、子らに、「あなたには守護天使がいつも守ってくださっているのですよ」などと教えないければならないということではありません。私どもが伝えるべきは、彼らを愛しておられる主イエスであります。

主イエスは、子どもたちを私のところに来させなさいと命じられました。主イエスはご存知です。幼子をお愛しておられる天の父がおられる

ことを。主イエス・キリスト御自身も幼子をお愛しておられるのであります。だから、私どもは、子どもをお愛するイエスさまを伝えるのです。イエスさまがどんな怖い力よりも強い神さまであるかを伝えるのです。イエスさまこそ、大人も子どもも従うべき神であることを伝えるのです。神の御子イエスさまは、かつて赤ちゃんでもあって、自分たちと同じように過ごされたことも教えることができるのです。そのようにして主イエス・キリストへの愛を育むことができます。子どもたちと一緒に、またそれは天使たちと一緒に礼拝することをも意味するでしょうが、彼らとお祈りする、礼拝するのです。このようにして、イエスさまを好きになる子に育てる、これが、幼子への伝道、教育であります。

先週、私どもの教会で一人の幼子が洗礼を受け、教会員、未陪餐会員となりました。私どもは、教会員の子を「契約の子」と呼びます。私共は、親の信仰告白と誓約に基いて、その子らに洗礼を施します。これは、どれほどすばらしい聖書的な伝統であるかを思います。しかし実は私は、かつて、幼児洗礼などは聖書的ではないと確信いたしておりました。幼児洗礼は、教会をなし崩しにし、真の信仰に立つ教会を壊してしまう悪しき教会の伝統であると考えていたのです。ところが、今日、改革・長老教会の伝統を担う欧米の教会のなかで、幼児洗礼を否定する人々も出てまいりました。しかし、この日本の私どもにとって、ますます、幼児洗礼を施してきた教会の伝統に固く踏みとどまりたいと思います。それは、本人はもとより、私ども親、日曜学校教師にとってどれだけ幸いなしるしであるかを思うからであります。洗礼によって、はっきりと親と教会は、契約の子を神に愛されている子として見ることができるからです。もっと、はっきりと言わねばなりません。契約の子を神の子と見るができるからです。何故なら、彼らは洗礼を施されているからです。洗礼

とは、主イエス・キリストと一つに結ばれる礼典であります。幼児洗礼も、信仰告白に基く洗礼も同じ一つの洗礼であります。恵みの力において、まったく遜色がありません。神の子とする洗礼であります。どんなに親の目に適わない歩みをしている子であっても、どんなに親の目から神の子らしからぬ言動を繰り返していても、神が必ず地上において神の子としての実質を現してくださる、信仰を告白する喜び、信仰に生きる使命を覚醒してくださる、呼び覚ましてくださることを信じることができるのです。だからこそ、私どもは、乳幼児を、幼子を大切にすることもできるようになるのです。正しく重んじる道が開かれるのです。一個の人格、人間として、神の子として見るができるからです。

私どもに絶えず問われるのは、契約の子を、そればかりか、神が日曜学校に送ってくださった地域の子らを、神の子として選ばれた子として信じてあげることです。未だ信じることもない、信仰を言い表していない子のためにも、天使が礼拝しているという肉眼では見えない事実を、私共が、信仰によって認めてあげるのです。そして、信じる私どもだからこそ、彼らに必ず信仰教育を施します。主イエス・キリストを語ります。そうせざるを得ないはずです。私どもは、自分で信仰の選択を判断できる力がついたときから信仰の教育をするべきであるというような議論にくみしません。私どもは、信仰を与えられた光栄とその責任をもって、自分の子に、地域の子らに福音を伝えるのです。

「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。」神は、どれほど小さな子らを、重んじておられるのか、そのために天使すら用いてくださるまでに関心を注いでおられるのかを見ます。私共は、天上におけるこの幻、子らのために、子らに代わって、天使が礼拝している幻を見た

いと思います。それは、父なる神がどれほど子ども
の祈り、礼拝を待っておられるか、喜んで
おられるかを信じるためにです。教師の務めが
どれほど尊いものであるかをいよいよ悟るため
にです。主イエス・キリストがこのように命じ
ておられる限り、神が召してくださったこの業
が決して空しくないことを、必ず豊かに突るこ
とを信じて、教会の日曜学校の業に心新たに奉
仕してまいりたい、そう願います。

祈祷

子どもたちを愛しておられる主イエス・キリ
ストの父なる御神。その愛を私どもにも豊かに

与えてください。教会に来ている子らを、あな
たが救いへと約束された子、神の子として見る
眼差しを豊かに与えてください。そのために、
自分自身があなたの子として、あなたの幼子と
して、御言葉を受け入れ、教えられ、養われ続
けることができますように。そのようにして、
彼らよりわずかばかり前に御言葉の恵みに与っ
た者としての御言葉の教師として立つことがで
きますように。この研修会をそのための研鑽の
ひと時として用いてください。アーメン。

(2003年6月29日、名古屋岩の上传道所
主催日曜学校教師研修会開会礼拝説教)

本誌の基本方針

～教会（日曜）学校像について～

教会学校教案誌編集部

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ第56章7節、マタイ第21章13節）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするのですから、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

私どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私どもはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることとなります。

2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです。」準備したものをやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3. 子ども礼拝式における説教の重要性

——日曜学校の目標——

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかとなると思います。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでし

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4. 説教の完成としての教会

——分級の目標——

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になれる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「教会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの教会を指し示すあり方を指し示しているのです。この教会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「教会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずです。

説教（神の言葉の共同的伝達）と教会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5. 教会形成の一環としての日曜学校

——教師会と教師——

およそ教会的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているのであり、そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められています。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

子どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

子どもの目に子どもたちは、どのように映っているでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさへすれば、子どもらこそははっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

子どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria（ただ神の栄光の為に！）

南与力町教会日曜学校の紹介

南与力町教会日曜学校校長 丸岡圭郎

1. はじめに

当教会は、高知市にある八つの教会・伝道所の一つです。場所は市内中心部の城下町で、近くには市内でいちばん大きな繁華街、帯屋町とアーケードがあります。教会はその中心から南にやや離れた、比較的静かな所にあります。少子化と若者の少ない現実の中ですが、日曜学校には、契約の子どもたちや、近くの清和学園(中学・高校)の子どもたち、求道中の方の子どもたち等が集められています。教師は正教師4名、補教師4名の8名がご奉仕しています。

2. 礼拝式 (AM 9:30~9:55) の紹介

～式順～

もくとう

こどもさんびか

(日本基督教団出版局発行を使用)

しゅのいのり

子どもカテキズム

(中部中会教育委員会発行を使用)

はじめのいのり

せいしよろうどく (子どもたちの輪読)

おはなし (教師による輪番制、司会も)

いのり

けんきん

かんしゃのいのり (子どもたちで輪番)

こどもさんびか

もくとう

ほうこく

礼拝は、朝の9時30分から始まります。その前に、5分間、当日の司会・奨励担当者と教師

が一緒になって祈りをささげます。礼拝の始まりは、黙祷をもって始めます。

昨年より、子どもに優しくて分かりやすい「子どもカテキズム」を用いて、問1より開始しています。テキストとしてCS成長センター発行の『成長』を使用していましたが、教師会での検討の結果、昨年より中部中会教育委員会発行の日曜学校教案誌に変更になり、ただいま継続中です。御言葉の中から教理を中心とした教えの深さ広さがあること。また子どもたちと一緒に学べることも理由の一つとして考えました。子どもたちが御言葉によって養われることを覚え、願っています。

礼拝では、子どもたちが集中できる範囲の中で御言葉が語られています。時間にしますと約15分程度です。全体でも約25分で終わります。献金の祈りは輪番制で、子どもたちに祈ってもらっています。契約の子どもおれば、求道の子どもたちも一緒になって祈っています。

その後、分級の時間としまして、幼稚科・小学下級、中学・高校生会の二班に分かれて、個別にお話しをしています。

3. 分級 (AM 9:55~10:10) の紹介と感想

○小学下級と幼稚科クラス

出席人数は、通常3~5名の少数数ですが、ほとんど継続して出席しているので、本当に教会の子ども、神様の子どもという感じです。

当日の礼拝の確認をしつつ、クイズ形式や色塗り、工作などに取り組んでいます。小学生のお姉さんが小さい子どもの面倒を見ながら、和気あいあいと楽しい分級です。こちらの問いかけに対する答えで、少しずつイエスさまの愛や

隣人への思いやりが読み取れて、このままますます成長して欲しいと願っています。

御心ならば、幼稚科、小学校下級、小学校上級と分かれて分級ができる体制が整えられれば、と祈っています。

○中・高生会

子ども礼拝のあと、約10分程度、中・高生会を行っています。現在、二年生が2名、一年生が1名、すべて契約の子で、平均出席者数は1.5名です。子ども礼拝の教案と同じ箇所を学習しますが、もう少し詳しく内容について説明したり、日常生活に当てはめて考えてもらったり、少しでも信仰生活をしていく上で役立ててほしいと考えています。

昨年7月に、朝の礼拝後、長老さん方を囲んで、SS教師青年会の方々、小学生も交えて食事をし、長老さん方の日曜学校での思い出、また高校・大学時代に進路や信仰面で悩んだこと、

神様からの強い導きの御手があったことなどについて話していただき、高校生にとってたいへん参考になったことと思います。今後もこのような気軽に信仰について話し合える交わりの時を持ちたいと考えています。

4. 教師会の様子

毎月一回、第三週の礼拝後に行っています。そこでは、日曜学校教案誌の聖書研究・カテキズム研究より、御言葉を中心とした学習がなされ、担当者の発表のもとに共に学んでいます。時間にして20分くらいです。そして、各クラスの現状と行事計画について話し合いをしています。また、あまり来ていない子どもたちのために、みんなで祈り合っています。

教師が前もって学習しやすいように、また子どもたちの案内として、下のものをつくって送っています。好評です。

れいはいせいしよみこいがしよ
日曜学校・礼拝聖書予定箇所

子どもカテキズム

6月1日・・・ 図23 主は救い・イエス、神の御子・キリスト
マタイ1:18~28、16:18~20

8日(ペンテコステ・花の日)

15日・・・ 図24 謙卑のキリスト、高貴のキリスト
マタイ27:45~50、使徒1:6~11

22日・・・ 子ども伝道礼拝(10:15~) 午後ビクニック

29日・・・ 図25 預言者イエス
マタイ7:24~29

7月6日・・・ 図26 大衛王イエス
ルカ23:32~43

13日・・・ 図27 真の王イエス
ルカ19:28~40

20日・・・ 図28 思ひのみ
ルカ18:18~17

27日・・・ 図29 恵びと有徳召喚
ルカ18:18~30



南与力可教会日曜学校より

『母の日』のご案内

緑が目にしみる、さわやかな季節となりました。日頃は、当教会の日曜学校にご理解とご協力を頂き、感謝申し上げます。

さて、5月11日は母の日です。当日は日曜学校の保護者参観日となっております。

聖書では「あなたの父と母を敬え」と教えられております。お母さんへ感謝の気持ちをもて、子どもたちから「ありがとう」の言葉を贈りたいと思っております。

この機会にぜひご家族そろってお越しください。

● 5月11日(日) 日曜学校礼拝
朝9:30~



日本キリスト改革派
南与力可教会 日曜学校
☎(068) 872-6820
牧師・山村良司

5. おもな行事・活動報告 (2003年より)

- 2月23日 子ども伝道礼拝・映画会
伝道のための働きとして、子どもたち及び家族にハガキで案内を差し上げています。
- 3月16日 2003年度組織・クラス編成
保護者に連絡とコメントして案内
- 3月23日 卒業生送別愛餐会
- 4月6日 進級式
- 4月20日 イースター礼拝
特別伝道礼拝の一環として、家族宛にハガキで案内を差し上げています。
- 5月11日 母の日 (保護者参観日)
- 6月8日 ベンテコステ礼拝
花の日 (下司病院へ訪問)
毎年通っています。アルコール中毒患者がいる施設です。院長共々喜んでいきます。
- 6月22日 子ども伝道礼拝・ピクニック近く
の動物園と遊園地へお弁当を持って行って

います。

- 7月19日 夏期学校
毎年、近くの川へ泳ぎに行きますが、今年は近くの温水プールへ行きました。家族への案内も差し上げています。
- 7月27日 高校生中心親睦会
- 9月21日 教師親睦会
- 10月5日 成長感謝式
一年の子どもたちの成長を感謝して共に喜び合います。ハガキの案内も差し上げています。
- 10月26日 子ども伝道礼拝
近くの土佐山田町の公園で野外礼拝を持ちました。ハガキの案内を差し上げています。
- 12月21日 クリスマス礼拝・祝会
特別伝道礼拝の一環として、家族に案内を差し上げています。



みなさん、お元気ですか?
〇週学校からのお知らせです。
次のよう子どもたちのための伝道礼拝とピクニックも行いますので、ぜひ来てください。

6月22日 日
☆子ども伝道礼拝 日 10時15分～

礼拝後 ピクニック
「わんぱくこども」へ行きませよ!
(持ってくるもの)
お弁当・飲み物・お菓子・紙きり など
雨の時は、合掌でしませ



日本キリスト改革派
岡崎市教会日曜学校
☎066・872・8820



夏期学校、鏡川河川敷にて
(2002. 8. 4)



子ども中心礼拝 (野外礼拝)、土佐山田町鏡の公園にて (2003. 10. 26)



岡崎市教会
日曜学校

夏期学校&ビデオ上映会のお知らせ

と き 7月30日(日) 12:00～2:00

と ころ 岡崎市教会

内 容 昼食・聖書・ビデオ・ゲーム・おしゃべりタイム 等

・ビデオは「バベルの塔」
(手塚治虫 旧約聖書物語) 映画

みんなで楽しい時間を過ごしたいと思います。ぜひ参加して下さい。



クリスマス祝会劇「ナオミとルツ」物語 (2003. 12. 21)

6. 子ども伝道（中心）礼拝について

日曜学校の礼拝（AM9：30）

子ども礼拝に合流

子ども礼拝（AM10：15）

しかい

ぜんそう

さんびか

しゅのいのり

こどもきょうりもんどう

いのり

さんびか

せいしよ

せっきょう

いのり

さんびか

けんきん

かんしゃのいのり

しょうえい

しゅくどう

こうそう

ほうこく

共同礼拝の構成メンバーは、老若男女を問わず、おとなと子どもを問いません。が、当教会では、朝の共同礼拝前に日曜学校礼拝を守っているため、子どもたちも、そして子どもたちこそ礼拝の主要な構成メンバーであることを忘れがちになります。このため、年三回の共同礼拝を、思いきって子ども中心の礼拝にしています。そして、その日の午後は、子どもたちを中心とした愛餐会、子ども映画会等を催して、終日、子どもたちを心に留め、祈っています。

「伝道する日曜学校を目指して」

相馬伸郎（名古屋岩の上传道所宣教師）

講演 I

伝道する日曜学校を目指す教会形成

〈序文〉

本日の主題とさせて頂きましたのは、伝道、「子どもたちへの伝道」です。ここでの子どもとは、幼児から小学生や中学生までの子らを念頭においております。私はそもそも、ただ単に教会学校教案誌を発行すること、それ自体を目的とし、それで自己満足するようなことは決してあってはならないと考えております。つまり、「日本キリスト改革派教会も他の教団、教派のように一人前に教案誌を持っています。日本キリスト教会、日本キリスト教団、他の福音派の諸教会のようにやれています。」などと言うことで、満足するわけには決して参りません。この大変な奉仕が、現実「突る」ことを真剣に求めているのです。つまり、本当に契約の子が、自ら祈れるようになり、信仰をはっきりと喜んで言い表し、聖餐の食卓に仕えるつまり教会の良き奉仕者、主イエスの弟子となって共に伝道する者となることです。また、地域の子らがあまねく、主イエスの福音を聴いて、選びの子らが、主イエス・キリストを信じて、信仰を告白し洗礼を受け、日本キリスト改革派教会の会員となることです。そのような生き生きと喜びと命に溢れた日曜学校を育むことです。

四国中会の現実を正確にとらえておりませんが、ここで語ることにいささかの躊躇はあります。正直に申しまして伝道の厳しい戦いの渦中にあられます。もちろん中部中会も他の中会も、日本キリスト改革派教会全体が厳しい伝道の戦いを強いられています。そのような状況の

中で、しかし、普遍的なこととして、日曜学校伝道が教会の伝道と形成そのものにどれほど資するものかを、私どもの実践を紹介させていただき、伝道する日曜学校を育てることが、教会形成そのものと伝道の実りに結びつくことを考えていただき、一つの提言とさせて頂きたいと思います。

〈名古屋岩の上传道所の事例〉

私は、ことさら申し上げるまでもありませんが、ただの牧師です。つまり、教育を専門に修めた者ではありません。大学で「中高」の社会科教員免許を取った程度の者です。また、児童伝道の賜物とか、児童伝道に特別に使命を持った者でもありません。神学校の時、海外宣教や児童伝道に重荷をもった神学生たち有志が集って研究会を持っていましたが、ほとんど出席したことがありません。私の念頭には、この日本にどのようにしたら神の教会が形成できるのかという一点、そのための説教と個人的伝道（牧会）によって教会を形成する実力を身につけること、つまり神学することと霊的修練に自ら集中すべきであると信じ、力を注いでいた、「つもり」なのです。ですから、もしも皆様、わたしのことを児童伝道に賜物、使命をもって取り組んできた教師と御考えになられるならばそれは、まったくの誤解となります。むしろ、その逆だと申し上げたほうが良いと思います。

しかし、私は神学校を卒えて牧師となりました。牧師は、神の言葉の説教者として、高齢者であっても幼児であっても、全ての人々に福音を証して、キリストの教会を建てあげる務めを与えられています。ですから、牧師は、およそ

教会の営みの全ての専門家である、教会に導かれているすべての方々、全年齢層にふさわしい対応を身に付けるべきである、少なくともそのような方向性を目指すべきであると考えております。……これは自分自身は到底そうっていない者の典型なのですし、考えただけでも気が遠くなるような困難な課題ですが！……つまり、牧師は、その遣わされている教会の地域的な特色、その教会の歴史的、霊的状况に、何よりも神の導きに、牧師は自らを合わせて生きなければなりません。自分はこのような牧師だからと言って、教会の現実を無視して、自分の個性、使命を優先することは決してできません。これは、牧師自身が弁えることであります。ただし、逆にもしも教会がその牧師の個性、賜物を無視して、何でも自分達の要求を押し付けるようなことは、その牧師の良さを少しも生かすことができず、ただ牧師を疲弊させるだけです。むしろ、教会側では牧師の個性や賜物が生かされる道を考える視点は大切です。

ですから私自身、自分が日曜学校教案誌に奉仕するようになるとは、加入する前にはまさに夢にも考えませんでした。また、日曜学校のことで講演することになるとも考えられませんでした。説教すること、あるいは、教会形成のための説教や牧会についての神学的な講演なら少しはできるかもしれないと考える程度の、これは、日本キリスト改革派教会の教師であれば、誰でも担える程度の者にしか過ぎません。そのような私が他にもない子どもへの伝道についてお話しすることになっているのは、ただ神の不思議な導きであるとしか言えません。

皆様のお手元に、私どもの伝道所の日曜学校の簡単な歩みを紹介したプリントをお渡し致しました。これは、家内が昨年の中部中会の信徒神学講座のために発題した時のプリントです。実に、名古屋岩の上教会の開拓伝道開始から4年間は、いわゆる日曜学校としては、行っていなかったわけです。地域の子らへの伝道は、開拓

当初の単発的なもの以外は、担っていませんでした。ここからも、はっきりと私自身が特別に児童伝道に賜物、使命をもっていた者ではないことは明らかであろうと思います。

【名古屋岩の上伝道所 日曜学校の歩み】

・1994年4月より、貸ビルの3階にて開拓伝道開始

10月、11月、12月「公園伝道」を単発に行う。「イエスさまのお誕生会」をビルにて開催。これ以降毎年、子どもクリスマス伝道集会開催。今日の日曜学校の種まきとなった。しかし、日曜学校としては行っていなかった。教会の子らは、礼拝式の時間に一人が交代しながら日曜学校の働きの代替として奉仕していた。

・1996年 礼拝式のなかで、子ども向けの説教を開始。

・1998年、主日礼拝式前に「日曜学校」開始
子ども7～8名 教師6名

この年から、夏期キャンプ開催（子ども16名、大人12名）以降毎年開催。キャンプに初めて出席し、日曜学校に定着する子も起こされた。

・1999年 日曜学校出席者平均

子ども12名 教師6名

・2000年 日曜学校出席者平均

子ども15名 教師6名

・2001年 日曜学校出席者平均

子ども22名 教師6名

・2002年 日曜学校出席者平均

子ども25名 教師10名

（夏期キャンプ 子ども48名、奉仕者15名。イエスさまのお誕生会 子ども54名、総勢74名）

・2003年 日曜学校出席者平均

子ども28名 教師10名（3月に会堂移転）

（夏期キャンプ 子ども30名、中学生は中会キャンプに参加、奉仕者17名。イエスさまのお誕生会 子ども72名、総勢102名）

（12月14日出席者 子ども42名 教師11名・03年12月現在在籍者72名）

(03年度平均 主日礼拝式大人33名・子ども12名、総数45名)

〈日曜学校伝道への外的な促し〉

それなら、何が今日の私どもの教会の日曜学校伝道の取り組みになったのでしょうか。一つの理由、そして日曜学校伝道を踏み出す大きな具体的な出来事がありました。私どもの名古屋市緑区で日本中に衝撃を与えた事件が起こりました。それは、「中学生による5000万円恐喝事件」です。それは、まさに私共の伝道しております目の前で起こりました。その時、私どもは社会からも地域からもその責任を問われませんでした。「教会は何をやっているのだ」と叱責されました。

もっとも、地域の人々は、教会とは神からどのような使命を与えられているものなのかを知りませんから、そのように問うこともありません。しかし何よりも悲しむべきことは、社会、地域社会が、私共の伝道や教育に期待していないからでありましょう。ビルの賃貸の一室で、自分達の手でこしらえた看板を立てただけのような、人目につかず、ついても怪しまれるだけのような、開拓4年目を迎えた当時の私共名古屋岩の上传道所は、まだまだ地域に認知されていないと、私は思いました。

しかし、私共の教会は、この事件から、地域の人々からではなく、幼子を探し求めておられる主イエス・キリストから、改めて日曜学校の為に、全力を傾注して奉仕しなさいと迫られたと思いました。そのような神の御心を、私共は受け止めさせていただきました。

この事件でもいよいよ明らかにされたのは、子ども心の闇、荒廃の深刻さであります。日本の社会全体の深い病であります。今こそ、教会は力をあわせて、子どもたちに、「主イエスのもとに来なさい。教会に来なさい。」教育に携わる人々に、福音の真理を伝えて、「主イエス・キリストが共に働いてくださいます。望みを失わ

ず、愛の労苦を息らないで下さい」と呼びかけるべきであると思います。それができるのは、この福音を知らされ、生かされている私ども教会、キリスト者のみであります。主イエスの福音のみが教育を支え、社会を育てるのであります。主の教会、主の弟子のみがそれを担えるのであります。ですから、名古屋岩の上传道所の日曜学校の働きへの力の傾注は、このような社会の事件も与っていたのです。しかし、これも、先ほども触れました、教会と地域社会の現実から教会がどのように歩むべきかを示されていることと、それに聖書的に応答する道を教会がたずね求める姿勢は極めて大切であると思います。

〈内的な促し〉

子ども伝道への取り組みのもう一つの理由があります。これも、教会の現実、困窮から神によって指し示された道、導きでした。一言で言えば、大変単純なことです。大人はビルの3階の一室にある教会には、登ってこないという現実です。

開拓伝道の私どもの教会は、冒頭に申しましたとおり、前任地での再洗礼派、敬虔主義の悪弊を克服することをこそ願って教会形成を開始致しました。間違った伝道するなら伝道しないほうがましであると、何度も申しました。福音伝道の正しさ、福音の内容の正しさの厳しい自己点検なしの福音伝道や教会形成に対する激しいまでの問題意識をもって教会形成に打ち込みました。その結果が日本キリスト改革派教会への加入となった次第であります。ですから、多くの開拓教会がするような伝道一点張りではなく、むしろ、礼拝式中心であり、読書会や学び、信徒ひとりひとりの訓練、祈禱会の充実をはかっておりました。しかし、もちろん、新しい方との出会いがなければ、教会自身の存立すら不可能ですし、伝道への燃える意欲を失っていたわけではありません。結果としては、実に厳しい伝道の戦いを強いられました。受洗者を与えら

れるためには、その何倍か、何十倍かの新来者との出会いが必要であります。礼拝式への新来者は年間、片方の手で数えることができるような私どもの現実がありました。それが何年も続いたのです。教会員と関係のない、まったくの新来者の方はほとんどおりませんでした。見事なまでに来ませんでした。

言い訳がましくて恐縮ですが、名古屋市という地方都市における伝道は、他の大都市とは違った困難さがあるように思われます。中部中会もかつて名港伝道所がありましたが、結局、閉鎖せざるを得なくなった苦い歴史があります。名古屋での伝道は、他の大都市での伝道とは異なった厳しさがあるのではないかと勝手に考えております。何よりも、私共は単立教会でしたし、賃貸ビルの一室でしたから、大人は、私どもの見た目、外側を見て信用してくれなかったのです。どれほど素晴らしい中身の教会であっても、ビルの教会に来ることは、少なくとも名古屋人の感覚からは難しかったのです。しかも、私共は、伝道優先のあり方、「初めに伝道」ではなく、正しい教会形成と正しい伝道を相即させようと必死でしたから、いよいよ、狭く険しい道を進むこととなりました。しかし、この道以外に、進むくらいなら伝道をしないほうが良いと真剣に考えていたのです。

そのような厳しい開拓伝道の道程を突破する道として、祈りの中で導かれたのが子どもたちへの伝道でした。子どもたちは、見た目、外側がどうであっても主イエスの福音そのものと日曜学校の内容で来てくれるのです。そのことを求めて、日曜学校を開き、地域の子らへの伝道を求めました。幸い、私の子どもたちが小学生でしたから、初めは子どもの友だちが通い始めたのでした。ほんの一握りの子どもたちでしたが、プリントにあるとおり、一年一年確実に、子どもたちは増えてまいりました。7、8人から始まった日曜学校でしたが、私どもが真剣になればなるほど、確実に子どもたちは定着して

まいりました。

子どもへの伝道をどのようにするのか、何か良い方策はあるのか、もしも私にそれを質問されるなら、それはありませんと答える以外ありません。わたしは、これまでの日本キリスト改革派教会で試みたことのない「もの」を導入して、目覚しい伝道の成果も挙げるといふことがあれば、それに一方的に反対はしません。むしろ、どこかの教会が、私どもの模範となるようなあり方を示してくだされば、それは、大きな価値があると思います。日本キリスト改革派教会の教師や日曜学校教師がそのようなことに本気で取り組んでくださることは、私は興味があります。私には出来ませんが、どなたかが目の色を変えて、福音派の人達を驚かすような児童伝道の成果を挙げられれば大変嬉しく思います。しかし、私の仕える名古屋岩の上教会での取り組みは、何か特色ある取り組みをしているのか、何か特筆すべきものがあるのかと申しますと、何もないと正直に思います。しかしだからこそ、どの教会、伝道所でも、私どもと同じように、際立ったことなどは何もすることなしに、ただ子どもへの伝道は、神の召しであり、緊急にしなければならない教会の務めであると自覚しきへすれば、前進できるのではないかと考えているのです。そしてそのことを今回、皆様に訴えたいと考えているのです。

〈主イエス・キリストからの促し〉

何よりも、主イエス・キリストは、「子どもたちを私のところに來させなさい」(マタイ19章・マルコ10章)と弟子たちにお命じになりました。ですから、そもそも子どもへの伝道に責任が与えられていないような教会は、存在し得ないと言い切つてよいと思います。すべての年齢層に伝道することが私どもの使命ですが、とりわけ子どもへの伝道を、聖書は重んじているのではないのでしょうか。ここでの子もたちは、弱い存在の象徴です。ルカによる福音書(18章)

によれば、連れて来られた子どもとは、親に抱かれている乳飲み子まで含められていました。主イエス・キリストは、彼らを追い返そうとした弟子たちを叱られました。乳飲み子は自分の意思で、自分の足で主イエスの下に来ることが出来ません。連れてきてもらう以外にないのです。しかも、そのような弱い存在をこそ、主イエスは受け入れられるのです。弱い存在であればこそ、歓迎されるのです。主イエスは、弟子たちこそ、この人々を主イエスのもとに連れて来て良いのですし、連れてくるべきだと仰せになるのです。それなら、もしも、教会が大人への伝道を一生懸命しながら、子どもへの伝道をおろそかにするのなら、それは、主イエスの道ではないのではないのでしょうか。主の憤られるあり方なのではないのでしょうか。

〈日曜学校伝道と教会形成〉

しかし、正直に申し上げなければなりません。私自身は、開拓伝道を開始した当初、子どもが来るより、先ず大人が来なければ、特に、経済の面で立ち行かないので、大人を優先しました。しかし、このような愚かな私にも、神が憐れんでくださって、単立で開始した開拓伝道も、現在では、子どもの礼拝式よりも、大人の主日礼拝式の方が、多く集うようになりました。

もしも、私どもの教会が今後とも、子どもたちが大人になるまで、10年、15年と捕らえて放さず、しっかりと養えば、必ず教会は、着実に成長します。子どもたちが元気に教会に通う教会は、地域の方々からも信頼を受けます。また、小さな子持ちの方々も教会に繋がりが易くなります。子どもをしっかりと育てている教会は、子らを持つ信者未信者を問わず、親には魅力的です。つまり、決して小さくない「オマケ」も与えられるのです。

伝道する日曜学校となるためには、どのような教師（会）を育てるのにかに掛かってまいります。そうなれば、どうしても牧師が大きな指導

を発揮することが求められます。後で触れることになりますが、日曜学校の営みの生命は、子ども礼拝式にあります。必然的に、説教にこそ比重が掛かります。教会の説教者は牧師です。日曜学校（教会学校）から卒業する牧師は基本的にあり得ないのです。他教派の「教案誌」を教師会に与えておくだけで、内容を精査しないのであれば、せっかくウエストミンスター信仰基準に拠って立ち、日本キリスト改革派教会の諸宣言の学びと訓練を施しながら、深いところで、日本キリスト改革派教会としての教会形成に齟齬を来たすことは決して考えられないことではないと思います。牧師は、日曜学校に積極的にかかわり、指導、訓練する責任、出番があるのです。日曜学校「教師会の形成」は、「小会形成」と比べるわけにはまいりませんが、しかし、教会の伝道力、霊性を培う為に大きな意味と力があると思います。

〈日曜学校伝道は種まき伝道なのか〉

少し横道にそれますが、私自身の反省を込めて申します。私共は、これまでしばしばこのような言葉を、自分で言ったり、聞いたりしたことがないでしょうか。「日曜学校の伝道は種まきです。いつか、大人になって、イエスさまを信じるようになることを期待して行うのです。子どもたちが教会から離れても、やがてどこかで実を結ぶことを信じて行います……。」これは、正しいのでしょうか。わたしは、最近ますます、このような姿勢では、そもそも子どもたちに申し訳ないし、なによりも本当に福音的で、深く霊的な日曜学校の営みはできないと考えています。私どもが召されている務めそのものと召しておられるお方に対して不誠実ではないかと思えます。

福音を聞いている子どもたちが、教会から離れる。これは、どんなに悲しいことでしょうか。主イエス・キリストから離れて行くことを見るのは悲しいことです。主イエス・キリストは子

らの心の深くまで届いてくださいます。その子らの心の深みを私共教師は知らなければなりません。そして福音自ら、幼子らの心を「深く」するのです。子らに生ける創造者なる神の存在、十字架の愛を教えるなら、子らの心は広がり、深まります。

そもそも、「日曜学校伝道は福音の種まきで良い」と、ある意味で、開き直ってしまうときに、おそらく、そこで語られる福音じたいが底の浅い福音になってしまっているのではないかと危惧いたします。主イエス・キリストと人間そのものへの理解が浅薄なものとなってしまっているのではないかと思います。教師自身が、子どもたちにとってキリストの恵み、救いの恵みは必要不可欠な福音であると確信していなければどうして福音が子どもたちに届くでしょうか。子らの心に響くでしょうか。なんとしても、深く子らの心に福音を届けたい、信仰に導きたい、信じて従う者として育て、励ましたいと言う教師の情熱、意欲、迫力がなければ、地域の子らをつなぎとめることはおろか、契約の子らに福音を深く届け、信仰告白へと育てることもまた困難になるのではないのでしょうか。

〈日曜学校の主体は誰か〉

日曜学校を開始した直後一つの事件が起こりました。教師とともに近くの小学校の門の外で、チラシを配ったのです。するとすぐに、ある父兄から校長に電話があったそうです。そして校長からお手紙を頂きました。「諸般の事情から、校門の外でチラシをくばるのは遠慮して欲しい……」あれから、私共は、そのような種まきをしていません。それなら、どうして子どもたちが増えてきているのか。それは、子どもが友だちを誘ってくるのです。私共は、子どもの伝道の主体は子ども自身と理解しています。子どもが主イエスの恵みを知れば、日曜学校が楽しければ、友だちを誘うのです。

名古屋岩の上伝道所では、小学生以下の契約

の子、教会の子どもたちが18名与えられています。つまり、30代の若い親たちが比較的多いのです。これは、子どもへの伝道の副産物として神の祝福を与えられたと考えることも許されるのではないかと思います。「急がば回れ」と言うことわざではありませんが、子どもへの伝道が決して、日曜学校の活性化につながるだけではなく、教会の伝道、教会形成そのものとなることを、私は皆様にお分かちしたいと思います。伝道の開いの厳しい状況があります。しかしながら、教会形成そのものとして、このような伝道する日曜学校を目指すのであれば、教会の伝道それじたいが前進、拡大することを、私はここ数年の名古屋岩の上教会の開拓伝道の戦いのなかで、肌で覚えさせられております。

講演Ⅱ

私どもの目指す日曜学校像

①子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ書第56章7節、マタイ第21章13節）があります。また、神の民の祈りの家である教会は、古来、「学びの家」とも称されてまいりました。教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするのですから、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。逆に申しますと、むしろ礼拝においてこそ学びの対象である生ける神、主イエス・キリストとの交わりが与えられるのです。また、ますます深められて行くのです。つまり、学びの家たる教会は、祈りの家としての祈りつまり公的礼拝なしに、成り立ちません。教会の学びは、礼拝式なしには成立しないのです。

私共は、「日曜学校」と称して子どもへの伝道と教育の営みを致しております。自ら日曜学校

と名乗っておりますから、私共はうっかりすると自らの営みを「学校」の真似事のような営みへと傾斜させてしまう誘惑があるのではないかと思います。日曜学校を「学校」と称しますが、何よりも確認しておきたいのは、教会自身が学びの家であるということです。教会共同体が学校なのです。そうであれば、日曜学校の学校とは、「神の民の学びの家＝学校」つまり教会そのものの営みと考えることができるかと思います。

現住陪餐会員によって組織される教会、言わば大人の教会とは、祈りの家、礼拝共同体です。祈りの家におけるすべての営みを通して、とりわけ礼拝式において、キリスト者が生み出され、その成長がなされてまいります。また、なによりもそれによって教会自らが形成され、成長させられます。そうであれば、日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これこそが、もっとも大切なことではないでしょうか。日曜学校をこのように捉えることが、教案誌の基本的な日曜学校像なのです。

他教会のある教会では、日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会と言う言い方は神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私共はどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした

日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。その意味では、教師たちが真実に礼拝していなければ、子どもの礼拝式、日曜学校の礼拝式は成立しません。洗礼を受けている教師たちが集い、神の言葉の説教が語られる故に、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。これは、もしかするとキリスト教主義の学校の礼拝の影響なのかもしれませんが、日曜学校の礼拝を、教師たちが子どもたちを礼拝「させる」ために配慮、あるいは監督するようなイメージを持つなら、それは、まったく的外れなものとなるのではないのでしょうか。

②分級中心より、礼拝式中心

以上のように、子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求め……。ここが私どもの急所のように思います。

名古屋岩の上传道所の教師会で何度も申し上げることがあります。「分級で一番大切なことは、カリキュラムを教えて満足するよりも、子どもと祈ること、子どもに祈りを教えることです。心と心が通い合うような交わりを作ってください」と言うことであります。教案誌でも、繰り返し同じことを申し述べて参りました。「分級展開例をそのまますることが大切なのはありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げ

ることができればそれで良いのです。」準備したものの全部をやれたかどうかと言うことが分級運営の良し悪しの基準にはならないのです。

礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。そのオマケは、教材や、カリキュラムより、教師そのもの、その存在ではないでしょうか。子らの教いと成長をひたすらに祈って過ごす担任であれば、子どもたちの心に届くことができるのではないのでしょうか。教える内容と技術の研鑽はもとより大切ですが、担任の子らへの日々の祈りがなければ、結実しないのではないのでしょうか。聖霊のお働きの道具となる教師ですから、自ら祈ることなしに子らを祈りへ導くことは不可能であります。

③子ども礼拝式における説教の重要性

——日曜学校の目標——

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」(子どもカテキズム問76)であり、それゆえに私どもの日曜学校の目標とは、「自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できる子に育てること」となります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練(ディポーション)だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式(公同の大きな祈り)に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができるのです。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかとなると思います。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によっ

て、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでしょう。そうなれば、牧師こそが日曜学校の礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。もとより、子どもの礼拝説教を信徒、もちろん女性の信徒が担うことは、素晴らしいことです。それを否定したり、軽んじる意味で申し上げるものではありません。牧師は説教者として召されているのですから、子どもへの説教の責任も当然委ねられているのです。良き模範なしに、日曜学校教師に丸投げすることは、怠慢のそしりをまぬかれないでしょう。

教案誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

④説教の完成としての牧会——分級の目標——

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子ども達全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、かけがえのない一人の子どもの魂の固有の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私共が、分級の目標を「共に祈る」としておられますのは、実に、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。つまり私共の

分級イメージとは、「牧会」のイメージです。つまり、子どもと「向き合う」姿勢です。まさに膝を突合せて向かい合うのです。そもそもカテキズム教育とはまさにこの向かい合う姿勢を求め、このようなマンツーマンの営みのなかでこそ、結実するものです。

「子どもカテキズム」の表紙に、一つの図像が描かれております。左上から、小さな円が少しずつ右下に向かって広がり、右下からも左上に向かって小さな円が広がっています。これは「響き」をイメージしたものです。「カテキズム」とは、ギリシャ語の「カテーケーシス」と言う言葉に由来します。直訳すれば、「下に向かって響かせる」という意味であります。キリスト教会の信仰教育＝教理教育は、「カテキズム」と言うあり方に整えられてまいりました。これは単なる偶然ではないと思います。福音の本質そのものが教会の教育の「あり方」「方法」を規定したのだと思います。「カテキズム」を用いた教会の教理・信仰教育。それが正しく行われるときには、いつも「響き合い」が起こると思います。そしてそれをこそ目指して担われるべきであると思います。それならその響きとは、一体どのような響きなのでしょう。

日本語の「福音」、ギリシャ語では、「ユアングリオン」です。先輩たちがそれを「福音」と訳したことは、素晴らしいと思います。「喜びのおとずれ」。福「音」という漢字にはすでに、素晴らしい音色、響きが示されているように思います。神は上から、私共に向けて、「あなたの罪は赦された。私はあなたがたを愛している！」と語って下さいました。その時に、下から「やったあ！ありがとうございます！天のお父さま！」との叫びが挙がったのであります。そこに神の民、キリストの教会が誕生いたしました。実に、私共は主イエス・キリストの恵みの響きに「共鳴」することが許されたのであります。この共鳴、響き合いが起こると言うことは、そこに命の通い合いが起こったということの意味

しております。響き合い、共鳴、命の通いあいとは、神が私共に御顔を向けてくださる、神が私共に真実に接してくださる、向かい合ってくださいから起こるのです。神が正しい関係、命の関係を私共に一方的につくってくださった故に、私共も真実にならざるを得ません。神に向かい合う存在、礼拝する存在、交わりを持つ存在、創世記第2章7節で、主なる神が、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられ、人間は生きる者となったとあります。この原書の状況が、回復されることが救いです。私どもの基本的な人間像です。ですから、教会は向かい合うこと、人間を重んじるのです。人間を数量化せずに、ひとりの重さを重んじるのです。神に向き合っていたいている人間は、人間同士も向かい合うようになります。そこに、キリストの体なる教会が誕生し、形成される道が開かれるのです。人間同士の真実の交わりが回復されるのです。

神は、罪人の悔い改めを喜んで下さいます。罪人は罪の赦しを喜びます。そこに、この世にない喜び、神的な喜びが、神と私共の相互にこだまするのです。響き合いが生じるのであります。それは、神との人格的な交流であります。教会とはまさに、このような「響き合い」によって成立させられております。この響き合いが最も生じる時と場はどこでしょうか。言うまでもなく「主日礼拝式」であります。神との響き合いは、人間同士の響き合いをも可能にします。このようにして、神の教会、神の民の教会が生みだされるのです。神の愛の「響き」が、人の内にも響きを、愛の響きをたてさせる、このようにして教会は建て上げられて行くのであります。

福音は、いつでも「人と人との交わり」を生み出します。しかも福音とは、生み出された交わりの中でこそ体得されるものです。もともと福音を教えるとは、恵みを「分かち合う」ことに基づきます。教会の教え、それは、共に聴い

てくれる相手(仲間=友)との生きた係わり(共に生きる)の中でこそなされることなのであります。たとえば伝道者養成教育は、教える人と学生同士との生きた関係、まさに生活を共にするような関係で成り立つものなのです。効率よく、神学生を生産することはできません。時には、喧嘩したり、反発し合ったりすることが、福音を知り、自分自身を知る道となるのです。たとえば使徒パウロは教える人ですが、彼は孤独で福音を教えていたわけではありません。彼の手紙は彼個人の著作であると思います。しかし、ほとんど常に「パウロ・シルワノ・テモテ」からあなたがたへと書き送りますと欠き始めております。つまり、パウロの福音、彼が「私の福音」とさへ表現する福音は、福音の恵みを響かせ合う交わり、この「交わり」の中で、捉えられ、深められて行ったのであります。

私は洗礼入会志願者の方と「子どもカテキズム」を用いて一対一の学び会をどれほど少なくとも一回1時間以上で最低30回は行います。洗礼後にも継続し、基本的には、一年間行います。昨年の降誕祭には4名の方々を洗礼入会され、この他にも、求道者、結婚準備、加入志願者など一対一の学び会を毎週7回から8回行ないました。その意味で、福音伝道はまったく効率は悪いと言えます。しかし、伝道に効率を求めることはできません。どんなマスメディアが進歩しても、教会の教育、牧会は、教える者と教えられる者とが向かい合う姿勢を求めるのです。それは、まさに神が大切な、かけがえのないたったひとりと真実に向かい合ってくださいること、神が常に私どもに関わって下さる仕方そのもの、御顔を向けてくださり、近づいて語りかけてくださる仕方そのものを地上に映し出すための姿、モデルなのではないかと思えます。そしてそのようにして、福音の恵み、教理は体得されて行くと思えます。

今、私どもの日曜学校の現実、地域の子どもが少なく、あるいはほとんどいない、契約の子

らだけが集まっているというのが多くの教会の現実であると思います。しかしそうであれば、むしろ、この状況を必ずしも消極的に捉えるのではなく、今こそここに立って、契約の子にカテキズム教育の原点、向き合う姿勢をもって、教理を教え、祈りを教え、キリスト者としての歩みについて深く教え、寄り添い、その魂を深く養う道があると思うからです。契約の子が、漏れなく信仰を言い表すことができれば、日本キリスト改革派教会の将来はなお継続し、進展できると考えております。その意味で、この状況からこそ、日本の教会学校、日曜学校、日本キリスト改革派教会のそれが再生し、新しい充実した青少年伝道への取り組みが生まれるためのチャンスになるかもしれません。というより、チャンスとしなければならぬと思います。

そのためには、教師が分級で、子どもの心、気持ちを「聞き出す」こと、「聴き取る」ことが求められます。分級では、説教の主題、教理を教えることよりも、子らと真実に向き合うことが求められていると思います。また、今日の子どもたちがもっとも飢えていてかつ与えられない「恵み」それは、自分のことをしっかり「見てくれる相手」「聴いてくれる相手」(人格)の存在です。彼らは、日曜学校に来て、私共教師にそれを見出し、経験することができるのです。子どもたちに真剣に、真実に、愛をもって向かい合い、関心を注いでいけば、子らは、教師たちの語る主イエス・キリストがまさに、自分自身に向かい合ってください、関心を注いでくださり、愛していてくれることを見抜いてくれる、気づいてくれるのではないのでしょうか。私どもは自分の全存在が、キリストの御業の通路、代理となることが許されているのですし、命じられているのです。

先生と子らとの向かい合いは、神の愛に感動し、心をふるわせられた者、つまり神の愛に共鳴させられた者が、その愛、その響きが子らにも共鳴することを目指してなされる分級におい

て実現します。このように明確な目標を定めて分級のときを過ごすなら、そこには教師と子どもとの間にも福音が生みだす「交わり」、神の恵みに響きあう交わりがつくられるのではないのでしょうか。しかもそれは、教師と子どもとの関係だけではなく、おそらく子どもたちどうしもまた、そのような交わりをつくって行くことへと育つのではないかと思います。つまり、私どもの教会形成、聖徒の交わりの姿そのものに他なりません。

現代の子どもたちの主な遊びが、友だちとテレビゲームをして過ごすことになって久しいのです。子どもたちどうしも向かい合うことを知らない、「人格」と向かい合わないで過ごす。これは、大きな問題です。しかし、日曜学校には、「向かい合い」があります。神が御顔を向けてくださいます。その神の紹介者たる教師が子らの目を見つめることができます。まさに、日曜学校、教会こそ、出番です。

ここで改めて確認できるかと思いますが、このような分級イメージ、教会イメージから結ばれる日曜学校像は、教室において生徒全体に均一の知識を提供する、「学校」のイメージはどんどん薄くなって行くはずです。説教（言わば、神の言葉の共同的伝達）と牧会（言わば、個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

私共は、今日の日本の精神的荒廃は、教会の福音伝道力の低下の責任であると考えておりま

す。私どもの目に、子ども達はどのように映っているのでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。しかし、真の教会で説かれている福音が届きさへすれば、子どもらこそはっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲を減退させてはなりません。主イエスの愛と正義を知って、喜んで私どもの教会に集って来る子どもたちの生き生きとした姿を夢に見て、子どもたちに福音を伝えましょう。私共自身が変わらなければならない必要があれば、大胆に、変えていただきましょう。日曜学校教師会が活性化され、祝福されることが必要です。教会を挙げ、また中会も支援を惜しまないことも必要であります。遠回りに見えるかもしれませんが、子ども伝道に力を注げば、大人への伝道にもすばらしい影響が出るのです。このような研修会が地道になされることは実に尊いことです。どうぞ、皆様が進みあって、それぞれの教会に一人でも多くの子らが集えるように、契約の子らの信仰告白を目指して、お励み下さいますように。私共もまた皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

Soli Deo Gloria（ただ神の栄光の為に）

※本講演録は、2004年1月12日に開催された四国中会教育委員会主催日曜学校教師研修会（於高松教会）で行われた講演をもとにして、改めて弊誌のために書き直したものです。

日曜学校 2004年度カリキュラム (2004年4～6月分)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
4月4日 受難週・進級	十字架のキリスト	—	子24
		ヨハネ19：17-30	ペトロ一2：24
十字架につけられたキリストを指し示し、十字架のキリストを仰ごう。			
11日 復活祭	復活のキリスト	—	子24
		ヨハネ20：1-10	ヨハネ11：25
復活し、罪に勝利された主イエスを指し示し、生ける勝利のキリストを仰ごう。			
18日	人生の目的……礼拝	問1	ウ小1
		ヨハネ4：1-26	ヨハネ4：14
人生に目的・目標があることを知ってもらう。神を知り、神を喜び生きること。			
25日	神の栄光をあらわす	問1	ウ小1
		ヨハネ4：27-42	コリント一10：31
神と世界を喜び、世にあって神の栄光をあらわす生き方へと招く。			
5月2日	救いの喜び	問2	ハイデルベルク1
		ルカ19：1-10	ルカ19：10
主が私たちを捜し求めてくださる。主イエス・キリストと出会う喜びへと招く。			
9日 母の日	神の子の喜び	問2	ハイデルベルク1
		ルカ15：11-24	ヨハネ1：12
親と子としての神との関係。神は待っておられる。神の子とされる喜びへと招く。			
16日	御言葉の礼拝	問3	ウ大教理62-65
		ルカ10：38-42	イザヤ55：3
主イエス・キリストの御前にひれ伏し、御言葉に聞き入る姿勢を学ぼう。			
23日	キリストの体なる教会	問3	ウ告白25章、ウ大教理62-65
		コリント一12：12-31	コリント一12：26
神の民である教会に召し集められていることの大切さと恵みを学ぼう。			
30日 聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	—	子30
		使徒言行録2：1-13	使徒言行録1：8
聖霊が注がれて神と教会に仕える者とされている喜びを分かち合おう。			
6月6日	神と人を愛する	問4	ハイデルベルク4, 64, 86
		ルカ10：25-37	ルカ10：27
神を知る喜びは、神と人を愛する喜びである。神と人を愛する愛へと招く。			
13日 花の日	神の御言葉	問5	ウ告白1章、ウ小2、ウ大3
		ペトロ二1：16-21	ペトロ二1：21
聖書を通して神を知る。その権威と恵み。聖書を通して神は今も語っておられる。			
20日 父の日	愛の手紙	問6	ウ告白1章、ウ小3、ウ大4-5
		ルカ24：13-35	ルカ24：23
聖書は神の壮大な物語を告げ知らせている。神の愛と福音を聞き取る。			
27日	霊なる神	問7	ウ小教理4、ウ大教理8
		ヨハネ4：1-42	ヨハネ4：24
神は霊であり、人格的な神であられる。目には見えない生けるまことの神を仰ぐ。			

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

テキスト ヨハネによる福音書19章17～30節

十字架にかけられるイエスの姿を描いている箇所です。ヨハネの福音書では「ユダヤ人の王」と掲げられて十字架にかけられる姿を描き、衣服のくじ引きのこと、「渴く」と言われたこと、槍でわき腹をつかれることの三つを通して聖書の御言葉の成就を伝えています。(28～37節)

(1) 「ユダヤ人の王」

ヨハネ福音書の十字架の描写は三つの事柄でまとめられています。一つは「されこうべの場所」すなわちヘブル語でゴルゴダということ。二つ目は他の二人の真ん中で十字架につけられること。そして最後は「ユダヤ人の王」という罪状書きのことです。「されこうべ」＝「ゴルゴダ」という名称の説明や他の二人と一緒に、それもその真ん中で十字架にかかるという描写はイエスの死が単なる死ではなく、呪われた死であることを想起させますし、また旧約のメシア預言にある「罪人のひとりに数えられた」(イザヤ53:12)姿を思い出します。

ヨハネによる福音書は、十字架につけられたイエスこそが真の「ユダヤ人の王」であることを描きたいのでしょう。この罪状書きを見た祭司長たちがピラトに『「ユダヤ人の王」と自称した』という書き直しを要求しますが、ピラトに拒否されます。こうしたやり取りの記録も、「自称したのではない、この方こそ真の王であられるのだ」ということを伝えたいのでしょう。罪状書きが「ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた」ことはこの主張点を強調しています。三つの言語で書かれていたということは誰にでも読めるということを示唆します。つまりは誰もが罪人の一人として十字架にかかったイエスを「ユダヤ人の王」として見たのです。もちろんイエスを十字架にかけると主張した当時の祭司長たちやユダヤ人たちは、

王であると自称した冒涇や謀反の罪人と見ていたでしょうが、ヨハネはこのように十字架にかかったイエスこそがメシアであり真の王であると伝えたいのです。この後、十字架につけた兵士たちがイエスの服をくじ引きで決めることを通して、自覚しないままに聖書の言葉を成就しますが、この罪状書きも同様に、この罪状書きを名目にイエスを十字架にかけた人々は、実はこの方こそが真の王であることを悟ることなく、聖書の言葉を成就していきます。使徒2章36節参照。

(2) 聖書の言葉の実現

ヨハネ福音書ではこの十字架にかかったイエスの足下で兵士たちのくじ引きによる服の取り合いと四人の女性を含む弟子たちとイエスとのやり取りが描かれています。この対照的な人々のやり取りを通して、24節「聖書の言葉が成就」し、27節「そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った」という新しい関係が始まったのだというのが福音書の話の流れでしょう。

どちらも同じイエスの足下での出来事ですが、非常に対照的で一方ではくじ引きで取り合う姿が、他方では自分の家に引き取って世話をする姿が描かれています。マルコ福音書ではイエス様の十字架上で死を見た百人隊長が「本当に神の子だった」と告白しますが、この兵隊たちはくじ引きをして皮肉にも聖書の言葉を成就していきます。十字架のイエスを見上げるものない者たちの姿を描きたいのでしょうか？

逆に十字架上のイエスに聴く者たちはこの時から血縁関係によらない新しい関係を持ち始めます。この関係は十字架にかかるイエスによって結びつけられたものです。「そのときから」という言葉はまさにこの関係の中心がイエスによって始められたことを示しています。(村手淳)

テキスト ヨハネによる福音書19章17～30節

(単元のねらい)

我々の日曜学校像は、契約の子らはもちろん、地域の子どもたちを教会の交わりの中に招き入れ、主イエス・キリストを紹介し、共にそして一人で祈ることへと教え導き、教会員として育て訓練することにある。その中心に礼拝式がある。何故なら、礼拝式における生けるキリストとの出会い、交わりなしに、我々の営みは実らないからである。説教者はもちろん教師会で祈りを集めて、本日の主題、神の愛の極地である十字架を、信仰告白として喜びを持って語りたい。なお、子どもカテキズム問24を参照のこと。

「私たちの身代わりになって死んでくださったイエスさま」

ほとんどの教会堂の屋根には、十字架が建っています。皆は教会に来る時、十字架を見上げていますか。先生は、皆が礼拝堂に入る前に、十字架を見上げることができたら良いと思います。僕たち私たちの教会堂の十字架は、塔の上に建っています。その塔は、王冠のような格好をしていることに気づいていますか。僕たち私たちの教会は、イエスさまの十字架を誇りにしているのです。この町のすべての人たちにイエスさまの十字架の意味を知らせたいのです。どんなに素晴らしい意味があるのかを知ったら、僕たち私たちのようにイエスさまの十字架を誇りに思うに違いないと思います。先生にとって、イエスさまの十字架ほど大切なものはありません。

それは、夜のことでした。イエスさまは、弟子たちと夕食を食べ、彼らの足を洗ってあげて、説教をしていました。その後、イエスさまはいつもお祈りする場所へと出て行かれました。するとそこに、松明や灯火、武器を手にした大勢の兵隊たちが待っていましたとばかりに、駆け集って来たのです。弟子の一人のイスカリオテのユダが兵隊たちを連れて来たのです。兵隊たちはイエスさまを乱暴に捕らえて縛ってしまいました。イエスさまは、不思議なことに何の抵抗もなさらず、捕まえられてしまいました。そして縄で縛られて、大祭司カイアファのところに連れて行かれ、その後

に、ローマ総督のピラトの所に連れて行かれました。祭司長たちやその下役たちは、何としてもイエスさまを殺さなければならないと考えているのです。もうずっと前から、イエスさまのことを憎くて仕方がなかったのです。自分たちの教え、自分たちの振る舞いをイエスさまが否定するので、我慢ならなかったのです。大勢の人たちがイエスさまをメシアとして歓迎して、自分たちのところに来る人たちがいなくなってしまうからです。イエスさまのことが妬ましくなったのです。イエスさまが聖書の正しいお話、神さまの福音を語ってくださればくださるほど、素晴らしい神さまの子としての奇跡を行なえば行なうほど、祭司たちやファリサイ派の人たちは、早いうちに殺さなければ、ユダヤの国は、自分たちの思うとおりにならなくなると考えたのです。

イエスさまは、そのような妬み、憎しみに対して、暴力やののしりに対して、それをそのまま、受け止められました。逃げることもお出来になったはずですが。彼らの暴力に対してイエスさまがもしも神の子の力を用いれば、どんなすごい武器をもった兵隊たちでも、どんなに強く大勢の兵隊たちが一斉に飛びかかっても、負けてしまわれることなどありません。けれども、イエスさまは、黙って、彼らのするままに任せてしまわれるのです。

少しも抵抗しないイエスさまに対して、祭司長、

下役だけではなく、次第に大勢の群衆までが叫び始めました。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」そして遂に、イエスさまは二人の強盗と一緒に十字架につけられました。つまり、この男は、人殺しどもと同じような悪人、神さまから呪われた者なのだということなのです。

十字架につけられたイエスさまのおそばには、弟子の中でただ一人、おそらくこの福音書を書いたヨハネさんだけがイエスさまを見上げていました。すると、イエスさまは、お母さんのマリアさんに向かって、「このヨハネは、あなたの子です。」「このマリアは、あなたの母です。」とおっしゃいました。イエスさまは、十字架の上から、その激しい痛みの中でなお、マリアのことが心配であったのでしょう。最後の最後まで、イエスさまは、御自分を喜ばすためではなく、周りの誰かのために、心を配ってくださるのです。そしてそればかりではなく、やがてイエスさまを信じる人たち、僕たち私たちが今このように神の家族となることを教えてくださったのです。だから、僕たち私たちも、イエスさまを信じているので、天のお父さまの子どもたちとなっているのですし、皆が神さまの家族とされているのです。

皆は考えたことはありませんか。どうして、イエスさまは、十字架につけられることが分かって

おられるのに、お逃げになられなかったのでしょうか。お望みになられれば簡単に十字架から降りてこられるのに、どうして降りられないのでしょうか。それは、すべて、天のお父さまの御計画を実現するためなのです。神さまの御計画とは何でしょうか。それは、僕たち私たちの罪を償うことです。罪を贖うことです。神さまの前に罪人、神さまを一番にしないで、自分を一番に、つまり神さまにしてしまうこと。自分がしたいことだけをして、したくないことをしないこと。神さまを愛さないし、お友だちをも愛さないこと。そのような自分中心の考えや行いをして、神さまに背いている人は、神さまから刑罰を受けなければなりません。それは、神さまの怒りを受けることです。それは、神さまの罰を受けることです。けれども、イエスさまは、本当は僕たち私たちが受けなければならぬ、その罰、怒りを、僕たち私たちの身代わりに十字架で受けるために、罪を償うためにこの地上に来てくださったのです。イエスさまは、天のお父さまが僕たち私たちの罪を赦して神さまの子として永遠の命を与えるために、十字架について死んでくださったのです。この尊い命の犠牲、この命がけの愛によって、僕たち私たちは神の子として生まれ変わることができるのです。

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ペトロの手紙一2章24節

そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担っていただきました。

わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。

そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。

〈ねらい〉

イエス様がわたしたちの罪のために身代わりとなって死んでくださったことを伝える。

〈展開例〉

みんなは、おとうさんやお母さんのお手伝いをいろいろとすることができますか。たとえば、部屋の掃除をしたり、食事の後片付けをしたりとができるね。けれども、代わりにできないこともあります。例えば、遊びに夢中になっている弟の代わりにご飯を食べてあげても、弟のおなかはいっ

ぱいになりませんね。病人の代わりに病気になることもできませんね。

では、死刑になる人の代わりに死んであげることができるかな？ これは代わりにしてあげることができることだよ。でもいやだね、代わりに死ぬなんて、そんな勇気も愛もないね。

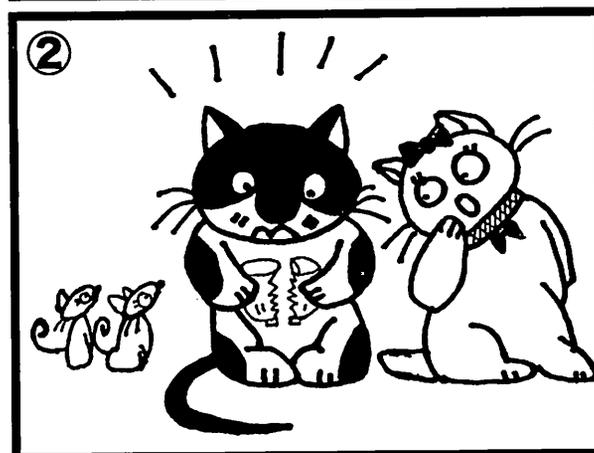
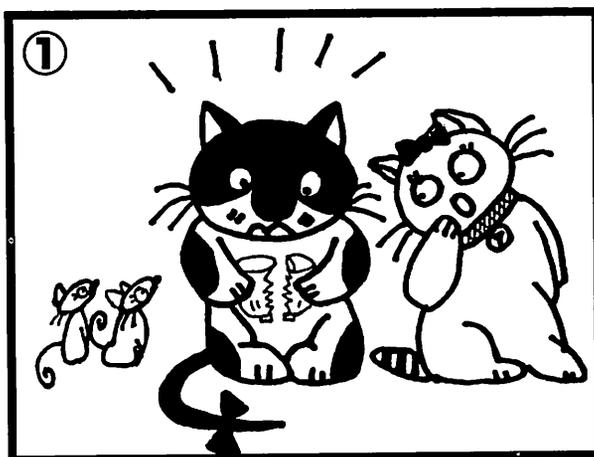
しかし、イエス様は罪のために死ななければならぬわたしたちの代わりに、十字架に死んでくださったのですよ。なんと大きな愛でしょうね。イエス様に心から感謝しましょう。

〈やってみよう〉

まちがいさがし

①と②の絵のちがうところが五つあります。

さがしてみましよう。○をつけてね。



〈ねらい〉

わたしたちがそれぞれ罪を犯す者であること、その罪は悔改めなければならないものであること、イエス・キリストの十字架は、わたしたちの罪をわたしたちの代わりに償ってくださるものであることを確認する。

〈分級教師へのアドバイス〉

子どもたちに自由に話させると、教師の側で思ってもみなかったことを言い出すことがあります。下品な言葉遣い、家族のプライベートなこと等、その場にふさわしくないことにも、驚いて慌ててしまうのではなく、できるだけさりげなく、他の話題に移れるように心構えをしておくことが必要でしょう。

問い掛けると、かならず、わざわざ反対の答えをしたがる子どもがいます。慌てて訂正させたり、困ったりするとかえって喜んでしまいます。問い掛けの方法を考えたり、重要なポイントでは教師の側から答えを出したほうがよいかもしれません。

また、場合によっては本来考えていた主題と外れていってしまっても、その日はそれで良いと割り切って、色々な話を聞くのもよいかもしれません。

〈展開例〉**①十字架ってどんなものか知ってる？**

(回答例)

- ・教会の屋根の上についている
- ・イエス様が十字架についた

②イエス様は何で十字架についたの？

- ・捕まったから
- ・ユダに裏切られたから
- ・神様の計画のため
- ・わたしたちが罰を受けないようにするため

③何でわたしたちは罰を受けるの？

- ・わたしたちが罪を犯したから
- ・わたしたちが悪いことをしたから

④みんな、悪いことをしてるの？

- ・してない
- ・わからない

⑤けんかは？わるぐちは？

お母さんの言うことを聞かないとか？

- ・している

⑥じゃあそんな罪をイエス様の十字架で赦してもらえるようにお祈りしましょう。**〈祈り〉**

天のお父様。わたしたちは、仲良くしなければならぬのにけんかをしたり、悪口を言ったり、お母さんの言うことを聞かなかったり、神様が悲しむような悪いことばかりしてしまいました。神様どうかわたしたちを罰しないで、イエス様の十字架によって赦してください。イエス様の御名によってお祈りします。

〈ねらい〉

①イエス・キリストの十字架の苦しみが、どれほど深く、激しい苦しみであったかを覚えることと、②その苦しみに耐えられのは、自分自身の罪が赦されるためであったこと、③それほどまでに、イエス様が愛してくださっていることを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「教会の十字架を初めて見たとき、どんなことを感じましたか。」

「友だちから、十字架の意味を訊かれたら、どのように説明しますか。」

2. イエス様の十字架の苦しみについて、話し合ってみよう。今まで自分が経験した苦しみを互いに分かち合ってみよう。

を互いに分かち合ってみよう。

3. それら私たち人間の苦しみとイエス様の十字架の苦しみとの違いを考えてみよう。
4. それほどまでにして、十字架の苦しみを耐えられたのは、何のためか、そしてだれのためか、考えてみよう。

〈祈り〉

天の父なる神様、私たちが罪や死から救われるために、あなたのひとり子をお送りくださってありがとうございます。イエス様、私が受けるはずの罪の罰を、私に代わって受けてくださって、ありがとうございます。あなたの愛を感謝します。

〈聖書をさらに深く〉

1. イエスさまは「ユダヤ人の王」との罪状書きによって十字架にかけられました。当時のユダヤの人々が期待していた王様のイメージ（政治的な指導者）、また私たちが考える王様のイメージについて話し合ってみましょう。そして、聖書の教える真の王とは、仕えられるためではなく、仕えるために来られた王であり、十字架の愛における王であることを理解しましょう。
2. イエスさまが真の王であったことは、旧約聖書の預言の成就によって明らかにされています。24、28節の言葉が、詩編22編の言葉であることを確認しましょう。また22編1節はマタイ、マルコにおける十字架の言葉であり、この詩編が旧約時代における王の代表ダビデのものであることも合わせて確認しましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. イエスさまの十字架に関わる子どもカテキズムは、問24～27です。大切な言葉は、「私たち罪人の身代わりとして」、つまり、私たちのために、ということです。私たちは、誰かのために生き、そして死のうなどと思えるでしょうか。話し合いながら、イエスさまの身代わりの愛について考えましょう。
2. 問25～27にあるとおり、イエスさまのお働きは、預言者・祭司・王としての働きでした。その中で、十字架の死が特に祭司としての働きであることとを確認しつつ、同時に今日の聖書箇所（ユダヤ人の王）から、十字架が王としての働きでもあることを理解しましょう。十字架は、私たちの罪を赦すと共に、私たちを苦しめる悪の力に対する勝利の宣言でもあります。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

5日（月曜日）

マタイによる福音書21章1～17節

Q. イエスさまは神殿のことを何の家と言った？

6日（火曜日）

マタイによる福音書26章1～25節

Q. ユダは銀貨何枚のためにイエスさまを裏切った？

7日（水曜日）

マタイによる福音書26章26～46節

Q. イエスさまは食事の後、どこでお祈りをした？

8日（木曜日）

マタイによる福音書26章47～75節

Q. ペトロはなぜイエスさまの仲間だと気付かれた？

9日（金曜日）

マタイによる福音書27章1～26節

Q. イエスさまの代わりに釈放されたのは誰？

10日（土曜日）

マタイによる福音書27章32～66節

Q. 番兵がイエスさまのお墓を見張っていたのはなぜ？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書20章1～10節

イエス様の復活の箇所です。とくにこの箇所はからになった墓の話で、ヨハネはマグダラのマリアの報告を受けた弟子たちによる墓の検分を描いています。

(1) からの墓の意味

どの福音書にも記されているからの墓のお話は、復活信仰を証明したり、あるいは復活信仰そのものを生み出したりするお話にはなっていないことにまず注目したいと思います。このヨハネの箇所も、9節「復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」と丁寧に解説されています。どの福音書もこれとよく似ていて、からの墓をみた弟子や婦人たちがこのことですぐに悟ってイエスが復活した！とか、聖書の言葉が実現した！などと喜んだりした様子はどこにも描かれていません。ヨハネも、8節で、二人の弟子が「見て、信じた」と描いていますが、これはこの後の言葉から理解して、あくまでも最初に目撃して伝えたマグダラのマリアの報告を信じたということにすぎないようです。むしろマグダラのマリアもこの二人の弟子もそうですが、からの墓を検分した人たちは途方に暮れてしまったというのが実際の出来事だったのでしょう。(20:13を参照のこと)

ですからからの墓のお話は復活信仰を証明したり証言したりするお話ではなく、「亜麻布と頭を包んでいた覆い」がそのまま置いてあったことがに意味があると理解すべきなのでしょう。つまり、復活されたイエスがちゃんと体を持っていること、復活とは墓をからにして体ごと起きあがる出来事であることを伝えたいなのでしょう。初代教会の中には霊肉二元論や「復活がすでに起こった」(テモテニ2:18)というグノーシス主義的な信仰があったことが知られています。福音書がからの墓のお話を描いて伝えてきたことは、こうした間違った考え方に対して、本来の復活とは体ごと起

きあがることであると伝えたいのです。ですからマリアが「主が墓から取り去られました」と報告しましたが、亜麻布や覆いはちゃんとそこにありましたが、福音書はそれを描いています。消えたのではなく取り去られたのではなく、体ごと起きあがったのです。それが復活であると伝えたいのです。

(2) 復活を信じる信仰

前述したようにからの墓のお話は復活信仰の証明や復活信仰を生み出すお話ではないことを確認しました。マグダラのマリアも「取り去られた」と言い、また「泣いて」いました。マリアの報告で急いで見に来た弟子たちもマリアの言葉は信じて、まだ「聖書の言葉を理解していなかった」のです。イエス様が復活したという信仰はこの後泣き崩れて途方に暮れているマグダラのマリアが、復活のイエスに出会って初めて「主を見ました」と言って誕生します。つまりご自身を私たちの前に現れる復活の主との出会いによって初めて信じることができるようになります。

またヨハネは「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉」と解説を付けて、その復活がちゃんと聖書の言葉に基づいているものであることを教えています。このときは理解できなかった弟子たちも後にはイエスの復活を信じるのですが、そのときには当然聖書の言葉を理解したのですから、復活の主との出会いと聖書の言葉による理解があって初めて復活を理解するのでしょうか。からの墓のお話は前述の体ごとの復活の教えから入り、聖書の言葉と主との出会いによる信仰へと導くためのものなのです。主と出会い、また主によって「復活されることになっている」という聖書の言葉の解き明かしをいただくことによって、エマオ途上の弟子たちのように心を燃やし、信仰の目が開けらるのです。

(村手淳)

テキスト ヨハネによる福音書20章1～10節

〔単元のねらい〕

キリストの復活、おめでとうございます。キリストの復活によって、教会は誕生し、私共は救われました。聖書は、この事実を告げる。これを信じる者によって、聖書の報せが、届けられる。復活の事実は、主の日の礼拝式の度ごとに確証され、体験される。礼拝式の成立は、キリストの復活と臨在に基く。その基本的事実を自覚的に悟らせた。キリストの復活が、我々自身の命であり、復活であることを知らせる。なお、子どもカテキズム問24を参照のこと。

「イエスさまの復活はわたしたちの復活」

十字架につけられたイエスさまは、お墓の中に入れられました。金曜日のことです。金曜日の夜になれば、安息日が始まります。そうなれば、イエスさまの亡骸をお墓に葬ることができません。イエスさまが息を引き取られたのは、午後3時でしたから、十字架の側にいたわずかの人たちが大急ぎで、お墓につれて行きました。そのお墓は、まだ誰も葬られたことのない新しいお墓でした。

さて、安息日が終わるのを、太陽が昇るのをいまかいまと待っていた女のお弟子さんがいました。大急ぎでお墓に入れるしかなかったので、心を込めてイエスさまの遺体を綺麗にして、お墓も整えてさしあげたいと思ったのです。マグダラのマリアさんです。さあ、彼女がお墓につくとどうしたのでしょうか。洞窟のお墓には、大きな石を転がしてふたをしていたのです。ところが、その石が転がしてあるのです。「わあ、イエスさまの遺体が盗まれた！」びっくりしたマリアさんは、大急ぎで、シモン・ペトロともう一人のお弟子さんのところ、たぶんヨハネさんですが、行ってこう告げました。「大変です。主が墓から取り去られました。」ペトロとヨハネは、全力でお墓めがけて走り出しました。若かったヨハネさんは、ペトロより早くお墓につきました。言われたとおり、墓石が転がっていて、中が見えました。見ると、イエスさまを包んでいたはずの亜麻布が見えました。けれども、彼は中に入りませんでした。しばらくして、ペトロが到着すると、ペトロはお墓の

中に入って行きました。ヨハネもその後について入りました。すると、お墓は空っぽでした。イエスさまの亡骸がどこにもないのです。イエスさまを包んでいた亜麻布があるだけなのです。

そうです。イエスさまは約束どおり、死者の中からお甦りになられたのです。ところが、お弟子さんたちは空っぽのお墓を見ても、本当にイエスさまが復活されたのだとは信じるできませんでした。聖書に約束されていたイエスさまの復活を理解することができませんでした。けれども、本当にイエスさまはおられなかったのです。

二人の男のお弟子さんたちはこの後すぐに家に帰って行きました。けれども、マリアさんは、歩いて帰る元気もなく、泣いていました。しかし、そこで、お甦りになられたイエスさまとお会いすることができるのです。本当にイエスさまは約束どおり十字架で死なれて、三日目に復活されたのです。それは、僕たち私たち、罪人の身代わりになって十字架に死んでくださったことによって、僕たち私たちの罪の刑罰、罪の支払わなければならない裁きとしての死、滅び、神さまからの怒りを身代わりになってくださったことを、証しづけるためでした。イエスさまは、父なる神さまの御計画を完全に実行され、完全に天のお父さまに従われたので、僕たち私たちの罪を償うことが本当にできたのです。父なる神さまは、イエスさまの十字架を完全に受け入れられたのです。だから、その証しにイエスさまを死人の中から甦らせられ

たのです。

今日の暗唱聖句をもう一度、唱えてみましょう。ヨハネによる福音書の中のイエスさまのみ言葉です。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は決して死ぬことはない。」これは、イエスさまがラザロさんを生き返らせた物語のなかでおっしゃった御言葉でした。ラザロさんは、死んで四日間もたっていました。死体はもう既にくさい臭いが始めていました。けれども、イエスさまはそのラザロさんを生き返らせたのでした。ラザロのお墓にも、石が転がしてあってふたになっていました。イエスさまは、「その石を取り除けなさい」とおっしゃいました。そして、「ラザロ、出て来なさい。」と大声で叫ばれました。すると、布でくるまれていたラザロが出てきたのです。イエスさまは、まだ、十字架で死なれて復活なさる前に、「わたしは復活であり、命である。」と宣言されました。その宣言が嘘ではないことを証明するために、ラザロさんを生き返らされました。そして今、ラザロを生き返らせたイエスさまは今、御自分が復活されたのです。

さて、イエスさまが復活されたことによって、

僕たち私たちはどうなったのでしょうか。イエスさまの復活は僕たち私たちにどんな祝福が与えられたのでしょうか。いくつも数えることができます。第一、イエスさまがお甦りになられなかったら、ここに教会はありません。日曜日に何故、僕たち私たちはここに集ってくるのですか。イエスさまが復活したから、復活したイエスさまがここに聖霊によって一緒にいてくださるからです。第二に、イエスさまを信じたらイエスさまと一つに結ばれて、肉体の命だけではない、永遠の命、本物の命を受けることができます。僕たち私たちは、動物や植物が与えられている命だけで生きているわけではありません。イエスさまの命が信仰によって僕たち私たちにも注がれています。流れていません。つながっているのです。だから、たとえ肉体が死んでしまっても、必ず肉体が復活します。そして、肉体は死んでも、今イエスさまを信じているなら、ここで、イエスさまの命、復活の命、永遠の命と直結しているのです。滅びることはないのです。イエスさまは復活されました。死を滅ぼしました。イエスさまこそ、本物の救い主です。このイエスさまを礼拝している僕たち私たちも、復活します。死に負けてしまうことはありません。 (相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ヨハネによる福音書11章25節

イエスは言われた。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」。

〈ねらい〉

キリストが死に勝利し、復活してくださり、わたしたちに永遠の命と復活を保証してくださったことを伝える。

〈展開例〉

電車や自動車でトンネルを通ったことがあるでしょ。長いトンネルや短いトンネルがあるね。トンネルを歩いて通ったことあるかな？ それもながーながーいトンネルを。もし、一時間歩いても十時間歩いても、いや一日歩いても一月歩いてもまだまだトンネルだったらどうだろうね。暗いから不安でこわいし、何の喜びも楽しみもない

ですね。

実は、イエス様がいらっしやらなかったら、わたしたちの生活はいつまでもそのながーいトンネルを歩いているようなものなのです。どんなに進んで行ってもトンネルの終わりが見えません。ありません。

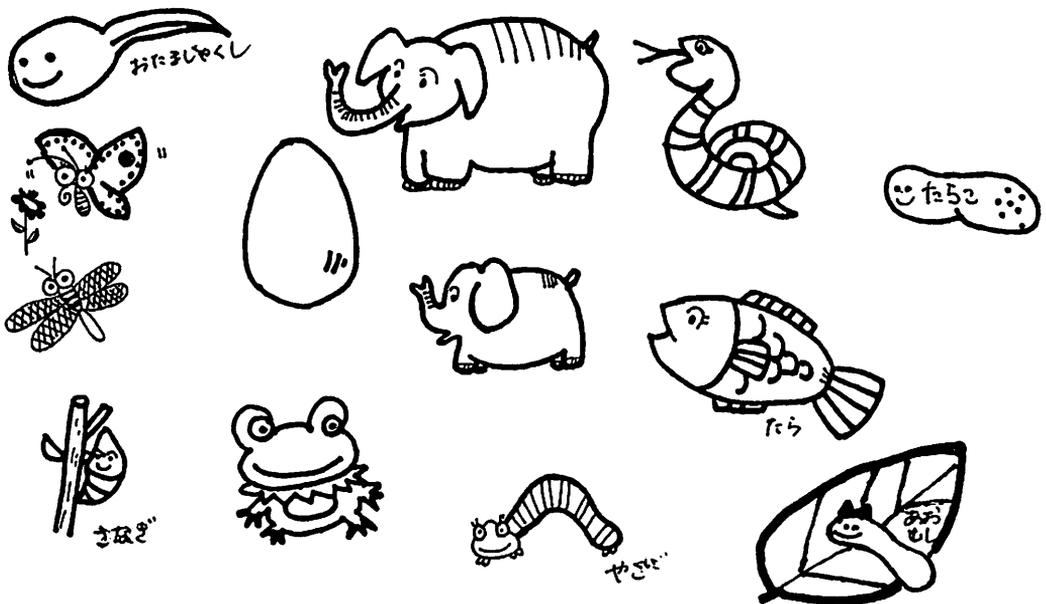
でも、イエス様が救いのみ業をしてくださいました。十字架に死なれ、三日目に復活してくださいました。そのイエス様を信じるわたしたちに罪のゆるしと永遠の命を与えてくださいました。それは、トンネルを抜け出したみたいに、明るい新しい生活なのです。喜びや感謝があふれる生活です。復活のイエス様が共にいてくださるからです。

〈やってみよう〉

あたらしいのちをさがそう！

親子を線でむすんでね。

おたまじゃくしのお母さんはだ～れ？（ひとつのこります）



〈ねらい〉

日曜日の礼拝式がキリストの復活の記念であり、わたしたちがその喜びにあずかる日であることを覚える。

〈分級教師へのアドバイス〉

小学校低学年ですと死についての認識や永遠についての理解が難しいかもしれませんので、復活にあずかること、永遠の命についてはあまり触れていません。子どもによっては、近親者や知り合いの死を経験している子どもがいるかもしれません。過度に悲しみを強調したり、心の傷にならないようにすれば、永遠の復活の命について触れる機会になるかもしれません。

〈展開例〉

①今日は何の日

(回答例)

- ・ 4月11日
- ・ 日曜日
- ・ イースター

②イースターって何の日？

- ・ イエス様が復活した日

③そうですね。イエス様が復活された「うれしい」日ですね。

それじゃあ、日曜日って何の日？

- ・ お休みの日
- ・ 教会に行く日
- ・ イエス様が復活された日

④そうです。イエス様が復活されたのがあまりにもうれしいので、一年に一回のイースターでは足りなくて、毎週一回日曜日に教会でお祝いするんですね。

⑤日曜日に教会に来ると何がある？

- ・ 礼拝する
- ・ 聖書のお話が聞ける
- ・ 分級でみんなと遊べる
- ・ イエス様の復活をお祝いできる

⑥教会で、聖書のお話を聞いて、復活したイエス様がわたしたちも復活させてくれるように祈りましょう。

〈祈り〉

天のお父様。わたしたちのためにイエス様を復活させてくださってありがとうございます。わたしたちもイエス様と一緒に復活することが出来ますように、毎週の礼拝式での聖書のお話が良くわかるようにしてください。イエス様の御名によってお祈りします。

〈ねらい〉

①まず、イエス様の復活の事実を理解する。②イエス様の復活が、どのような意味を持っているかを考える。③イエス様の復活が、私たち自身に与えている約束と影響を覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）
「将来、あなたがイエス様によって復活させていただいたときに、だれに会いたいですか。」
2. イエス様が復活されたとき、どのようなことが起きたか、聖書を開いて話し合ってみよう。
3. イエス様が復活されたことは、イエス様による十字架の救いが完全だったことを意味しています。もし、イエス様が復活されなかったとしたら、私たちはどうなりますか。
4. イエス様は、週の初めの日（日曜日）に復活

され、その後も日曜日に弟子たちのところに来てくださったので、それまで土曜日におこなわれていた礼拝が日曜日（主の日）に礼拝がおこなわれるようになりました。毎週の礼拝は、今も生きておられ、復活されたイエス様と礼拝でお会いするお祝いの日です。

5. イエス様の復活は、将来、私たちが復活していただくことの保証です。イエス様の復活は、私たちの復活に先立った「初穂」としての復活です。

〈祈り〉

イエス様、私たちに復活を約束してくださって、ありがとうございます。あなたが、実際に復活してくださったので、私たちも将来、あなたによってよみがえらせていただけることを感謝します。毎週の礼拝で、私の心をイエス様の復活を喜ぶ喜びで満たしてください。

〈聖書をさらに深く〉

1. イエスさまが復活されたとき、最初は弟子たちもそのことになかなか気付かなかったことに注意を払いましょう。死んだ人が生き返るということは、私たちにとっても驚きですが、当時の弟子たちにとっても信じられないことでした。お墓がからになっていたら、私たちはまずどう考えるでしょう。誰かが死体を盗んだ？ 実は死んでいなかった？ 話し合ってみましょう。
2. 実際に復活のイエスさまを見ることのできない私たちは、どのようにしてイエスさまの復活を信じることができるのでしょうか。9節にすでに、聖書の言葉を理解することが、復活を理解することであるということが示されています。この箇所以外で、イエスさまの復活の場面について知っていることを話し合ってみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 復活に関わる子どもカテキズムは、問24～27です。大切な言葉は、「神と共に永遠に生きる祝福に生かされています」です。イエスさまの復活は、私たちもまた永遠の命を生きるようになるためでした。人は死ぬとどうなるのか、みんなはどう考えているか話し合ってみましょう。何もかも消えてなくなる？ 魂だけが永遠に生きる？ 違う生き物に生まれ変わる？ 聖書は、肉体も含めた私自身が、永遠の命に復活することを教えています。
2. イエスさまの復活を信じる者は、イエスさまと共に、預言者・祭司・王として、御言葉を語り、感謝をささげ、悪と戦って、生き始めます（ハイデルベルク問32）。永遠の命を生きるとは、死後の世界のことだけでなく、今すでに始まっている信仰生活のことでもあることを確認しましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

12日（月曜日）

ヨハネによる福音書20章11～31節

- Q. イエスさまの復活をなかなか信じようとしなかった弟子は？

13日（火曜日）

ヨハネによる福音書21章25節

- Q. 復活されたイエスさまのことに気付いて、海の中に飛び込んだ弟子は？

14日（水曜日）

マタイによる福音書28章1～20節

- Q. イエスさまは最後に弟子たちに何を命じられた？

15日（木曜日）

マルコによる福音書16章1～8節

- Q. 弟子たちは復活されたイエスさまとどこでお目にかかる？

16日（金曜日）

ルカによる福音書24章1～35節

- Q. 二人の弟子は、いつ、復活のイエスさまのことに気付いた？

17日（土曜日）

ルカによる福音書24章36～53節

- Q. 復活されたイエスさまは何を食べられた？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書4章1～26節

今日の箇所は、イエスと弟子の一団がユダヤを去ってガリラヤへ向かう途中サマリヤの町を通られ、そこにあるヤコブの井戸で休憩をとられた時のお話です。水を汲み来たサマリヤの女性とイエス様との会話で話が進められます。

(1) 「生きた水」

井戸端で休憩をしておられたイエス様のもとにサマリヤの女性が水を汲みに来たところから話が始まります。ちょうど井戸の水を汲むところでしたから、最初の話は「生きた水」の教えになります。後半は礼拝の話になりますが、その礼拝をもたらしたもうイエスこそメシアであるということが話題の中心となっています。

まず何よりも最初に教えられることは「生きた水」のことで、イエス様はこの水のことを「わたしが与える水」と言い、また「永遠の命に至る水」と言い換えておられます。井戸の水とは区別して語っておられるところから、井戸の水はよんでいるのか、或いは「生きた」に反対で「死んだ」水、つまりは人の命を本当には潤してくれない一時的なものというような意味でしょう。とにかく霊的なものの象徴であることは明らかです。イエス様は、人の魂を本当に潤すこうした水は「わたしが与える水」であり、「永遠の命に至る水」なのだと言われました。そしてこの水は「父ヤコブ」の井戸がくれるのではなく「私イエスが与える」ものであり、それは「また渴く」ことがない「永遠の命に至る水」それも「その人の内で泉」となるようなまさに本当に人を潤す水なのだ！教えたかったのでしょう。そこにはサマリヤの女性がわざわざ「ヤコブの井戸」に水を汲みに来た背景があり、また後で明らかにされるこの女性の現在の夫との関係や、さらにはイエス様が「また渴く」と教えておられるところから、この女性の魂の飢え乾きが情景にあるのでしょう。イエス様は

全く唐突にこの女性にこんな話をされたのではなく、この水を欲してやってきた女性の心と姿を見て、メシアとして女性にこの話をされたのだと思います。

「サマリヤの女性」—ユダヤ人はサマリヤ人と交際しないということや、そもそもこの話がこのサマリヤでなされたということに大きな意味があるように思われます。確かに「救いはユダヤ人から来る」のですが、本来交際しない、だから頼まれたり口をきくことさえなかったであろう人々の中にさえイエス様はこの命に至る水を与えらる方でありました。

(2) 「このわたしである」

彼女は現在の夫のことを言い当てられたことから「あなたは預言者」だと見ます。そこで直前にイエス様から聞いた「生きた水」を得るためにも「父を礼拝」することについてイエス様に訪ねたわけです。イエス様の答えは「父を礼拝する時が来る」こと、「今その時」が来ていること、そしてどうしてそうなのかと言えば「キリストと呼ばれるメシア」が来たからであり、それは「あなたと話をしているこのわたしである」ことを彼女に教えました。

話の中で「あなた方は知らないものを礼拝しているが、私たちは知っているものを礼拝している、救いはユダヤ人から来るからだ」と言われました。これは「知っている」という神知識のことで、「ユダヤ人」から救いが来ると言われるのもこの「神知識」のことを指しているのでしょうか。

このように父を礼拝する時が来るのは、その神知識を体現しているメシアイエスが来られたからであり、またこのメシアを遣わした父が「このように礼拝する者を求めておられるから」なのです。

(村手淳)

カテキズム 子どもカテキズム問1

子どもカテキズム

問1 私たちは何のために生きるのですか。

答 私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです。

ウェストミンスター小教理問答

問1 人のおもな目的は、何ですか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。

〈人生の目的〉

「何のために生きるのか」。このことは、誰しも一度は自らに問いかけるべき大切な事柄です。現代は、このことに真剣に悩むことが少なくなっていますから、まずこのことを「問わせること」、口に出してみることでそのものが、たいへん大切なことではないでしょうか。

この問いに答えることは、たいへん難しいことです。学校などの公教育の場では、この問いに答えることは困難でしょう。まことの神を知り、神に喜ばれる生き方を教えてくれるところは、教会のほかどこにもありません。教会は、聖書が語るところに基づいて、「何のために生きるのか」ということを、共に考え、学ぶ場なのです。教会また教会学校こそが、「これが人生の目的です」、「これが道です」と指し示すことができます。この特権を与えられていることを喜び、感謝してこのことに励みましょう。

〈神を知り、神を喜ぶ〉

子どもカテキズムの問1は、ウェストミンスター小教理問答の問1を土台にしています。加えて、カルヴァンのジュネーヴ教会信仰問答に基づいて、「神を知ること」を挿入しました。人生の目的は、神を知り、神を喜び、神の栄光をあらわすことにあります。今回は、前半の、神を知ること、神を喜ぶことについて。

信仰は知ることに始まります。知識のない信仰

はありえません。「実に信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」(ローマ10:17)。もちろん知識が信仰を生み出すものではありません。ですから、生けるキリストを提示し、指し示す「言葉」が求められます。また、私たちにおいて働かれる聖霊の御業を求めて祈ることが大切です。

信仰に至る知識とは、「神が私たちを愛してくださっている、それ故にこそ独り子イエス・キリストが十字架につけられ、復活された。天に挙げられ聖霊を遣わされ、今なお私たちと共にいてくださる」、この生けるキリストを知り、神の愛を知る知識です。この神の愛を知るところで、私たちの喜び、神を喜ぶ喜びが始まります。そこでは、神の造られた世界を喜び、与えられた命と人生を喜ぶことも始まります。健やかな人生とされるのです。神を喜び、礼拝することこそが、永遠に続く私たちの業なのです。

〈子どもカテキズムの全体構成〉

子どもカテキズムは、問1だけでなく、その全体が人生の目的を語る構成になっています。第一部で「人生の目的」について語り、第二部「信仰の道」で、神を信じる信仰に生きることを教えます。第三部「生活の道」では、感謝と献身の道を教えます。私たちの「信仰と生活」のすべてにおいて、神を知り、神を喜ぶ人生が展開されるのです。(望月信)

テキスト ヨハネによる福音書4章1～26節

(単元のねらい)

子どもカテキズムに基く二年間のカリキュラムが始まる。既刊の弊誌創刊号から8号までを是非、参照して頂きたい。創刊号では、この欄はなかったが、筆者は「カテキズム研究」において、問1～問4までを担当し、そこで、「狙い」について記した。テキストは、サマリアの女性と主イエスとの出会いの物語である。問いーの人生の目的を一言で言えば、「礼拝」である。子らを、主イエス・キリストとの出会いが起こる礼拝式へと招き、そのために祈りたい。

「よかつたね、人生の目的を知ったサマリアの女性」

ある日のこと、イエスさまとお弟子さんたちは、ユダヤ人なら決して近づかないサマリアの町を通過してガリラヤに行こうとされました。そして今、サマリアのシカルという町の井戸辺に来られました。太陽が一番まぶしく昇ってくるお昼の12時、喉が渇いておられます。ちょうど井戸に腰を下ろしてはいるのですが、汲むものがありませんでした。お弟子さんたちは食べ物や汲む物を買出しに行っています。イエスさまは旅の疲れで一人で座りこんでおられます。

するとそこに、一人のサマリアの女性が水を汲みに近づいてきました。こんな時間に水を汲みに来る人など普通はいません。きっと人と会いたくないのです。ですから、この女の人は、心の中で「嫌だなあ」と思いました。できるだけ、目を合わせないで水を汲んでさっさと帰ろうと思いましたが、イエスさまが声をかけられました。「水を飲ませてください」この女の人はびっくりしました。「あなたは、ユダヤ人でしょう。そんなあなたが、このサマリアの女にどうして水を飲ませてくださいなんて頼むのですか。ユダヤ人なら、しかも男性なら、サマリア人の女に声をかけたり、水や食べ物をもらうなんて考えられないことでしょう。神さまの掟を破ることになるんじゃないのですか。」するとイエスさまは、「もし私が誰だか知っていたなら、あなたの方から水を飲ませてくださいと私に頼んだでしょう。そして、わたしはあなたに生きた水を与えたはずですよ」女

性は、心の中でカチンと来ました。「ふん、お偉いユダヤ人さん。あなたはひしゃくも桶も持っていないじゃないですか。この井戸は深いのですから、手を伸ばしてすくえませんか。あなたはこのヤコブの井戸よりもっとすごい井戸を持っているのですか」イエスさまは、真面目な御顔で、真剣に、彼女の目を見つめながらおっしゃいました。「この井戸水を飲む者は誰でもまた喉が渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む人はもう決して渇くことはないのです。私が与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出ます。」

この女性は、イエスさまがおっしゃった意味が分かりませんでした。けれども、なんだかすごく自信に満ちておられる言い方に圧倒されましたし、とにかく、毎日毎日人目を避けて一番暑いお昼に汲みに来ることは大変だからこう言いました。「先生、そんな一度飲んで喉が渇かなくなるような、もうここに汲みに来なくてよくなるような不思議な水があるなら、分けが分からないけれども、その水をください。」

さあ、するとどうでしょう。イエスさまは突然こうおっしゃいました。「あなたの夫をここに連れてきてください。」この女性は「むっ」としました。夫なんか関係ないではないか。私が水を欲しいのだから、この私だけじゃダメなのか。そんな気持ちをぐっと抑えて言います。「あら、わたしには夫はいませんよ」イエスさまはおっしゃいました。「夫はいませんとは、その通りですね。あ

なたには五人の夫がいましたけれど、今一緒に暮らしているのは夫ではありませんからね。」このイエスさまの言葉で、この女性はもうびっくりしてしまいました。今まで、この人は変なユダヤ人だなあと怪しい思いで見えていた彼女は、もう、真剣です。尊敬の眼差しに変わっています。初めて会って自分のことを全部言い当ててしまったのですから。

彼女はイエスさまを偉大な預言者だと考え始めて、真剣に質問し始めます。どんなことをイエスさまに質問したのでしょうか。それは、神さまへの礼拝についてでした。

「サマリアの人たちは目の前にそびえるこの山で礼拝していますが、あなたがたはエルサレムで礼拝しなければならないと言っています。本当のところどっちで礼拝しなければならないのでしょうか。」イエスさまはなんとこたえられたのでしょうか。「わたしを信じなさい。」「このゲリジム山でもエルサレムでもないところで父なる神さまを礼拝する 때가 来ます。真の礼拝をする者たちが、聖霊と真理によって礼拝する 때가 来ます。もう来ています。父なる神さまは真の礼拝者を求めておられるのです」

イエスさまは、この女性がどうしてこれまで五人もの男性と結婚しては別れ、結婚しては別れて暮らしてきたのか、その一番の理由をご存知でした。これは、この女性だけのものだいではありません。すべての人が空しく、的を外して生きているのか、何のために生きるのかが分からなくて、自分を楽しませるもの、自分の空しさを忘れさせてくれるようなものを探して、手にしたと思ったらすぐにまた満足行かなくなってしまって、それを繰り返すこと。皆はそのような経験をしたことがないでしょうか。それは、人生の目的が分からないからです。的を外して生きているからです。イエスさまは教えてくださいました。イエスさまを信じ、天のお父さまを礼拝することです。その時、人間は渇きが満たされ、喜びに満たされるのです。

僕たち私たちは、毎週、礼拝式に出て、イエスさまから命を注がれています。復活の命です。イエスさまのことを知れば知るほどうれしくなります。命が豊かに注がれて、生き生きと力強く喜んで生きることが出来るようにされるのです。今、僕たち私たちは、聖霊において一緒にいてくださるイエスさまを礼拝しているのです。(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 4章14節

しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。

わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。

〈ねらい〉

教会に集い、神様を礼拝することで神様について知ることがわたしたちに喜びと力を与えることを知る。

〈分級教師へのアドバイス〉

子どもたちには「人生の目的」といったふうに説明するのは難しいかもしれません。まずは「知ることがうれしい」といったところから始めましょう。実際に教師自身が喜びを感じていることを伝えることができれば良いです。

カテキズムは覚えるくらいに繰り返した方が良いでしょう。みんなで暗唱競走をしても良いですが、できない・したがるらない子どもにどう対応するか考えておきましょう。

〈展開例〉

① みんなで子どもカテキズムの問1を読んでみましょう。

② ここに「わたしたちの喜び」って言葉が出てきますね。「喜び」って言うのは、楽しかったりうれしかったりすることです。

みんなは何をするのが楽しい？

(回答例)

- ・ゲームをする
- ・友だちと遊ぶ
- ・テレビを見る

③ 「ゲームをする」を受けて
ゲームをする時は、「攻略本」を見て研究し

たり、やり方を練習したりするよね。上手くできるようになったり、クリアするのが楽しいよね。

「友だちと遊ぶ」を受けて

仲がいい友だちのことは何が好きか？とか、誕生日はいつか？とか色んなことを知ってるでしょ。

そうやって、みんな自分の好きなことを色々と研究して、新しく知ったりするとうれしいですね。

④ (②の間に「教会」と言う答えがなければ)

ところで、みんなは教会に来てイエス様の話を聞くのも楽しいでしょ？

みんなが大好きな友だちや大好きなゲームのことをたくさん知ればたくさんうれしいように、イエス様のことをたくさん知ればそれだけうれしいですね。

⑤ みんな、イエス様のことでどんなことを知っていますか？

(自由にイエス様のことを話す)

〈祈り〉

天のお父様。今日もイエス様のお話を聞くことができありがとうございます。わたしたちが毎週教会に来て、イエス様のお話を聞いて、イエス様のことを色々知ることができることを感謝します。どうか、わたしたちがもっとたくさんイエス様のことを知ることができるようにしてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①人生には、目的と意味があることを覚える。②神様を知ること、神様を喜び生きることについて考える。③神様を礼拝することこそ、人が人として本来の価値と人生を生きること覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）
「神様のことを考えると、あなたが一番嬉しくなることは何ですか。」
「友だちに、人が何のために生きているかと尋ねたら、なんと答えると思いますか。」
2. どの人も、神様によって生かされ、命を与えられ、その人の使命と価値を与えられています。価値のない人は、だれもいませんし、意味なく生かされている人は、だれもいません。神様から、あなたが存在することを期待されて、あなたは、生かされています。

3. 神様を知れば知るほど、心に喜びがあふれてきます。神様との交わりを深めれば深めるほど、神様を知るようになります。神様を喜ぶことは、あなたの魂に力を与えます。

4. 物がこわれたら、それを作った会社を持って行く（送る）ように、人生の問題は、人を創られ、生かしておられる神様のもとに立ち返ることが、本当の解決の道です。そして、神様を礼拝することこそ、人が人として本来の価値と人生を生きることなのです。

〈折り〉

神様、あなたを喜ぶことの出来る心を与えてくださって、ありがとうございます。あなたのみ言葉を聴くことの出来る耳を与えてくださって、感謝します。あなたの創られた世界やあなたの摂理を見る目をくださって、感謝します。神様、あなたご自身が共におられるということを感じます。私は心からあなたを愛します。

〈聖書をさらに深く〉

1. 交際することがなかったという当時のサマリア人とユダヤ人の関係を理解しておきましょう。地図を開いて、北のサマリア地方と南のユダヤ地方との位置関係（シカル、ゲリジム山とエルサレム）を確認し、また、歴史的な事情（北イスラエルの滅亡、外国人の侵入）も簡単に整理しておきましょう。イエスさまは、実に根深い対立の垣根を越えて、サマリアの女性に語りかけられたのです。
2. イエスさまに出会ったサマリアの女性の気持ちを考えてみましょう。ユダヤ人のイエスさまが話しかけてこられました。イエスさまは女性のすべてをご存知でした。渴くことがない水を与えてくれると言われました。女性の心は渴いていたのではないのでしょうか。心が渴くとはどういうことか、話し合ってみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 人は何のために生きているのか。周りのみんなは？学校の先生は？そして自分は？中学生ぐらいになれば誰もが考えるこの問いについて、あらためてみんながどのように考えているか話し合ってみましょう。何のために勉強しているのか、何のために働くのか、身近なところから少しずつ掘り下げていきましょう。
2. 神を知るとは、抽象的な知識ではなく、人格的な知識であることを確認しましょう。好きな人のことを知りたいという思いが、神を知るという知り方に近いでしょう。人格的な交わりと知識は人生に喜びをもたらします。その中でも、神様を知ることこそ、最も深い喜びです。神様の方が、自分のことを知っていてくださり、愛してくださっているからです。このことを確認しましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

19日（月曜日）

ヨハネによる福音書1章1～28節

- Q. 洗礼者ヨハネは預言者の誰の言葉を用いて自分のことを語った？

20日（火曜日）

ヨハネによる福音書1章35～51節

- Q. いちじくの木の下にいるのを見たと言われた弟子は誰？

21日（水曜日）

ヨハネによる福音書2章1～12節

- Q. カナの婚礼でイエスさまは水を何に変えられた？

22日（木曜日）

ヨハネによる福音書2章13～25節

- Q. 建てるのに46年かかった神殿をイエスさまは何日で建て直すと言われた？

23日（金曜日）

ヨハネによる福音書3章1～21節

- Q. ニコデモはいつイエスさまのところにやって来た？

24日（土曜日）

ヨハネによる福音書3章22～36節

- Q. 栄える方とは誰で、衰えねばならない人とは誰？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書4章27～42節

今日の箇所は、前回に続いて女性がサマリヤの人たちにイエス様のことを「メシア」として伝え、それを聞いたサマリヤの人たちがイエス様の言葉を聞いて、「世の救い主である」と信じるようになったお話です。イエス様はこの出来事の前に戻ってきた弟子たちとのやり取りの中でご自分の使命と刈り入れの喜びとを弟子たちに教えられました。

(1) 「刈り入れ」の喜び

サマリヤの女性と井戸端での話に続いて、主イエスは、弟子たちが準備した食事をきっかけにして、ご自分の使命とその働きの喜びを教えられました。サマリヤに滞在することになり、それが他の多くのサマリヤの人たちの救いになりますから、弟子たちにその使命と喜びを教えるには良い機会だったのでしょう。

ここでイエスが話される「食べ物」とはただ単なる生命を維持するだけのものではなさそうです。「お遣わしになった方の御心を行い、それ業を成し遂げること」、これは使命というもので、食べるための職業ではなく、その人の命が与えられている理由や目的を指すものです。ですからこの食べ物は職業ではなく、命を与えられている目的であり、その目的に沿って働ける喜びのことを「わたしの食べ物」と言っているのでしょう。

井戸端に一人の女性がきたことがきっかけでメシアによる救いと神の国の福音に接した人が生まれました。イエス様はここにご自分の使命とその喜びを覚えておられたのでしょう。

「刈り入れまでまだ四ヶ月もある」とは、当時のユダヤ人の諺だと言われています。種を蒔く仕事の後、刈り入れまでまだまだ待たなければいけないのが世の常なのでしょうが、イエス様の働きにおいてはそうではなく、蒔いた先から「既に、刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている」という性格をもっているのだと言

たいのでしょう。このメシアの働きはメシアを遣わされた方の御心が既にある、そこに遣わされてくるのですから、刈り入れの喜びは「目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」という状態なのです。それが続く「一人の人が種を蒔き、別の人が刈り入れる」という諺で説明されています。刈り入れの実は自分で種を蒔いて苦労したのではなく、すでに蒔かれていて、そこに刈り入れのために遣わされて来たのですから、まさに恩恵として刈り入れ人はその実りを喜ぶことになるのです。そういう使命とその使命を果たすことの喜びの意味を、イエス様は弟子たちに教えたかったのでしょう。

(2) 「自分で聞いて信じる」

その実りとなるサマリヤの人々の姿も描かれています。井戸端でイエスと出会った女性は「水瓶をそこに置いたまま町に行き」、人々にイエス様のことを伝えます。「もしかしたら、メシアかもしれません」という姿には喜びと、まだ十分な確信ではないにしても伝えずにはいられない彼女の信仰が見取れます。サマリヤの人々もイエス様を引き止め、その言葉に耳を傾けます。そして彼女が話してくれたからではなく、「自分で聞いた」から信じるのだと告白するようになりました。彼女の伝えずにはいられない姿とそれを聞いて引き止め、耳を傾けて「自分で聞く」という姿こそが、遣わされたメシアを迎えるのに相応しいものなのでしょう。

サマリヤの人たちはイエス様のことを「世の救い主」と告白しています。それはユダヤ人と違う礼拝をしていたサマリヤの人たちにとって、私たちサマリヤ人だけではなく、ユダヤ人やさらには他の人々をも含むまさに「世」の救い主なのだと言いたかったのでしょうから、彼らにとってイエス様は本当に「メシア」だったわけです。(村手淳)

カテキズム 子どもカテキズム問1

子どもカテキズム

問1 私たちは何のために生きるのですか。

答 私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです。

ウェストミンスター小教理問答

問1 人のおもな目的は、何ですか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。

〈喜びと栄光をあらわすこと〉

子どもカテキズムでは、ウェストミンスター小教理問答問1とは、「喜び」と「栄光をあらわす」ことの順序を入れ替えています。救いの喜び、神を喜ぶ喜びこそが、信仰に生きることの土台であると考えからです。もっともウェストミンスター小教理問答においても、「神を喜ぶ」ことが土台であることは、「永遠に」という言葉が加えられていることにより明らかです。キリスト教信仰は、救いの喜び・神を喜ぶ喜びに生きる信仰にほかなりません。

私たちの地上の人生においては、「神の栄光をあらわす」ことが求められますが、救いの喜び・神を喜ぶ喜びに根ざしてこそ、律法主義的ではなく、私たちの心からの喜びとして、神の栄光をあらわすことができるでしょう。喜びこそが、神のために生きる私たちの志を生み出す源なのです。

〈神の栄光をあらわすこと〉

神の栄光をあらわすとは、消極的な面と積極的な面の二つを考えることができます。

消極的な面とは、そもそも被造物は神の作品であり、神の栄光をあらわすものとして存在しているということです。その意味では、私たちの存在そのものが神を証しており、神の御力のあらわれです。たとえば夜空に多くの星がきらめいているさまを見て、創造主なる神が素晴らしいお方で

あると分かるということです。

この点で、神の栄光をあらわすとは、神が光り輝いておられて、私たちはその神の光を反射して光り輝くものとされている、と行うことができます。いわば光そのものと鏡のような関係です。私たちは、光そのものではありませんから、自ら光輝くことはできません。しかし、光を受けて輝くものとされているのです。

積極的な面とはもちろん、神を喜び、神を礼拝することを通して、直接的に神の栄光をあらわすということです。いのちを与えられ、生活が守られていることを感謝し、神をほめたたえる。主日礼拝・教会学校に出席し、御言葉と祈りの日々を送る。神と人を愛して、神から与えられた務めとして日々の務めに励む。福音を宣べ伝える。これらは皆、積極的に神の栄光をあらわすことにほかなりません。先ほどの光と鏡の関係で言うならば、鏡を磨くのです。磨いてこそ、鏡は光を反射して豊かに輝くのです。

御言葉は、「食べるにしろ飲むにしろ」と語ります（コリント一10:31）。ただ飲食するだけでも、被造物として、その存在において神の栄光をあらわしています。しかし、神から与えられた恵みに感謝して飲食し、自らを神にささげて生きるならば、なおどれほど豊かに神の栄光をあらわすことになるのであろうかと思うのです。（望月信）

テキスト ヨハネによる福音書4章27～42節

(単元のねらい)

問1を巡っての二回目、同じ物語を取り扱う。問1～4までは、暗唱を目指して指導して頂きたい。以下の諸問答は、これが展開されて行くのである。罪深い女性、的外れに生き、空虚な人生をさまよっていた女性が、主イエス・キリストに出会って、キリストの証人に変えられる。この単元では神の栄光を現すとは、主イエス・キリストに出会って行くこと、主イエス・キリストを証すること、誰でもあるがまさに神の栄光を現すことができると伝えたい。

「サマリアの女性、神さまの栄光をあらわす！」

今日も皆さんと礼拝を捧げることができることを心から神さまに感謝致します。

さて、先週のお話の続きです。イエスさまは、サマリアの女性と井戸辺で出会いました。これは決して偶然ではありません。イエスさまは、このサマリアの女性を救おうとわざわざ、この場所を通られたのです。イエスさまは、彼女に水を飲ませてくださいと話かけました。そこから、水が人間の命にとってなくてはならないものであるように、それ以上に人間が本当の人間らしい人間、つまり、人間としての目的になかった生き方、真の人間として生きるためになくてはならない水について教えられました。その水って、何でしたっけ。その水は誰がくださるのですか。先週の暗唱聖句を思い出してください。「私と与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。」イエスさまがこの水と与えてくださるのですね。イエスさまこそがこの水そのものなのです。イエスさまが注いでくださる霊、聖霊なる神さまがこの命の水なのです。その水を受けるためには、天のお父さまを礼拝しなければなりません。本当に神さまに感謝します。僕たち私たちは、今、この命の水をこの礼拝式で頂いているのです。イエスさまを信じて、神さまを天のお父さまと呼びしている僕たち私たちには、聖霊なる神さまが働いてくださり、心の内に宿ってくださり、イエスさまと一つにさせていただいているのです。

このサマリアの女性は、イエスさまのお話を聴きながら、目の前にいるイエスさまを救い主であると信じました。ちょうどその時、お昼ごはんの準備をしに出かけていたお弟子さんたちが戻ってきました。そして、イエスさまがサマリアの女性と話をなさっておられるのを見てびっくりしました。この女性は、大切な水がめをそこにおいたまま町に走って行きました。これは、とても不思議です。なぜなら、誰でも会いたくないと思って、わざわざ一番暑いお昼に水汲みに来たのに、その水がめを置いたまま、町に向かって行くのです。しかも、町の人々に「さあ、見に来てください。メシアが来ておられますよ。この方こそ、本当の救い主かもしれませんよ。わたしがどんな生き方をしてきたのかを言い当てた、すごい人が今、シカルの井戸におられますよ！」こう叫んで回っているのです。これまで、人の目を避けていた人です。町の人たちから後ろ指を指されていたのです。「あの人は、ふしだらな人だ。あの女性は、いかげんな生き方をしている女だ。」そんな彼女が、人々の視線など気にしないでイエスさまの衆囁らしさを伝えまわっているのです。

今日のカテキズムには、人生の目的は「神さまの栄光を現すためです。」とありました。神さまの栄光を現す人は、どんな人なのでしょう。この女性は何か特別に優れた人でしたか。何か、特別にすばらしいことをした立派な女性でしたか。そうではありませんでした。むしろ、逆でした。

男の人と5回も結婚して、それでもまた、今も男の人と暮らして生きているのです。この人も神さまのことを知っていました。神さまがおられて、礼拝が大切だってきつと、子どもの頃、両親から教えてもらっていたはずです。けれども、本当の信仰はありませんでした。神さまがおられるらしい、礼拝は大切らしい、と言うくらいでは心の中に、本物の命の水が注がれません。だから、渴いていました。渴いているから、神さま以外の何かで、満たしたい。満足したい。生きている喜び、手ごたえ、そんな何かを求めて求めて、手にすることもないまま井戸辺に来たのです。けれども今は違います。「ただ、イエスさまを信じただけで、この喜びはなんだろう。ただイエスさまに出会っただけでこの満足感、うれしさってなんだろう。そうだ、イエスさまこそ救い主で、わたしは救われたのだ。」サマリアの女性は、こう思ったのです。この人の心の中に喜びが溢れました。本当に、神さまが備えてくださった人生の目的、何のために生きるのかという目標、的を得たのです。それこそ、神の栄光の現れです。

今日の暗唱聖句には、「あなたがたは、食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしてもすべて神の栄光を現すためにしなさい。」とありました。食

べることも飲むことも人間が生きて行くために、誰でもします。お水を一杯飲んでいる人を見て、「ああ、神さまの栄光を現す飲み方だなあ」なんて言ってくれる人はいません。神さまの栄光を現すお水の飲み方、なんてありはしません。けれども、もしも僕たち私たちが、「神さまから愛されているのだ、その証拠にお水も、食べるものも与えられているのだ、感謝だなあ」と考えて飲むなら、神さまは喜んでくださり、栄光を現している人と見てくださるのです。

イエスさまは、お弁当を持って来たお弟子さんたちにおっしゃいました。「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある。」お弟子さんたちは、すぐに考えました。「なんだ、誰かが先にお弁当を持ってきたのか」そうではないのです。イエスさまの食べ物とは、天のお父さまの御心を行うことなのです。それは、サマリアの女性がイエスさまのことを伝えたことですし、イエスさまにとっては、福音を伝えることです。それなら、僕たち私たちは、どうしますか。この礼拝式で永遠の命をみんなは確実に受けています。それを独り占めにしてしまいますか。お祈りしながら、お友だちにイエスさまのことを伝えてあげましょう。

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙一10章31節

だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、
すべて神の栄光を現すためにしなさい。

〈ねらい〉

神が共にいること、イエス様が共におられることが、わたしたちの喜びであり、平安であることを伝える。

〈展開例〉

今日は、お父さんやお母さんと一緒に教会に来たので、お父さんとお母さんが一緒にいますね。保育園や幼稚園ではどうかな？ 一緒かな？ 一緒ではないね。でも、さびしいと思って泣きませんね。泣いたときもあるかもしれないけど、今は泣かないね。どうしてかな？ 今幼稚園にいても、見えなくても、そうお父さんやお父さ

んやは会社やうちにいるって、わかっているからだね。

お父さんやお母さんやお友だちや先生は目に見えるけど、神様であるイエス様は目に見えません。でも、礼拝して聖書のお話を聴いたり、讃美歌をうたったりするとき、イエス様が一緒にいてくださると信じることができるのですね。そして、礼拝のときだけではなく、教会にいるときだけではなく、いつでもどこでもイエス様が一緒にいてくださることを信じるようになります。それで、わたしたちは安心するのですね。また、イエス様ありがとうございます、お祈りすることができるのですね。

〈やってみよう〉

めいろだよ！

左耳からスタート！

右耳にゴール！

できるかな？



〈ねらい〉

神を知ることが、必然的に、言葉と行いにおいて主を伝える業へと結びつくものであることを伝える。

〈分級教師へのアドバイス〉

信仰について証しすることが難しいことや取組が難しいことではなく、それぞれの生活の中で少し意識することで証しの場となることを伝えたいものです。展開例はそこまで届いていませんが、それぞれの子どもの答えを拾い上げていただければと思います。

〈展開例〉

①みんな、先週も読んだ「子どもカテキズム」の問1を覚えているかな？ 今日一緒に言ってみよう。

②ちょっと難しい言葉が出てくるね。「神さまの栄光」ってどういうことだろう？
(低学年の子どもたちは「栄光」という言葉は知らないのではないか)

③じゃあ、みんなは神様ってどういう方だか知っている？

(回答例)

- ・世界を創った方
- ・わたしたちを治めている方

④そう、神様は世界を創ったスゴイ方ですね。みんなは神様がスゴイ方だって知ってますよね。じゃあ、みんなの学校の友だちは神様のこと

を知っている？

- ・知ってる人もいる
- ・みんなは知らない

⑤みんなは教会で神様がスゴイ方であることを知りましたよね。

そしたら今度は、今日のお話の女の子みたいに、色々な人にイエス様がどんなにスゴイか教えてあげなきゃいけないですね。それが「神様の栄光をあらわす」ってことなんです。

⑥じゃあ、イエス様のことをみんなに教えてあげるにはどうしたらいいと思う？

- ・イエス様の話をしてあげる
- ・教会に連れてくる
- ・自分が神様に従って生きる
- ・お祈りする

〈祈り〉

天のお父様、わたしたちに神様のこと、イエス様のことをたくさん教えてくださいありがとうございます。今度はわたしたちがわたしたちの友だちに、神様のことを教えてあげられるようにしてください。イエス様の御名によってお祈りします。

〈あそぼう〉

「伝言お絵描きゲーム」

- ①一人が先生から「お題」をもらい、黒板や大きな紙に絵を描く。
- ②他の人は、その絵が何の絵かを当てる。
- ③人数が多ければ組対抗でも面白い。

〈ねらい〉

①神様の栄光をあらわすことの価値と意味を理解し、②まず、自分自身が神様の栄光をあらわすことのできる喜びを覚え、③自分を通して他の人々が神様をあがめることができるようにされていることを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）
「あなたが今まで会った人や、聞いた話の中で、神様のすばらしさを感じたことがありますか。」
2. どの人も神様によって生かされていますし、その人に神様から与えられている目的が、一人一人にあります。この歴史の中で、あなたでなければ満たすことの出来ない使命があります。それは特別なことではなくて、今、学校や家庭での生活を、神様から与えられている大切な役割として大切にすることです。
3. あなた自身が、まず神様の栄光をあらわすことができます。今のあなたとは別の何か特別な自分になることによってではなくて、神様

から与えられている恵みによって、栄光をあらわすことができます。それは、とつてもすばらしいことです。

4. 神様から与えられている恵みは、おもにふたつあります。ひとつは、私たちが、神様に創られ、生かされているという恵みです。あなたがただいるだけで、神様は、その栄光をあらわしておられます。もうひとつの恵みは、イエス様によって罪や死から救われているという恵みです。
5. あなたがまず神様からいただいている恵みを喜ぶことが神様の栄光をあらわすことです。その喜びがあふれて、他の人にも伝わっていくと、その人もあなたを見て、神様の栄光をほめたたえるようになります。

〈祈り〉

神様、私を創ってくださり、生かしてくださってありがとうございます。イエス様の救いを感謝します。あなたがおられることや、イエス様の救いを、私が喜ぶことによって、まわりの友だちもあなたをほめたたえるようにしてください。

〈聖書をさらに深く〉

1. イエスさまのことを伝えにいった女性の気持ちを考えてみましょう。女性は、水をくみにきたのに、「水がめをそこに置いたまま」町に行きました。しかも、女性はもともと、町の人と会うのがいやで、昼間に水をくみにきたのです。それなのに、イエスさまのことを伝えに町に行きました。すべてのことをご存知であったイエスさまのことを、メシアかもしれないと、町に伝えに行ったのです。女性の心の変化について考えてみましょう。
2. 町の人たちの反応にも注目してみましょう。サマリア人とは仲の悪かったユダヤ人であるイエスさまに、人々は、「自分たちのところにとどまるように」お願いします。最初に両者の壁を乗り越えて来られたのはイエスさまでした。そのイエスさまを信じるとき、人の心も変えられることを確認しましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 「神の栄光をあらわす」とはどういうことか。それぞれが持っているイメージ、考えについて話し合ってみましょう。自分が何かをしななければ、神の栄光があらわれないというふうに考えていることが多いのではないのでしょうか。しかし、サマリアの女性のように、神の栄光をあらわすことは、まずはイエスさまからの恵みであることを覚えましょう。
2. そして、私たちがその恵みを喜んでこそ、神の栄光は豊かにあらわれるということを確認しましょう。例えば、好きな芸能人やスポーツ選手のために私たちがすることは、喜んで声援を送ることですが、それで彼らは人気を得て輝くわけです。まして、ご自身で輝いておられる神様の栄光をさらに豊かにあらわそうと願うなら、ただその恵みに感謝と讃美をささげることではないのでしょうか。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

26日（月曜日）

ヨハネによる福音書4章43～54節

- Q. 役人の息子の病気が治ったのは何時？ それはどんな時刻だった？

27日（火曜日）

ヨハネによる福音書5章1～18節

- Q. イエスさまが病氣の人を治されたのは、一週間のうちの何の日だった？

28日（水曜日）

ヨハネによる福音書5章19～47節

- Q. イエスさまの言葉を聞いて神を信じるなら、何を得る？

29日（木曜日）

ヨハネによる福音書6章1～21節

- Q. 残ったパンの屑を集めたら、籠にいくつになった？

30日（金曜日）

ヨハネによる福音書6章22～59節

- Q. イエスさまは何のために働きなさいと言われた？

1日（土曜日）

ヨハネによる福音書6章60～71節

- Q. 多くの弟子たちが離れていく中、イエスさまについていくと言った弟子は？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書19章1節～10節

(1) 徴税人ザーカイ

ザーカイは徴税人でした。彼は当時の徴税人がそうであったように、人々から搾取し、人々からだまし取っていたものがある、そのような人物だったようです。

ザーカイという名前は「正しい人」とか「清らかな人」という意味があるそうです。ですが、彼はその名前とは全く逆の生き方をしていたのです。彼はそのような生き方故に、金持ちになったのは事実です。しかし、彼は満たされず寂しい生活をしなければならなかったのです。

徴税人であるが故にザーカイはユダヤ人たちから差別される存在であったのです。なぜなら、徴税人は異邦人であるローマの手下であり、つまりは罪人の手下であったからです。ですから、徴税人はユダヤ人たちから嫌われ、軽蔑されていたのです。そのような徴税人は罪人や遊女と同様に交わりからはずされ、つきあいを拒否される存在であったのです。このザーカイも徴税人故にそのような寂しく辛い状態に於かれていた一人であったのです。

(2) 罪人を捜し求められる主

しかし、このような徴税人である彼に対する、ユダヤの共同体と会堂による取り扱いは、神様の愛が届かないところに彼を追いやるようなことはなかったのです。どんなに人々が交わりから消そうとしても、探し求められる方である神様の愛は届くのです。主はこの物語の最後に「この人も、アブラハムの子なのだから。」と宣言なさっておられます。

アブラハムの子であるということはどういうことなのでしょう？ それは神様の恩恵を必要とし、また、それを受けるに相応しいものであるということなのです。主イエス・キリストは神様の恩恵を必要とし、その恩恵を受けるべきアブラハムの子を探し出してくださるのです。

このアブラハムの子である事実は、ザーカイだけでなく、そこでイエスに対して呟いた人々も含まれるのです。彼らもまた、神様の恩恵を必要としている人々なのです。

(3) 恩恵による救いと悔い改め

主が探し求めてくださり、見出してくださった結果、ザーカイに救いが訪れています。これはザーカイが木に登って目立つ行動を彼がとったからではなく、恩恵を受けるべき多くの人物の中から彼を見出された主の恵みなのです。

その恩恵による救いの結果、彼は悔い改めを示しています。主によって救われるということは悔い改めと結びついているのです。その悔い改めとは心の変化だけを指すのではなく、悔い改めの実を結ぶのです。ザーカイの悔い改めの実、富を愛することからザーカイを解放し、だました人々に返すことと施しをすることに現れています。

救いはただ単に魂が救われたことをさすものではありません。その人自身の生の全体に影響を及ぼすものなのです。探し求めてくださる主イエスの恩恵による救いによって、私たちの生は神様を何よりも喜びとする生活の中に入れられるのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問2

子どもカテキズム

問2 どうしたらそうなりますか。

答 主イエス・キリストを信じて救われること、神さまの子どもとされることです。

ウェストミンスター小教理問答

問34 子どもとされることとは、何ですか。

子どもとされることも、神の一方的恵みによる決定です。それによって私たちは、神の子らの数に入れられ、神の子らのあらゆる特権に権利を持つ者になるのです。

〈信仰の根底にある喜び〉

信仰とは喜びであると申し上げることができます。子どもカテキズム問2には、その文言にはあらわれていませんが、一つの願いが込められています。それは、「喜び」を知ってほしいということ、また、「喜び」に生かされてほしいということです。すでに問1において、「神を知り、神を喜ぶ」ことこそが私たち人間の目的であり、永遠に続くわざであると学びました。その「喜び」を自らのものにしてほしいと、そう願うところで、この問2が語られています。

この「神を喜ぶ喜び」とは、ほかでもない主イエス・キリストにあって救われた喜びから始まります。「救われた喜び」を知ることにより、「神を喜ぶ」ことが始まります。ですから、ザアカイの物語をとおして、ぜひ「救われた喜び」を学んでいただきたいのです。

〈神の恵みの先行性〉

この単元の表題は「救いの喜び」ですが、それは、本来、「救われた喜び」でしょう。問2が「救われること」と語っているとおりです。受け身、受動態の言葉であることが大切です。

もちろん、救いとは私たちの決断でもあり、主イエス・キリストを信じるという私たちの主体的な決断が求められることです。しかし、その主体的な決断さえも、神の御業であり、何よりも神の

恵みが先立っていることを告白せざるを得ないというのが、信仰者なのです。

この單元では、ザアカイの物語が扱われます。ザアカイと主イエスの出会いを物語る中で、まず主イエスがザアカイを求めてエリコに来られたこと、主イエスがザアカイに呼びかけて招いておられることに注目すべきでしょう。主イエスが、ザアカイの信仰的な決断と応答を引き出しておられるのです。神の恵みと招きの御業が先立っていることが明らかにされています。

〈神の愛を知る喜び〉

救いの喜び、救われた喜びとは、主なる神が私たちのことをご存じであり、愛してくださっていることにあります。私たちを愛する神の愛を知ることこそ、救われた喜びがあります。

その神の愛は、とりわけ主イエス・キリストの十字架に示されています。それは、ザアカイの場合にもそうであって、主イエスはザアカイの罪を責めることなく、ザアカイの罪をすべてになって十字架につけられてくださり、それ故に、ザアカイを赦しておられるのです。

私たちを愛して、私たちの罪を担って十字架につけられてくださった主イエス・キリスト。このお方の愛を知るところに、私たちの救いの喜びがあり、神を喜ぶことが始まるのです。（望月信）

テキスト ルカによる福音書19章1～10節

〔単元のねらい〕

問2を巡って第一回目、日曜学校ではおなじみのザアカイ物語である。契約の子なら、何度も聴いているであろう。しかし、同じ話を何度聴いても良い。語る者が驚きと喜びを込めて語れば、聖霊が子らを捕らえてくださる。問1と問2の扱いは、礼拝説教においては重なる。神を知り、神を喜び、神の栄光を現す人生の目的が達せられるのは、主イエス・キリストに出会って、救われ、神の子とされること。この物語からイメージ豊かに明かにしたい。

「捜し出されたザアカイさん」

エリコという町にザアカイという大変な金持ちの男がいました。この人は、税金をとる仕事をしていました。この仕事をする人は、ユダヤ人からはとても軽蔑され、嫌われていました。何故なら、不正な取立てをして、自分のお財布にお金を貯めていたからです。ところが、ザアカイさんは、そんな人々の視線なんか気にしません。「ふん、何を言われてもかまうものか。よく考えよう。お金は大事だぞお。お金こそ全てだ。神さまがなんだってんだ。神さまを信じて真面目に生きているなんて、ばかばかしい。あいつらだって、本当はお金とか名誉とかには弱いんだ。俺様みたいに強くないから、神になんか頼るんだ。」こんなザアカイさんは、税金とりの中で一番偉い人になって行ったのです。

そんなある日のことです。イエスさまがエリコの町にやってきました。エリコの町はもう、大変な騒ぎです。大勢の人々が口々に言うのです。「イエスさまって、すばらしいなあ。今まで見たこともない聖書の先生だなあ。神さまの御言葉を權威をもって教えてくださるし、何よりも、奇跡を行ったり、病人を癒して回っておられるんだ。」

これまで、神さまの話なんか聞きたくないと思っていたザアカイさんも、なんだかそわそわして来ました。「これまでの宗教の先生とは違うようだ。本当にやつらが言うとおりになら、神さまっているのかもしれないなあ。本当のところはどうなんだ。」そして、ザアカイは、一度見てやろう

と思いました。ところが、人々は自分たちから不正にお金をとっていたザアカイにここぞとばかりに仕返しをしました。皆が邪魔をしてザアカイを見せないようにブロックしたのです。ザアカイさん、背が小さかったようです。ジャンプしても見えません。そこで考えたのは、目の前にあったいちじくの木に登って見下ろすことでした。見える見える、イエスさまとお弟子さんたちがよく見えました。するとどうでしょう。イエスさまは、いちじくの木の方に近づいてこられます。「いやあ、ちょうど良いところにのぼったな」けれども、だんだん、ドキドキしてきました。どんどんどんどん、イエスさまが近づいてこられるからです。まるで、このためにエリコの町に来た、まるで、ずっと前からザアカイに会うために来られたように、イエスさまがザアカイに向かってまっすぐ近寄って来られるのです。

そして、遂にザアカイの上っているいちじくの木の下に来ました。ザアカイさんのドキドキはピークです。ところが、もっと驚くことが起こります。イエスさまが立ち止まったのです。見下ろしていたザアカイの目とイエスさまの目がピタッと合いました。すると、イエスさまは突然こうおっしゃいました。「ザアカイさん、急いで降りてきなさい。今日は是非、あなたの家に泊まりたいのです。」

ザアカイさんの家は大きな家です。召使もいます。美味しいご飯の用意ならすぐにもできます。

けれども、今まで、仕事の仲間なら来たことはありますが、友だちなんて一人もいません。誰も、遊びに来てくれる人などいないのです。何故なら、神さまを信じているように正しい行いをしているユダヤ人なら、こんな人の仲間になることは、神さまを信じている人らしくないと考えていたからです。一緒に泊まって食事をするなんて、ユダヤ人にとっては、本当の友だち、家族のようになることを意味するからです。ですから、エリコの町の人たちはがっかりしました。そして、言いました。「イエスさまは罪人の仲間になってしまったんだ。ああ、裏切られた。がっかりした、滑い、立派な方だと思っていたのに。」

さて、ザアカイは急いで降ります。びっくりしながら、夢をみているような気持ちです。イエスさまはザアカイの家に入ります。お部屋の中は、金びかです。椅子も、ランプもそれはそれは、高価なものです。イエスさまは、ただ黙ってそれらをご覧になっておられます。その時です。ザアカイさんは、今まで自分がどんなことをして、立派な家に住むようになったか考えてみました。顔が真っ赤になりました。「ああ、俺は、悪いことをしてお金を稼いでいた。この椅子もこの机もみんな汚れてしまっている。俺は、自分が楽しければ、

人が悲しんでいても、苦しんでいても、知ったことではなかった……。」イエスさまは、ザアカイさんのもてなしをお受けになられています。そして遂に、ザアカイは悟りました。「ああ、イエスさまは、本当の神さまから来られた方なのだ。神さまは本当におられるのだ。俺は、今、神さまを知った。神さまはこんな俺でさへ憐れんでくださって、愛してくださるのだ。」するとザアカイはすっと立ち上がりました。「イエスさま、神さま、わたしは財産の半分を貧しい人に施します。騙し取ったものは、4倍にして返します。もう、これからは、こんなことをしません。」

すると、イエスさまは心の底から嬉しそうな御顔でおっしゃいました。「今日、救いがこの家に来ました。この人は、神さまの子どもなのです。わたしは、神さまから離れて生きている人、生きているようで本当には生きていない人を捜して救うために来たのです。」

イエスさまを信じる人は、救われます。神さまの子どもとされるのです。立派な行いをするから神さまの子になるわけではありません。ザアカイのように、イエスさまを信じるだけで、喜びが溢れて、神さまの栄光を現す人になってしまうのです。
(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ルカによる福音書19章10節

人の子は、失われた者を捜して救うために来たのである。

〈ねらい〉

イエス様を救い主と信じてこそ、わたしたちは本当の喜びを与えられることを語ろう。

〈展開例〉

わたしたちが生活するのに必要なものは、いろいろありますね。生きていくのに必要なものはいろいろあります。たとえば、食べ物、着る物、家、水、電気、お金など、どれも大切なものでこれがないと困るね。

礼拝のお話しのザアカイさんは金持ちでしたから、こういう必要な物は何でも手に入れることができたでしょう。でも、最初は何か寂しそうでし

たね。喜んでいませんでした。何が足りなかったと思うかな？

そう、愛する人好きな人がいなかったのかな？好きな人や友だちがいないのは寂しいね。ザアカイの心に喜びがなかったのには、もう一つ原因があります。自分を愛してくださっている神様であるイエス様を知らなかったんだね。

けれども、ザアカイさんが生意気でも、意地悪でも、意気地無しでも彼を嫌わないで愛して下さるイエス様に出会いました。イエス様を信じたザアカイさんは幸せになり、喜びいっぱいになり、人々を愛することができる人に変えられました。みんなもイエス様を信じていてうれしいかな？

〈やってみよう〉

ザアカイさんのカードをつくろう！

画用紙にコピーし、色をぬってね。小さくすると豆カードになります。



〈ねらい〉

ザアカイの救いは、あくまでイエス様の方からザアカイに声をかけてくださったことによっていることを確かめる。わたしたちも神様によって招かれて救われていることを確認する。

〈分級教師へのアドバイス〉

子どもたちが教会へ来ていることを、神様からの恵みであると理解することが目標です。

契約の子は「親に連れてこられている」という感覚を持ちがちです。もし分級教師が、求道して成人洗礼を受けた方であれば、子ども時代に信仰を知ることができるか、どのほど恵みであるか、自分の経験から話すことができるかもしれません。

〈展開例〉

①今日は、子どもカテキズムの問2です。

先週の問1と一緒にみんなで読んでみましょう。

②今日のお話で、イエス様を信じて救われて神の子としていただいたのは誰でしたか？

(回答例)

・ザアカイさん

③イエス様に出会う前のザアカイさんはどんな人でした？

- ・お金持ち
- ・「お金は大事だぞお」の人
- ・いじわるな人

④みんなからはどう思われていたかな？

- ・嫌われていた
- ・仲間外れだった

・仕返しをされた

⑤イエス様はザアカイさんを見つけた時どうしたかな？

- ・近づいてきた
- ・目を合わせてくれた
- ・家に泊まってくれた
- ・一緒に食事をしてくれた
- ・友だちになってくれた

⑥みんながザアカイさんだったら、どんな気持ちができる？

・うれしい

⑦ザアカイさんは、イエス様と友だちになってもらって、神様の子どもにいただきました。

そして、他の人たちに嘘をついたりだましたりしたことを反省して謝って、他の人とも友だちになれるようにしましたね。

⑧実はみんなも教会に来て礼拝式に出て、イエス様のお話を聞いて、神様に子どもにしてもらいました。

じゃあみんなは、どうしたらよいと思う？

〈祈り〉

天のお父様。わたしたちみんな、イエス様によって神様の子どもとしてもらっていることを感謝します。わたしたちが神様の子どもとして、すべての人たちと仲良くすることができますようにしてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①イエス様のほうから私たちが捜し求めてくださっていることを覚え、②イエス様と出会うことの喜びを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「ザアカイは、背が低くてイエス様を見られませんでした。そこで木に登ってイエス様を見ようとしたのですが、もしあなたがザアカイのようにイエス様を見られなかったら、どうしますか。」

2. ザアカイがどんな人だったか、聖書を開いて、みんなで話し合ってみよう。

（例）「徴税人の頭」（ルカ19：2）

「金持ち」（ルカ19：2）

「背が低かった」（ルカ19：3）

「罪深い男」（ルカ19：7）

3. イエス様は、ザアカイに対してどのようになさったかを、みんなで話し合ってみよう。

（例）立ち止まられた（ルカ19：5「上を見上げ

て言われた」）

名前を呼ばれた（ルカ19：5「ザアカイ」）

招かれた（ルカ19：5「急いで降りて来なさい」）

受け入れてくださった（ルカ19：5「ぜひあなたの家に泊りたい」）

4. イエス様と出会ったザアカイは、どのように変わりましたか。

（例）喜んだ（ルカ19：6「急いで降りてきて、喜んでイエスを迎えた」）

罪を悔い改めた（ルカ19：8「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」）

〈祈り〉

イエス様、あなたのほうから私の所に来て、私の名前を呼んで招いてくださいますから、ありがとうございます。どうぞ、イエス様に出会って、喜びに満たされたザアカイのように、私の心の中に入って、あなたとを喜ぶことができるようにしてください。

〈聖書をさらに深く〉

1. 徴税人とユダヤの人々の関係について確認しておきましょう。ユダヤの人々にとっては、同じユダヤ人でありながら、ローマ帝国の手下として働く徴税人は軽蔑の対象であり、また、彼らが税金を多くだまし取っていたことも、嫌悪の原因でした（7、8節）。イエスさまは、サマリアの女性に近づかれたように、ここでは徴税人に近づきます。人の垣根を越えるイエスさまの姿に目を注ぎましょう。
2. イエスさまを何とかして見ようとしたザアカイですが、実は見られていたのはザアカイでした。その救いの恵みがザアカイをどのように変えたか、話し合しましょう。「アブラハムの子」とは神の契約と関わります。小さな頃からイエスさまを知っている契約の子どもたちも、イエスさまによって見られ、知られているのです。

〈教理を響かせるために〉

1. イエスさまを信じること、救われること、それが人生の喜びであり、神の栄光を最も豊かにあらわすことです。私たちは何のために生きているのか、あらためて考え、話し合ってみましょう。仕事のため、お金のためでしょうか。しかしそれはザアカイにとっては本当の喜びではありませんでした。むしろ、イエスさまを知る喜びを知ってこそ、お金も正しく使うことができるようになるはずです。ザアカイはそのように変えられました。
2. 子どもカテキズムには、「神さまの子どもとされること」とあります。小教理問34を一緒に読んでみましょう。義認、聖化と並べて、子とされることを救いの恵みに数えていることはウェストミンスターの特徴です。大人に成長していく中学生たちに、いつまでも神様の子どもとして歩んでほしいものです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

- 3日（月曜日）
ヨハネによる福音書7章1～24節
Q. イエスさまの教えは誰の教え？
- 4日（火曜日）
ヨハネによる福音書7章25～52節
Q. 川となって流れる、生きた水とは何のこと？
- 5日（水曜日）
ヨハネによる福音書8章1～30節
Q. 罪を犯した女性に石を投げた人はいた？
- 6日（木曜日）
ヨハネによる福音書8章31～59節
Q. イエスさまは誰が生まれる前からおられた？
- 7日（金曜日）
ヨハネによる福音書9章1～17節
Q. 生まれつき目の見えない人がイエスさまに行くように言われた池の名前は？
- 8日（土曜日）
ヨハネによる福音書9章18～41節
Q. ユダヤ人たちは、イエスをメシアと公に言い表す者をどうすると決めていた？
- 心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書15章11節～24節

(1) 父と息子

このたとえにおいて、父は神様であり、息子は人間のことをさしています。そして、弟は御父の元を離れた人間のことをさしています。

子は完全に独立するまで、その親の元で守りを受けながら全てを与えられて生きるのが、最も良い状態であることは言うまでもありません。親子というのは本来共に生きる存在なのです。それと同様に人間は御父である神様と共にいて初めて平安に生きることができるのです。なぜなら、被造物である人間は、創造主によって命を与えられ、支えられ全てを満たされている存在だからです。

(2) 御父の元を離れるということ

弟息子は父の元を離れていきます。つまり御父の元から弟息子は失われたのです。御父の元から失われることは死よりも悪い状態です。父の本を離れた弟息子は異邦人となったのであり、契約の適用外の人物になってしまったということなのです。それは滅びるべき存在であり、神様から見捨てられるべき存在となったということなのです。そのような状態で人は生きることができるのかとの問いが、私たちに投げかけられています。

(3) どん底の状態

神様から離れて生きる歩みは、人間にとって自由を得たように見えるものです。ちょうど一人暮らしを始めた若者が親元を離れ、最初は自由を得たと感じるように、楽しく過ごすことができます。しかし若者は、その自由と思える生活に、だんだんと寂しさやむなしさを覚えるのです。同様に神様から離れて生きる生は、霊的な寂しさやむなしさを覚えさせ、何をやっても満たされない事実を明らかに示すのです。しかし、人間は放縦

をすることで一時の慰めを得たような気持ちにさせられるのです。

そのようなことを繰り返す中で、弟息子は貧困と孤独のどん底を経験するのです。どん底の中で彼は父の元に立ち返る決心をします。しかし、子として父に顔向け出来ない彼は、雇い人の一人として家に入れてもらおうと決心するのです。彼は父の元で生きることの幸いに気がつくのです。

(4) 罪人を受け入れる神の愛

父の元に立ち返る弟息子を、父は迎え入れます。全く寛容に、大きな愛をもって、しかも大きな喜びの内に父は息子を受け入れているのです。ここに、罪人を赦し、受け入れてくださる父なる神様の大きな愛が鮮明に描き出されています。しかも、罪の中に失われ、神様から呪われるべき存在になった罪人が、今見出されて真の生の中に生きる者となったことを喜んでくださり、もう一度子として迎え入れてくださる神様が示されているのです。その失われたものを見出し、子とするために神様は御子を私たちに使わしてくださったのです。それほどに神様は私たちを愛してくださっているのです。

神様の愛の事実は兄息子の話にも通じています。この父には、父の元にとどまり続けていた兄息子もいました。父の弟に対する態度を見て兄は蹟くのです。この父親は二人の息子を持っており、二人を愛していたのです。そして、その二人共を父は出迎え、二人に対して寛容であったのです。先に救われていたにも関わらず、後に救われたものを受け入れることができないような者をも愛してくださる神様の愛もまた示されているのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問2

子どもカテキズム

問2 どうしたらそうなりますか。

答 主イエス・キリストを信じて救われること、神さまの子どもとされることです。

ウェストミンスター小教理問答

問34 子どもとされることとは、何ですか。

子どもとされることも、神の一方的恵みによる決定です。それによって私たちは、神の子らの数に入れられ、神の子らのあらゆる特権に権利を持つ者になるのです。

〈一つの喜び〉

「救いの喜び」「救われた喜び」とは何であるのか。それは、いろいろな喜びを挙げることができるでしょう。子どもカテキズム問2では、とくに「神の子とされる喜び」であると語られています。「主イエス・キリストを信じて救われること」と「神さまの子どもとされること」は、決して別の事柄ではなく、一つの事柄です。一つのことを別の言葉で言い表しています。

〈神の子とされる恵み〉

神の子とされることは、一方的な恵みとしての神の決意であり、神の御霊の働きです。聖霊により主イエス・キリストと結びつけられて、私たちは神の子とされます。それは、主イエス・キリストが神の独り子であられ、本来神の子であるただ一人のお方です。そのキリストと結び合わせられることによって、私たちはいわばキリストの義兄弟とされ、神の養子とされて、神の子とされるのです。

この神の子とされる恵みをいただいて、私たちは、神の子らのあらゆる特権にあずかります。すなわち、御父を「アッパ父よ」と呼んで祈る者とされ、神の国を受け継ぐ者とされます。私たちの創造主なるお方、その意味では私たち被造物を超越しておられるいと高きお方を、私たちは、「アッパ父よ」とお呼びする者とされるのです。御言葉と御霊にあって神を礼拝し、親しい交わりが与え

られ、このお方に信頼し、すべてを期待することが許されます。これが、神の子の恵みであり特権です。

〈愛とへりくだりの神〉

ここには、神の愛とへりくだりがあると言うべきです。私たちの側には、私たちが神の子として扱われるべき何の理由もありません。私たちは被造物に過ぎないのであり、創造主なるお方との間に、「父と子」に類比されるような人格的な関係を求めることは、どうてい考えられることではありません。このことは、ただ私たちを愛してくださいと、神の愛と、神のへりくだりによって与えられている恵みなのです。

「放蕩息子のたとえ」は、この神の愛とへりくだりをたいへん印象深く描き出しています。放蕩息子を待ち続けて彼を迎え入れる父の姿に、神の愛とへりくだりを見るのです。父は放蕩の限りを尽くした息子を責めることなく、受け入れて、彼にすべての特権を与えます。この背後に主イエス・キリストの十字架があることを見逃すことはできません。御父は、私たち罪人を愛して神の子としてくださるために、御自身の愛する独り子を十字架に引き渡してくださいました。それほどの大きな神の愛とへりくだりによって、私たちは神の子とされています。この神の愛を知るところに、神の子とされた喜びがあります。(望月信)

テキスト ルカによる福音書15章11～24節

〔単元のねらい〕

問2を巡っての第二回目、たとえ話の王者、放蕩息子の物語である。先週同様、「自分の物語」として驚きと喜びを込めて語れば、聖霊が子らを捕らえてくださるに違いない。人生の目的を見失った放蕩息子を取り戻した父なる神の喜び、その喜びを自分の喜びとする救いの喜び、そのために御子イエス・キリストが地上に来て、捜してくださった。主イエス・キリストの御業、父なる神の御業、聖霊の御業を語り、讃美したい。

「死んでいたのに生き返った放蕩息子」

ある日のこと、イエスさまは、徴税人や罪人にお話をしていました。それを見ていた、聖書の学者、ファリサイ派の人たちが文句を言いました。「この人は、罪人の仲間になっている。」そこで、イエスさまはたとえ話を話されました。

ある人に二人の息子がいました。二人はお父さんと力をあわせて働いていました。ところが、急に、弟の方が、お父さんにこう言いました。「お父さん、僕がもらえるはずの財産を今ください。」お父さんはびっくりしました。まだ、自分は死んでいませんから、財産を分けることなど考えてもいません。生きてお父さんのことを、弟は死んだことにしてしまうわけです。お父さんは、申し出どおり、財産を二人に分けてあげました。

するとどうでしょう。弟は、やったあとばかりに、遠いところに出掛けて行ってしまいました。そこで、お金をどんどん面白いこと、楽しいことに使い尽くしてしまいました。そして、たくさんのお金をちょうど全て使ってしまったある日のことです。なんと、その地方に飢饉が起こったのです。大変です。食べるものがなくなりました。彼は、食べるにも困ってしまいました。そこで、昔ごちそうしてあげた友だちのところに行きました。助けてくれると思ったのです。ところが、その人は、彼を働かせました。しかも、ユダヤ人なら、絶対にしたくない嫌な仕事、豚の飼育のお仕事です。けれども彼は、豚を見ているとおなかがグウグウ鳴りました。よだれだって出て

きました。お腹がすいてたまらなかったのです。その時です。弟はハッと気がつきました。「僕はこんなところで何をしているんだろう。お腹がすいて飢え死にしそうだ。でも、僕にはお父さんがいたんだ。お父さんのところには畑もあるし、牧場もある。大勢の人が働いている。食べるものだってたくさんある。」弟は、今はじめて気がつきました。どれほどお父さんを悲しませてしまったか。どれほど、人間らしくない生き方をしていたことか。どれほど、神さまを悲しませてきたことか、神さまに罪を犯してきたことか。

この弟はどうして、お金を握り締め、お父さんの家を飛び出して行ったのでしょうか。どうして、それで幸せになれなかったのでしょうか。それは、何のために生きるのかが分からなかったからです。人生の目的が分からなかったから、とにかくなんでも自分勝手にしたかったのです。楽しいこと、面白いことをしていれば、生きていくのが楽しくなり、いつも喜んでいられると思ったのです。けれども、そうなりません。本物の喜びでなければ長く続きません。本物の喜びでなければ、誰かが悲しんでいるのです。一緒に、子どもカテキズムの問1を暗唱しましょう。問2も声に出して言しましょう。僕たち私たちが生きるのは、神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光を現すためです。それは、主イエス・キリストを信じて救われて、神さまの子としていただいて実現するのです。目的がかなうのです。正しく生きれるのです。

さあ、この弟はどうするのでしょうか。心の中でこう言いました。「よし、家に帰ろう。お父さんの所に帰ろう。そしてこう言おう。わたしは神さまに罪を犯しました。そしてお父さんに罪を犯しました。もう、息子と呼ばれる資格はありません。でも、働かせてください。」こうして、豚の臭いがしみついたぼろぼろの着物を着てとぼとぼと帰って行きました。

その頃、お父さんは何をしていたのでしょうか。お父さんは毎日毎日、お屋敷のベランダに出て、遠くを眺めていました。弟が帰ってくるのを待っていたのです。そんなある日のことです。遠くの方から、それはそれはみすばらしい身なりをした男がとぼとぼと近づいて来るのが見えました。お父さんは階段を駆け落ちるように降りて来て、力の限り走りはじめました。「おーい、息子よ」そして、そのぼろぼろの着物を着た男を抱きしめたのです。弟はお父さんを見つめて、言いました。「わたしは神さまに罪を犯しました。そしてお父さんに罪を犯しました。もう、息子と呼ばれる資格はありません。」用意をしていた言葉を全部言い終わらないうちに、お父さんは声を挙げて言いました。「わたしの息子は死んでいたのに生き返った。死んでいたのに生き返った。良かった、良

かった。嬉しい、本当に嬉しい。さあ、一番良い服を持ってきてくれ、手に指輪をはめてくれ、皆で楽しく食事をしよう。

イエスさまがしてくださったこのたとえ話の中の弟とは誰のことでしょうか。それは、天のお父さまから離れている人、神さまを信じて従わない人のことです。それなら、お父さんは誰のことでしょうか。それは、天のお父さまのことです。天のお父さまは、いつでも僕たち私たちが神さまを知るように、神さまを喜びとするようにと、働きかけてくださっています。今日、僕たち私たちが教会に来ることができたのは、天のお父さまが呼んで、連れて来てくださったからです。ここでイエスさまに出会えるのは、天のお父さまが僕たち私たちを見つけ出してくださったからです。天のお父さまは僕たち私たちを神さまの子として取り戻すために、独り子のイエスさまを十字架におつけになって、罪を赦してくださいました。

あの放蕩息子はぼろぼろの姿になってしまいましたが、お父さんは大喜びでした。僕たち私たちも同じです。今、このままの姿で天のお父さまに大喜びをされています。そして、神さまの子としてのすばらしい祝福をあふれるほど与えていてくださいます。
(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句]

ヨハネによる福音書 1 章 12 節

しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

〈ねらい〉

神の子とされているということは、神の愛と支配を味わい知ることです。この恵みのもとに生かされていることを感謝するように伝えよう。

〈展開例〉

みんなは、おとうさんやお母さんが好きですか。大好きですね。でも、「早く寝なさい」とか、「おもちゃを片付けなさい」とか、「〇〇しちゃだめでしょ」などと厳しく言われたり、叱られたりしたときはどうですか。チョッとだけキライと思うこともあるかもしれないね。でも、また大好きになる。おとうさんやお母さんの子で良かったと思うよね。

実は、人間と神様との関係もそうなんです。人間は神様から「わたしを信じなさい」とか、「わ

たしに従いなさい」とか、「もっと人を愛しなさい」とか言われるのがいやで、神様のもとから逃げ出してしまいました。でも、神様のもとを離れた人間は、しあわせではありませんでした。礼拝のお話し・イエス様のたとえ話に出てくる弟息子はおとうさんのところを離れて暮らして、自分の好きなように暮らしてみても、それではしあわせではないことが分かりましたね。そして、おとうさんのところに帰って来て、おとうさんが自分をどんなに愛してくださっているか分かりましたね。

わたしたち一人ひとりも同じなのです。天のおとうさんである神様に愛されているのですよ。父なる神様に大切にされていることを信じて、神様と共に歩みましょう。

〈やってみよう〉

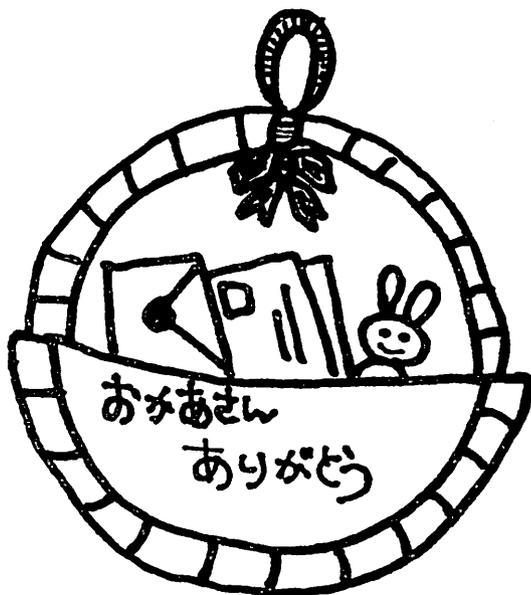
お母さんへプレゼント「ポストカード入れ」(母の日)

○用意するもの

- ・紙皿 一枚+二分の一枚
- ・ホッチキス
- ・リボン
- ・カラーのビニールテープ
- ・マジック

○つくりかた

- ・紙皿を中表に合わせてホッチキスでとめる。
- ・紙皿の周りをビニールテープで包むように張る。
- ・「おかあさんありがとう」とマジックで書く。
- ・好きな絵を描いてね。



〈ねらい〉

神様とわたしたちの関係が「父と子」の関係であること、そのことによってあらゆる恵みをいただいていることを理解する。

〈分級教師へのアドバイス〉

子どもたちは、自分の親子の関係を当然のものと思っていますので、その関係に改めて感謝するというのは難しいかもしれません。

分級の生徒の中に自分の子どもがいると今日の話はしにくいかもしれません。工夫が必要でしょう。

〈展開例〉

①子どもカテキズム問1と問2を読んでみましょう。

②みんなは誰の子ですか？

（回答例）

・※※（親の名前）

③親は子どもに何をしてくれるでしょうか？

・ご飯を作ってくれる

・お小遣いをくれる

④※※君のお母さんは※※君にご飯を作ってくれますね。##さんのお母さんは##さんにご飯を作ってくれますね。じゃあ※※君のお母さんは##さんにご飯を作ってくれたり、お小遣いをくれたりするかな？

・する（親同士の関係によっては「する」という答が出る場合があります。動揺しないようにしましょう）

・しない

⑤そうですね、普通、よその子どもではなくて、自分の子どものご飯を作ったり、お小遣いをあげたりしますね。

⑥今日の礼拝式で、神様がわたしたちのお父様で、わたしたちが神様の子もだって聞きましたね。神様もわたしたちの食べる物を備えてくださったり、わたしたちに必要な色々なものをくださいますね。それは、神様がわたしたちのお父様となってくださったからです。

わたしたちは神様の子もにしていただいたから、教会で神様のお話を聞いて、神様を礼拝することができるんですよ。

〈祈り〉

天のお父様。わたしたちを神様の子もにしてくださってありがとうございます。神様わたしたちが神様からいただいたたくさんの物に感謝し、神様を喜んで礼拝することが出来るようにしてください。イエス様の御名によってお祈りします。

〈あそぼう〉

「親あてクイズ」

○先生が言ったものの親の名前を当てる。

聖書の登場人物よりも、動物等ならば小さな子どもでもわかるでしょう。

○例	子ども	親
	イエス様	> ヨセフとマリア
	イサク	> アブラハム
	ソロモン	> ダビデ
	ひよこ	> にわとり
	おたまじゃくし	> かえる
	子牛	> 親牛
	たらこ	> 鰯
	種	> お花

〈ねらい〉

①イエス様の救いによって神様の子とされる恵みを覚え、②神様の子とされる喜びへと導く。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「今までに、お父さんやお母さんからいただいたことで、いちばん嬉しかったことは、なんですか。」

2. 放蕩息子のたとえ話から、父親から離れていった弟について、聖書を開いて、みんなで話し合ってみよう。

〈例〉父親がまだ生きている間に、財産を分けてもらった（ルカ15：12）

全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いした（ルカ15：13）

ひどい飢饉で、食べるにも困り、豚の世話をした（ルカ15：14、15）

我に返り（ルカ15：17）

父親のもとに行った（ルカ15：20）

3. 弟が戻ってきたとき、父親はどのようにしましたか。

〈例〉まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけ（ルカ15：20）

憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した（ルカ15：20）

僕たちに、いちばん良い服と指輪と履物を持ってこさせ（ルカ15：22）

祝宴を開いた（ルカ15：23、24）

4. このたとえ話の弟は、神様から離れていた私たちの姿です。そして、父親の態度は、神様の私たちへの心を表しています。このたとえ話から、自分と神様との関係について、考えてみましょう。

〈祈り〉

神様、あなたから離れていたことが、どんなにあなたの心を悲しませていたか、このたとえ話によって教えてくださって、ありがとうございます。わたしのところに、あなたから走り寄ってきてくださり、あなたの子供としてくださいますことを感謝いたします。

〈聖書をさらに深く〉

1. 父親、放蕩息子、兄、それぞれの姿と心の動きをていねいに見ていきましょう。放蕩息子の姿に自分が重なることもあれば、兄の姿に自分が重なることもあるでしょう。中学生ぐらいになると、誰でも自由に生きたいと思い始めます。しかし、それが父である神様から離れていく自由ではなく、神様へと向かって歩んでいく自由であるべきことを確認しましょう。
2. もちろん、教会を少し離れたり、神様から気持ちが悪くても離れたりしたら、それでダメというわけではありません。放蕩息子に走り寄る父親の姿を見つめながら、神様の思いについて考えましょう。久しぶりに教会学校に来た子どもたちにも、むしろそのような子どもたちにこそ、神様が愛を注いでおられることを覚えましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 誰でも、自分の力で生まれてきた人はいません。神様の恵みによって、命を与えられ、子どもとして生まれてきました。私たちが神様の子どもとなるのも同じです。自分の力で神様の子どもになれる人はいません。ただ、神様が恵みによって私たちを神様の子どもとしてくださいます。救われること、そして神様を喜び、神様の栄光をあらわすことも、すべて神様の恵みであることを確認しましょう。
2. そのような救いの恵みは、イエス・キリストによって与えられました。神様は、ご自分の独り子をお与えになることで、私たちをもご自身の子どものように受け入れてくださいました。イエスさまは救われた者たちの長子と言われます。放蕩息子にも兄にも、イエスさまという信頼できるお兄さんがいることを覚えましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

10日（月曜日）

ヨハネによる福音書10章1～21節

Q. 良い羊飼いは羊のために何をする？

11日（火曜日）

ヨハネによる福音書10章22～42節

Q. ユダヤ人たちはなぜイエスさまを石で打ち殺そうとした？

12日（水曜日）

ヨハネによる福音書11章1～37節

Q. ラザロは墓に葬られてすでに何日たっていた？

13日（木曜日）

ヨハネによる福音書11章38～12章11節

Q. イエスさまに香油を注いだマリアを貴めた弟子は誰？

14日（金曜日）

ヨハネによる福音書12章12～36節

Q. 群衆は何を持ってイエスさまを出迎えた？

15日（土曜日）

ヨハネによる福音書12章37～50節

Q. 人々がイエスさまを信じなかったのは、誰の言葉が実現するためだった？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書10章38節～42節

(1) 頭に置いておくべきこと

マルタとマリアの家を訪れた主イエスとその一行をマルタはもてなします。大事なお客様が訪れたなら、そのお客様をもてなし、歓迎するのは当然のことです。お客様に喜んで頂こうと、最高の食事を用意し、準備をします。そのことによってお客様に対する歓待の意を表そうとするのです。その事実は決しておかしなことではありません。また、主イエスはこの箇所直前のところで、律法の専門家に対して、「行って、あなたも同じようにしなさい」と行くことを命じておられます。つまり、様々なことを行うことがここで完全に否定されているのではないということを私たちはここでまず確認しなければなりません。その上で、マルタの問題を見ていく必要があるのです。

(2) マルタの問題

マルタは、主をもてなそうとするあまり、「多くのことに思い悩み、心を乱している」のです。この状態は心があちらこちらに分散してしまっているということなのです。心が分散してしまった結果、主イエスへの愛と奉仕という思いからなされた業に思い煩いが生じているのです。その結果、マリアを裁き、足もとで主の御言葉に聞き入っているマリアをたしなめない主イエスにも文句を言っているのです。

マルタは「ただ一つの大切なこと」を見失ってしまっているのです。その「ただ一つの大切なこと」を見失うとき、人は中心的な事柄と周辺的な

事柄を見分けることができなくなり、思い乱れることになるのです。そこにマルタの問題があるのです。

(3) 御言葉に聞き入るマリア

マリアはマルタと違い御言葉に聞き入っています。御言葉に聞くことこそ「ただ一つの重要なこと」なのです。人は神の口から出る一つ一つの言葉に養われて生きることができるからです。ですから、御言葉をまず聞くこと、御言葉を聞くことを第一とすることが最も大事な、ただ一つの重要なことなのです。

私たちは奉仕をなす前に、まず、神様の私たちへの奉仕にあずかるのです。それは御言葉を与えてくださるといふ奉仕です。その御言葉の前にあるとき、私たちはその御言葉の御前に静まり、御言葉に聞くべきなのです。そして、神様の私たちへの奉仕である御言葉に聞いて、私たちは神様への感謝の応答としての行いである奉仕をするのです。

御言葉を聞いて考え、御言葉の前に静まるべき時があり、そのときこそ最も重要な第一のことなのです。それは神礼拝の時なのです。

神礼拝を守り、礼拝中心の生活を確立することこそ、私たちが神様を喜び、神様の御栄光を表す生活となるのです。ですから、私たちは命がけてこのことを守り、誰もそれを取り上げてはならないのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問3

子どもカテキズム

問3 私たちがすべきことは何ですか。

答 信じる私たちは、主の日にキリストの教会に来て礼拝をささげ、毎日、神さまにお祈りします。

〈信仰は聞くことによる〉

信仰は「聞くことにより、しかも、キリストのみ言葉を聞くことによって」（ローマ10：17）生まれます。人はイエス・キリストのみ言葉にあずかることによって救いを受けます。それゆえに、主の足もとに座ってみ言葉に耳を傾けることこそ、私たちの命と人生にとってただ一つ必要なこと（ルカ10：42）です。

私たち罪人を救いへと招いて下さるために、神は救い主イエス・キリストを証しする書（ヨハネ5：39）である聖書を与えて下さいました。聖書は靈感された神のみ言葉であり、キリスト者の信仰と生活の唯一の規準です。

祈りつつ聖書を読むとき、聖霊は私たちの心を照らして、イエス・キリストを信じる信仰を与え、私たちが救って下さるのです。

〈聖書と礼拝〉

もちろん聖書は、私たちがひとりで読むときにも救いの書です。それで私たちは、毎日聖書を読み、祈ります。そのようなことなみの中で、神はみ言葉と聖霊によって救いの真理を教え示し、救いの確信を堅固にして下さいます。

しかし、それだけでは不十分です。と言うよりも、聖書は本来キリストの教会において、とりわけ主の日の礼拝において読まれるべき書物なのです。聖書をひとりで読むいとなみは、礼拝の生活を前提としたところではじめて成り立つのです。

主日礼拝では聖書朗読がなされ、教会が公に任職した説教者によってみ言葉のときあかしがなされます。説教において聖書のみ言葉は、今ここで聞く者を生かし救う神の真理の言葉として語られます。「神の言葉についての説教が、すなわち神の言葉」（第二スイス信条）なのです。

聖書のときあかしである説教を通して、主イエス・キリストは聖霊において礼拝する者のただ中に生きてお臨みになります。まさに主は主の民とひとつとなられます。

そして聖霊は説教者を通して語られるみ言葉を用いて、主の民らに救いのみわざを適用なさいます。すなわち、昔主の弟子たちにふるわれた主の恵みのみわざが、今ここで礼拝する者たちの間にも、時空をこえてふるわれるのです。その意味で、聖書のみ言葉は礼拝において、また説教においてはじめて正しく聞かれると言えるのです。

（木下裕也）

テキスト ルカによる福音書10章38～42節

〔単元のねらい〕

マリアはよき模範、マルタはそうではない例とする比較で終りたくありません。ヨハネ福音書12章の場面を合わせ考えて、「誰にとっても、また、何をするにも、まず主のみ声を聴くことこそ必要である」。この点にアーメンと言えるようになることをねらいとしたい。

「聞き従って、魂に命を得よ」

ある日のこと、旅を続けておられたイエス様は、お弟子たちと共にベタニア村へとやって来ました。この村には、イエス様が愛しておられた姉妹マルタ、マリアが住んでいました(参照ヨハネ11:1,5)。

急な訪問であったかもしれませんが、けれども、久し振りにお会いするイエス様です。マルタはイエス様とお弟子たちを大喜びで家に迎え入れました。

さあ、大忙しです。大切なお客様が来られたのですから、精一杯のおもてなしをしなくてはなりません。マルタは、そう考えて頭をフル回転させます。

お皿の数はこれでいいかしら。まずは、お茶とお菓子がいいわね。あらやだ、このお菓子賞味期限が切れているじゃないの……。

ところが、ふと脇を見ると、妹のマリアは主の足もとに座ったまま、いくら待ってもこちらを振り向くことさえしません。イエス様も、マリアに話しているばかりで、私のことなどまるっきり目に入らないご様子。

数分が経過しました。堪りかねたマルタはついに、つかつかと主のもとに近付いて言いました。「主よ、何ともお思いになりませんか?」。マルタの不満はマリアに向けられるよりも、主に向けられていたのです。しかし、マルタが怒るのも無理ないことです。

さて、イエス様は何と答えられたでしょうか。まずはこれです。「マルタ、マルタ」。相手の名前を繰り返して呼ぶのは、主が人を諭す場合に用いる、言わば取って置きの方法です。シモン・ペト

ロとサウロもこの恵みを得ました(参照ルカ22:31、使徒9:4)。そして、主はここでも、繰り返してその名を呼ばれます。主は、不満で一杯のマルタの心に寄り添って下さいました。そして言われます。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱しています。しかし、必要なことはただ一つだけです。マリアはその良い方を選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

マルタは主をもてなし、主に喜んでいただくことを願いました。主は、その良き願いも心からの気遣いも十分知っておられます。しかし、主イエス様が受けたいと願っておられたもてなしは、おいしいお茶を出してくれることではなくて、マルタも座ってみ言葉を聴くことであつたのです。そして、主のみ声を聴くことは、誰からも取り去られてはならない人にとってただ一つの必要なことでもあるのです。主イエス様は、そのことを優しく諭されたのでした。

さて、それでは最後に、この42節から教えられるひとつの点に注目して終りましょう。それは、人にはどうしても必要なことがただ一つだけある、というこの点です。

「どうせ死んでしまえば何も残りはしない。どうしても必要なことなどありはしない。せめて生きている間、飲んで食べて騒いで、楽しくやろうじゃないか。」と言う考えは間違いなのです。しかし反対に、「あれも必要、これも必要、それも必要、どうしても必要なことばかりだ。ああ忙し

い」と勝手にきりきり舞いしているのも間違いなのです。勉強することも、学校へ行くこともどうしても必要なことではありません。

どうしても必要なことはただ一つであって、それは、主イエス様の足もとに座ってみ声を聴くことであるのです。なぜなら、人は主のみ声を聴くことによって初めて、魂に命を得ることが出来るからです。

主は言われます。「なぜ、糧にならぬもののために銀を畳って払い、飢えを満たさぬもののために労するのか。わたしに聞き従えば、良いものを食べることができる。……耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。」(イザヤ55:2~3)

もちろん、ただ聴くだけで、後は何もしなくていいと言っているわけではありません。主なる神は「力を尽くして、神と隣人とを愛せよ」と命じておられます。

そこで最後にヨハネ12:1~5を開けてみましょう。「逾越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた」。イエス様は十字架の死を目の前にして、再びベタニアに来られました。マルタは相変わらず給仕をしています。しかし、もういら立つ心の様子はありません。主に教えられて心落ち着いて

います。この日はきっと、まず、イエス様のお話を十分に聴いたのでしょう。心に平安と力を得て、それから賜物を生かして神と人に仕えます。マルタのこの主のみ前にある素直さは、見習うべき大いなる模範です。

さて、マリアはどうでしょうか。マリアは決して聴くだけの人ではありませんでした。今まさに身代わりの死を遂げようとしておられる主に仕え、300デナリ(およそ300万円)もする香油を惜しむことなく捧げたのでした。つまり、もしも私たちが主のみ心に適うことが出来ないとするなら、それは聴いてばかりいるからではなくて、主の足もとに座って聴くことが少ないからです。もしも、もっと十分に聴くことが出来、み旨を深く知り、み言葉の約束の確かさとそこに込められた主の愛と熱心を悟ることが出来たなら、きっと、主が動けるようにしてくださいませ。

もう一度、今日のみ言葉をかみしめよう。

「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱しています。しかし、必要なことはただ一つだけです。マリアはその良い方を選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。

(小野田雄二)

[今日の暗唱聖句]

イザヤ書55章3節前半

耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。

聞き従って、魂に命を得よ。

〈ねらい〉

御言葉（神の声）に聞き入ろうという姿勢で聴くとき、わたしたちはほんとうに主のみ心を知ることができることを伝えよう。

〈展開例〉

カーナビって知っているかな？ 車を運転するときに道案内してくれる装置だね。〇〇教会に行くのに「〇〇町の教会行き」ってこの装置にセットすると、地図上で今どこを走っているか、どう進んだらいいか教えてくれるんだよ。「まっすぐ進んでください」とか、「300メートル先を右にまがってください」とかね。便利な装置だ。迷

子にならないよね。

ところで、神様はわたしたちが生きていくのに必要な道案内をしてくださっているんだね。それは何かな？ そう聖書です。聖書はカーナビみたいに声をだしません。でもこれは神様の声、教えなのです。

どうやってその道案内を聞いたらいいのでしょうか。そう、礼拝をして心を神様に向けて、「どうぞ教えてください」という姿勢で、聴きたい、知りたいという心で聴くとき、神様は聖書と礼拝の説教によって語りかけてくださるのです。それで、わたしたちは正しい道を進むことができます。聖書は人生のナビ、生活のナビだね。

〈やってみよう〉

どんな顔が好き？

おこっているかお？ わらってる顔？ 泣いてるかお？

うたっているかお？ 眠っている顔？ たべてるかお？

いろんな顔があるね

いちばんすきな顔（表情）をかいてみよう！

いろんな表情の顔をいろいろかくのもいいね

○用意するもの

画用紙、クレヨン

〈ねらい〉

聖書の言葉に聞くこと、礼拝式を守ることがわたしたちにとって最も大切なことであることを伝える。

〈分級教師へのアドバイス〉

子どもたちは、多様な価値観の中にあります。その中でも勉強と学校は今の社会において最も重視されている価値観の一つです。未信者の家庭から送られている子どもは親が信仰についてどういふ評価をしているかを考慮して話の進め方を配慮しましょう。

分級の後、主日礼拝式の中で分級教師や親が、実際に礼拝式説教を大切にしている姿を見せることは大切なことです。

〈展開例〉

①今日の礼拝式のお話には二人の女の子が出てきましたね。なんて名前でした？

(回答例)

・マルタとマリア

②イエス様がいらっしゃった時、お姉さんのマルタさんは何をしました？

- ・おもてなしをした
- ・お菓子を準備した
- ・文句を言った

③マルタさんはイエス様が大好きだったから、一生懸命ご馳走を作ってあげようと思いましたね。でもマルタさんが失敗したのは、イエス様に文句を言っちゃったところですね。

④みんなは、イエス様が遠くから歩いてきて、み

んなのお家に来たら、どうします？

- ・ご馳走をあげる
- ・肩を揉んであげる
- ・お風呂に入れてあげる

⑤そうですね。みんな自分が出来ることでイエス様をもてなしてあげたいですね。

ところで、妹のマリアさんは何をしましたか？

- ・何もしていなかった
- ・座っていた
- ・イエス様のお話を聞いていた

⑥マリアさんは自分が色々なことをする前に、まずイエス様のお話を聞くことが一番大事なんだと良く知っていたんですね。

みんなはどこでイエス様のお話を聞くことができますか？

- ・聖書で
- ・家でお父さん、お母さんから
- ・教会の礼拝式で

⑦そうですね、いろんなところで聞くことが出来ますし、聖書を読めば誰でもイエス様のお話を聞けますね。でも、一番大事なのは、教会の礼拝式でイエス様のお話を聞くことですね。

〈祈り〉

天のお父様。今日も教会で礼拝式に出てイエス様のお話を聞くことが出来てありがとうございます。わたしたちがいつでもイエス様のお話を聞くことを大切に、よく聞くことが出来るようにしてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①主イエス・キリストの御言葉を聴くことの大切さを覚え、②御言葉を親しむことへと導く。

〈展開例〉

1. アイスブレーク（うち解けるための質問）
「あなたが一番好きな聖書の御言葉は、何ですか。」
2. イエス様がお話にさっていた時のマリアとマルタを比べてみましょう。
(例) マリアは、主の足もとに座って話に聞き入っていた（ルカ10：39）
マルタは、もてなしのためせわしく立ち働いていた（ルカ10：40）

3. どうして、イエス様は「マリアは良い方を選んだ」とおっしゃられたか、みんなで話し合ってみよう。

4. 教会学校や家庭で、御言葉を聴くことを大切にするには、どうしたら良いか、話し合ってみよう。

〈祈り〉

イエス様、私たちに今も聖書の御言葉をとおして、あなたの御心に従うことができますことを感謝いたします。どうぞ、いつも心からあなたの御言葉を大切に聴くことができるように助けてください。

〈聖書をさらに深く〉

1. 別の箇所のマルタ・マリア姉妹も確認しておきましょう（ヨハネ11～12章）。物静かなマリアさんと、世話好きなマルタさん、自分はどちらのタイプか話してみると、興味深いでしょう。しかし、物静かであればいいというわけではありません。誰でも、いろいろなことが気になって、御言葉を読み、聞くことの大切さを失うことがあるはずです。つまり、誰でもここでのマルタのようになる危険があるのです。
2. 学校の授業などでも静かに集中して先生の話聞くということが難しい子どもが増えていきます。まして、礼拝の説教を集中して聞くことは大変なことかもしれません。礼拝中の自分たちの姿勢について正直に話し合いながら、御言葉を聞くことの大切さを確認しましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 小教理問2～3（聖書について）、問88～90（恵みの外的手段としての御言葉）などの箇所を開きながら、御言葉を味わうことの大切さを確認しましょう。御言葉によって、人生の目的を知り、何を信じ、何をすればよいかを知ることができます。子どもたちが毎日どれぐらい聖書の言葉にふれているかを聞きながら、毎日聖書を読むことを励ましましょう。
2. 小教理問57～62（第四戒について）を開きながら、主日礼拝の意義について確認しましょう。主の日に集中して礼拝をささげ、御言葉を聞くことが、毎日の祈りの生活を整えてくれること、また逆に、主日礼拝のために、毎日、御言葉を読み、祈りながら備えることが大切であることを覚えましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

17日（月曜日）

ヨハネによる福音書13章1～20節

Q. イエスさまはたらきに水をくんできて何をされた？

18日（火曜日）

ヨハネによる福音書13章21～38節

Q. イエスさまが与えてくださった新しい掟とは？

19日（水曜日）

ヨハネによる福音書14章1～31節

Q. 父なる神が遣わす弁護者とは？

20日（木曜日）

ヨハネによる福音書15章1～27節

Q. イエスさまの言葉がいつも私たちの内にあるなら、どうなる？

21日（金曜日）

ヨハネによる福音書16章1～33節

Q. イエスさまに再び会うとき、悲しみはどうなる？

22日（土曜日）

ヨハネによる福音書17章1～26節

Q. 永遠の命とは何？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト コリントの信徒への手紙一12章12節～31節

(1) 体のたとえ

パウロは12章1節から、教会に与えられている霊的な賜物の多様性について語ってきました。その霊的賜物が多様であることは教会の本質的なことであること、そして、霊的多様性は人間の体の場合と同じように、それぞれが別れがたく一致していることを示すのです。そのためにここでパウロは体のたとえを示すのです。

(2) 賜物の多様性

パウロはまず、体が種々の部分からなっていることを語り、キリストの体も当然体である以上種々の部分からできあがっていることを明らかにするのです。その体のそれぞれの部分になぞらえて教会の賜物の多様性を語っているのです。ですから、教会に賜物が多様であることはキリストの体である以上本質的なことであるというのです。

その上でパウロは体はその全体の調和で成り立っていることを明らかにしています。つまり、どんなに一人の人が際だって、他のものと違うからといって、この体というまとまりから脱してもいけないということを説明しているのです。賜物の多様性がある一方で、一つ一つの多様な賜物があって初めて、体は調和し、一つのものとなることができるのであって、その調和のためにどの賜物も欠いてはならないものなのです。

(3) 弱い者と強い者

このところで、賜物の多様性によって明らかにされる事柄は教会にそれぞれに賜物を持つ多くの人がいるという事実です。その中で、弱い者と強い者、尊ばれない者と尊ばれる者がいるということです。おそらくその中で教会内で差別が生じ、

また、教会の分裂の原因となっていたのでしょう。パウロはそのことについて、体のたとえを続けて明らかに教えています。体の中にも弱く小さい部分があり、尊ばれない部分があるのです。しかし、その小さな部分がより重要な役割をなし、体を支える役割を担うのです。つまり、神様はその小さく弱い者をも、その体のために調和するように配慮なさっているのです。そして、その弱い部分を通して、神様の御力と御栄光を豊かに表してくださるのです。

そのような神様のご配慮により、強い者と弱い者がいる教会の一致を保ってくださいます。ですから、教会には神様がなさっているように、弱い部分を配慮することが求められるのです。

(4) もっと大きな賜物を求める

27節以下で、ここまでにたとえて述べた多様な賜物についての適用が記されています。

パウロはこのところで、第一に、第二に、と賜物の区別をしていますが、これは職務に優劣の差があるということを表しているわけではありません。この分類は、これらの賜物を持つ人が神様から受ける献納と全権と任務を表しているだけなのでしょう。パウロは神様からの賜物による働きについて抑制しようというのではなく、むしろ、種々の賜物における働きに秩序を与えようとしているのです。そして、その神様から与えられる賜物を求めて努力することは、神様が求められることであり、賜物を得るための手段は祈りなのです。その祈りにより、教会に一致を与える賜物、つまり愛という最も偉大な賜物を教会が求めることを御言葉は願っているのです。 (春名義行)

5月23日 「キリストの体なる教会」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム問3

子どもカテキズム

問3 私たちがすべきことは何ですか。

答 信じる私たちは、主の日にキリストの教会に来て礼拝をささげ、毎日、神さまにお祈りします。

〈キリストの体なる教会〉

神は永遠の聖定において、贖い主イエス・キリストにあって救いの恵みのうちに選んで下さいました。そしてイエス・キリストをかしらとする恵みの契約につらなる者とし、さらにキリストの体なる教会につらなって生きるひとりひとりとして下さいました。

教会のかしらなるキリストがおひとりである以上、その体なる教会もひとつです。その構成員は「過去、現在を通じてひとつに集められた選民の全員」(ウエストミンスター信仰告白25章1節)です。このひとつなる教会は、使徒信条において「聖なる公同の教会」と告白され、「時代や場所の制約をこえて歴史と世界の全体を包み、天と地をつらぬいて存在」(矢内昭二『ウエストミンスター信仰告白講解』)しています。

私たちはこの「聖なる公同の教会」のひとつの肢体です。そのことを確かめるなら、私たちの信仰のいとなみは決して孤独なものではなく、ともにかしらなるキリストに結び合わされて生きる聖徒の交わりの祝福の中でおこなわれていくいとなみであることがわかるのです。

聖書をひとりで読んでいくだけでは不十分で、

礼拝につらなり、説教を聞く中ではじめて聖書がわかるのと同じように、教会から遠ざかってひとりで信仰生活をなすというのはキリスト者の本来のありかたではありません。「教会の外に救いなし」という言葉は正しいのです。私たちは教会につらがり、ともに神を崇め、神が教会に備えておられる恵みの手段にともにあずかり、聖化の祝福をわかちあいつつ歩むのです。

〈聖徒の交わり〉

教会に生きる主の民は、かしらなるキリストから来るいっさいの賜物を分け合い、自分の救いのみならず兄弟の益と救いのために、賜物を喜んでささげ、たがいに配慮し合います。また苦難にともにあずかり、ともに忍耐し、喜びも悲しみもひとしく分け合います。キリストの体の部分として、まさに「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」(コリント一12:26)のです。そのような主にある交わりのうちに、私たちは文字通りひとつとされ、「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」(エフェソ4:13)のです。(木下裕也)

テキスト コリントの信徒への手紙一12章12～31節

(単元のねらい)

コリント教会の問題点を確かめた上で、教会に呼び集められていることの恵みを覚えたい。また、自分自身と隣人を見る見方を変えられたい。すなわち、自分自身の判断だけで見る見方から、主が一人一人を尊く見詰めておられるその見方を見ることへの変化である。この変化に近づくことをねらいとした。

「一つの体、多くの部分」

新約聖書の中には、いくつもの教会が出てきます。例えばテサロニケの教会、この教会は、信者の模範と呼ばれるほどの良い教会でした(テサロニケ一1:6～8参照)。しかし、良い教会ばかりではありません。中には、驚くほど問題を抱えた教会もあったのです。そして、その一つがコリント教会でした。

では、コリント教会で、どんなことが起こっていたのでしょうか。深刻な問題の一つは仲間割れという問題でした。12:21でパウロは教えています。「目が手に向かって『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません」。ここでの目、手、頭、足はそれぞれある兄弟たちのことを示しています。つまり、コリント教会の中のある兄弟たちが、他の兄弟たちに向かって「私は君を必要としていない。だから、君は教会にいてくれなくていい」と言っていたのです。何ともひどい言葉です。もしも、同じことを言われたらどうでしょうか。本当に嫌になってしまい、もう二度と教会になんか行かない、と思うことでしょう。しかしどうして、「互いに愛し合いなさい」とイエス様から教えられている一人一人であるのに、こんなことが起こっていたのでしょうか。実は、その答えが5:6に出ています。「あなたがたが誇っているのは、よくない。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか」。パン種とは、パンを作る時、麦粉を練ったものに加えて膨らませるための物です。聖書では、ほとんどの場合、少して

全体を変質させてしまう悪の原理を象徴しています。ここでもそうです。神様はコリント教会に恵みを豊かに与え、イエス様を信じる人を沢山呼び集めてくださいました。祝福は十分です。ところが、それぞれの心に悪い意味での誇り、高慢の罪があったのです。そして、その高慢が良きものの全体を変質させてしまったのです。それぞれに「私は誰より優れている。常に正しい。悪かな君とは違う。悪いのは、何時だって君の方だ」と思っていたのです。これでは、どんなに賜物を与えられていても、仲間割れはひどくなるばかりで、止められません。

どうしたらよいのでしょうか。二つのことが必要です。一つは、悔い改めることです(5:7-8)。そしてもう一つは、神様が教会に呼び集めた一人一人をどのように見ておられるかを、心低くして学ぶことです。

実に、コリント一12章はこの二番目の必要に答えてくれる箇所であるのです。

それでは、順に学んで行きましょう。

使徒パウロは、教会を人の体になぞらえて教えます。「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。あなたがたはキリストの体であり、また一人一人はその部分です」(12、27)。私たちの体は手、足、耳など多くの部分から成っています。さて、体の中で必要ではない部分というのはあるのでしょうか。あり

ませんね。その一つの例として、顔にある眉毛を考えてみましょう。眉毛は何のためにあるのでしょうか。目ならば見るため、耳ならば聞くためと、すぐに答えられますが、眉毛はちょっと難しいかもしれません。

ヒントをあげましょう。夏の暑い日のことです。山の向こうのおじいさんの所まで、採りたてのスイカを届けなくてはなりません。水筒に水を一杯詰めて、さあ出発。日が照りつける中、山道を登り下りすると、すぐにも汗が吹き出ます。額からも汗がどっと滴り落ちます。さて、ここで眉毛がなかったらどうなるでしょう。そう、汗がそのまま目に入って困ってしまいますね。

普段は、その役割を気に留めることもない眉毛。しかし、汗が滴り落ちる、ここぞと言う時、目を守るために（それは同時に体全体を守ることになります）眉毛は無くてはならない大切な部分であったのです。

そのように、たとえ人の目には、要るか要らないのか分からないように見えたとしても、全体の益のために、いなくていい人は一人としていないのです。誰もが無くてはならない一人です。「神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました」(24)と、ある通りです。

さて、体の各部分は、その働きにおいて違ってはなりません。鼻が耳と同じ働きをしたのでは、よい香りをかぐことが出来なくなるからです。そのように、私たちは一人一人違ってはなりません。けれども、また、それぞれの部分は互いを必要ともしています。例えば、右足の小指がひどく痛むとしましょう。すると、もう歩けません。右足の小指が元気になるまでは、足はどんなに元気でも、その役割を果たすことが出来ません。また足が元気でなければ、小指は治った時、出番がなくなってしまいます。そのように、互いに互いを必要としているのです。「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」(26)、そういうものとして神様は私たちを呼び集めてくださっているのです。主はこんなにも一人一人を尊く見ておられるのです。「お前は要らない」などと、どうして言ってよいでしょうか。

時には、仲違いが起こって来るかも知れません。その時には、今日の御言葉を繰り返し読みましょう。そして、苦しみも喜びも分かち合う仲間として、もう一度、進んで行こうではありませんか。

(小野田雄二)

[今日の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙一12章26節

一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、
一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

〈ねらい〉

わたしたちは教会に集められ、共にキリストを礼拝するとき、わたしたちがキリストの一つの体であることがわかり信じられるようにされることを示す。

〈展開例〉

礼拝のお話でイエス様を信じるわたしたちは皆でひとつの体であることを聴きましたね。わたしたちは一人ひとりちゃんと体があるのに、わたしたち皆で一つの仲間とされて、目に見えないキリストの体とされているのですね。

わたしたちが神様によって教会に集められて、

礼拝するとき、わたしたちが一つの体であることが信じられるようになるのですよ。だから、「あっ、〇〇ちゃんも来ていて、〇〇せんせいもいる。一緒に礼拝できてうれしいな」と思ったりする。また、「〇〇ちゃん、今日はお休みだ、どうしたんだろう？」と思うのも、イエス様を信じているわたしたちが一つの体とされているしるしなのです。だから、わたしたち一人ひとりがなくてはならない大切な人なんだよ。

それから、わたしたちはひとつの体として、ほかの人のためにお祈りしたり、一緒に遊んだり、助け合ったりすることが心からできるようにされているのですよ。

〈やってみよう〉

ためしてみよう！

○体の一部が使えないとどんなに困るか体験してみる。

机等にぶつからないように注意してください。

例1 片手をタオルでしばり、もう一方の手で空のダンボール箱を持ち上げてみる。

例2 片手または両手の小指に包帯をして、座布団を持ち上げてみる。

例3 目隠しで（危険がなければ）目標まで歩いてみる

○どんなことがわかったかな。話し合ってみよう。

〈ねらい〉

わたしたちにはそれぞれの固有の賜物や働きがあり、他の人の賜物を重んじ、自分の与えられた賜物を十分に用いることが大切であるということを示す。

〈分級教師へのアドバイス〉

教会の子どもたちは、教会学校の教師以外の教会のおとなたちについてあまり知らないものです。教会の中でどんな奉仕がされているのか、この機会に確かめてみるのもよいでしょう。

「奉仕をしている人」を取り上げるのではなく、「みんなが教会に集うことによって教会を建て上げている」ことを伝えることが出来るように注意しましょう。

〈展開例〉

①みんなの体にはたくさんの部分があるね、

いくつ知っている？

(回答例)

・目、手、足、口

②じゃあ、「目」はどんな仕事をしてる？

(答が出ない時は、実際に目を閉じてみると判りやすく、興味を持たせられる。)

・物を見る

③「手」は？「足」は？「口」は？

・物を持つ

・歩く

・話す

④じゃあ体の中でいらないところはあるかな？

・盲腸（ご飯が消化できなくなる）

・爪（ひっかく時に困る、お洒落が出来ない）

⑤体の中にいらないところなんてないよね。

⑥パウロさんは、教会のわたしたちは、みんな神様の体でみんなそれぞれに役割を持っているから、いなくてよい人なんていないことを教えてますね。

⑦じゃあわたしたちは教会で何が出来るかな？

・お手伝い

・片づけ

・お祈り

⑧礼拝式に出てきちんと聖書のお話を聞くのも大切なお仕事ですね。

〈祈り〉

天のお父様。今日も教会に来ることが出来てありがとうございます。たくさんの人たちのおかげでわたしたちも礼拝式を守ることが出来ました。またわたしたちも一生懸命お祈りして賛美歌を歌って教会の礼拝式を作っていくことが出来るようにしてください。イエス様の御名によってお祈りします。

〈あそぼう〉

「だるまさんの【からだ】ゲーム」

①基本ルールは「だるまさんがころんだ」

②鬼が目をつぶって言うセリフ「だるまさんの～」の後にからだの一部を言う。

③近づく人は、言われた場所を押さえながら止まらなければいけない。

〈ねらい〉

①教会がイエス様の体であることを覚え、②互いの交わりと関心を深め、③支え合い、助け合うように導く。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）
「互いに友だちの長所（よいところ）を考えてみましょう。」
2. 教会は、イエス様の体です。イエス様から、イエス様の救いに招かれた人たちの集まりが教会です。建物のことではありません。イエス様を信じる一人一人は、みんなイエス様によって繋がっています。教会の中心は、イエス様です。だから教会は、イエス様の教会です。
3. 右手にけがをしてしまうと、左手をいつもより多く使うようになります。私たちの体は、どこか痛い所があると、体中がその部分を守

ります。同じように、教会は、イエス様の体なので、だれか苦しんでいる人がいたら、みんなで助けたり、支え合います。あなたもそのようなことのために、できることを考えてみましょう。

4. 教会や教会学校の友だちのうちに、何かで困っている人や、苦しんでいる人がいますか。もしいたとしたら、あなたがその人のために、何かできることを考えてみましょう。

（例）お祈り（とりなしの祈り）

小さなカードを書いて送る
やさしい言葉をかけること
具体的な協力など。

〈祈り〉

イエス様、私たちをあなたの体である教会にならせてくださって、ありがとうございます。どうか、イエス様の教会の中で、苦しんでいる人たち、悲しんでいる人たちに、互いにみんなで支え合い、助け合うことが出来るように導いてください。

〈聖書をさらに深く〉

1. コリント教会について確認しておきましょう。
パウロが伝道し、大きく成長した教会でしたが、様々な問題が起っていました。分派争い、不品行、礼拝秩序の乱れなど、問題が絶えませんでした。しかし、そのようなコリント教会に対して、パウロはなお、「あなたがたはキリストの体」であると言います。どのような教会もキリストの体として生かされていることを覚えましょう。
2. 一人一人に個性があるように、信仰の賜物も多様です。誰一人として、教会において無駄な存在ではありえません。具体的に自分たちの教会にどのような奉仕があり、自分でも何かできることはないか、共に考えてみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 教会とは、ただ自分たちの通う〇〇教会のことだけではありません。聖なる公同の教会は、時代や場所の制約を越えて存在しているものです。コリント教会もまた、聖なる公同の教会です。聖書の言葉を、昔の教会に対する言葉として読むのではなく、自分たちを含むすべての教会への言葉として真剣に受け止めます。
2. 教会に来て、礼拝をささげ、また奉仕をすることが喜びとなっているのでしょうか。自分に与えられた賜物は何かを考え、話し合うと共に、他の人の賜物についても話し合ってみましょう。気付いていなかった賜物をお互いに知るようになれるかもしれません。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

24日（月曜日）

ヨハネによる福音書18章1～18節

- Q. 捕らえられたイエスさまはまず誰のところに連れて行かれた？

25日（火曜日）

ヨハネによる福音書18章19～38節

- Q. 明け方、イエスさまは誰のところに連れて行かれた？

26日（水曜日）

ヨハネによる福音書18章39～19章27節

- Q. 十字架を背負い、イエスさまが向かった場所の名前は？

27日（木曜日）

ヨハネによる福音書19章28～42節

- Q. イエスさまの遺体を取り降ろしたのは誰？

28日（金曜日）

ヨハネによる福音書20章1～31節

- Q. 最初にイエスさまのお墓に行った女性は誰？

29日（土曜日）

ヨハネによる福音書21章1～25節

- Q. イエスさまはペトロに「わたしを愛するか」と何度質問した？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト 使徒言行録2章1節～13節

(1) 一つになって集まる弟子たち

このところで弟子たちは、もはや恐れによって部屋に閉じこもっているのではなく、祈るために一つ所に集まって来ていました。また、この箇所では、五旬祭のために集まっているといわれています。弟子たちは復活のキリストと出会って、キリストに期待しつつ、恐れず大胆に集まっていたことが明らかにされていることは確かです。

(2) 五旬祭の日の出来事

弟子たちが部屋に集まっていると、大きな風の吹くような音と共に、炎のような舌が分かれて現れ、一人一人の上に止まったという出来事が起こったのです。この出来事は「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」と語る洗礼者ヨハネの言葉を連想させるものです。さらに、風は「霊」や「聖霊」を表現するもので、その風が吹いたということで、聖霊の到来を告げているのです。さらに、炎は神様の臨在の徴であり、ここで神様の霊の表れとして記されています。これらのことを通して、キリストが約束された聖霊が、この時、与えられたことを知ることができるのです。この五旬祭の時にこの聖霊降臨の出来事を体験した弟子たちは、キリストによる収穫を期待したことでしょう。なぜなら、五旬祭は収穫を祝う祭りだったからです。

この霊が最初に弟子たちに与えた賜物は語る賜物だったのです。キリストは聖霊を通して御臨在くださり、語るべき言葉を賜物としてお与えになったのです。そればかりではなく、外国の言葉で語る賜物もお与えになったのです。つまり、聖霊は

この弟子たちを世界宣教へと導いているのです。

(3) 人々の反応と福音の広がりへの期待

この何とも不思議な出来事と大音響は外を通る人々を引きつけ、福音が語られる所へと彼らを導き入れるのです。そこで聖霊による出来事を見た人々はとまどいを起こすのです。なぜなら、各国の言語で弟子たちが語っているからなのです。それを見たある人々は新しい酒に酔っているとあざけったのです。あのあざけた人々も含めそこにいた人々がその出来事が真実であることの証人となってここに現れているのです。

この多くの国の言語で弟子たちが語らされた事実は、地の果てまで及ぶと語られた主の福音宣教の広がりを期待させるものです。もちろんまだ何も始まっていませんが、主に期待していた弟子たちをその宣教に用いようとしておられることを想像することは、決して難しいことではないのも確かな事実です。

(4) 主の霊によって起てられるキリストの教会

この聖霊による宣教の業によってその日の内に3000人が信じ、パンを裂くことと祈ることに熱心な弟子たちの集いに加えられたことが明らかにされています。ここで明らかにされているのは礼典と祈りに熱心な集い、つまり、キリスト教会の姿が明らかに示されているのです。この聖霊降臨の出来事により、御言葉に聞き、礼典を行い、祈りを捧げる真の教会が、聖霊を通して働かれるキリストの御力によって建てられたのです。

(春名義行)

テキスト 使徒言行録2章1～13節

(単元のねらい)

聖霊降臨祭当日であるので、教会誕生に至る経過を辿ることとした。それによって、聖霊降臨なくして教会はありえないことを学ぶためである。このため、使徒2章を直接取り上げることはしていない。弟子失格の我らをも見捨てず、主の栄光のために用いてくださるキリストと聖霊の恵みを覚えることをねらいとした。

「弟子たちは、主を見て喜んだ」

誰にでも、年に一度巡って来る記念の日があります。そう、誕生日です。それでは、教会の誕生日はいつでしょうか。実は、今日が教会の誕生をお祝いするその日、聖霊降臨日であるのです。誰でも、お母さんがいなくては生まれ来ることは出来ません。教会もそうです。教会はイエス様が遣わしてくださった聖霊によって生まれ来たのです。

そこで今日は、聖霊によらなくては、教会は生まれ来る事が出来なかったことを学んで行きましょう。

まず、教会とはどんな所かを確かめておきましょう。教会とはイエス様を信じる人を中心とした人の集まる所です。そして、教会には決まって聖書があり、礼拝が行われます。なんだ、それだけなら特別大したことないじゃないか、聖霊によらなくても人は集まる事が出来るし、聖書を読むことも出来る、とそう思うかも知れません。しかし、教会の一番の務めは、礼拝と主に仕えることにより、神の国の王である主イエス・キリストを証しすることであるのです。すなわち、信者でない人が、教会に来られた時に「まことに、神はあなたがたの内におられます」と言い表し、ひれ伏して神を礼拝する者となること、それ程の変化を生み出す、主の臨在を生き生きと現わすためにこそ教会はあるのです(コリントー14:24～25)。ですから、キリストの栄光を現わすところの聖霊(ヨハネ16:14)こそ、教会の命であるのです。

さて、今からおよそ二千年前、教会が誕生するすぐ前のこと。イエス様には、既にお弟子たちがいました。イエス様を信じる人々の集まりは、既にあったのです。しかし、教会が誕生するためには、まだ足りないものがあったのです。それが一人一人に与えられる聖霊の力でした。では、この点をマルコ福音書14:27に戻って、そこから見て行くことにしましょう。

ここは、主イエスが十字架に架けられる前の日、その夜の場面です。主は、数時間後にご自分が捕らえられることも、明日には十字架に架けられることもよくご存じでした。この時、主は弟子たちにつまずきを予告され、さらにベトロには三度に及ぶ否認を予告されました。すると弟子たちはこう答えた31節にあります。「ベトロは力を込めて言い張った。『たとえば、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどは決して申しません。』皆の者も同じように言った」。誰もが、イエス様を裏切るようなことをするはずがないと思いました。しかし、この主の予告は全部その通りになったのです。

その夜更け、主を捕らえるために群衆がやって来ます。すると、弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げてしまいました。ベトロも三度主を知らないと言ってしまう。主の仲間と分かったなら、自分たちも捕まってしまうかも知れないと思って、怖くてたまらなくなってしまうのです(マルコ14:27～72)。けれども、これでは弟子失格です。次の日、主は十字架に架かって、人々の嘲りと罵

りの中で死なれ、そして墓に葬られました。

さて、それから三日目のこと。主がよみがえられた週の初めの日を迎えます。そこで、次にヨハネ福音書20章19節を開けてみましょう。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」のでした。弟子たちはまだ主の復活の事実を知りません。この時、弟子たちの頭にあったのは「もうダメだ……」ということばかりでした。なぜなら、頼みのイエス様は捕らえられ、処刑されてしまいました。自分たちは自分たちで、あれほど言い張っておきながら、あっという間に主を見捨てて逃げてしまい、ちっとも頼りになりません。回りの人々は嘲り罵るばかりで、自分たちは孤立している。いや、もしかすると、ユダヤの当局者たちが、弟子である自分たちを捜し出して捕らえに来るかもしれない。捕まったならどうなるだろうか……。鍵が掛かっていることを何度も確かめて息をひそめます。そしてまた、暗い夜がやって来ようとしていました。恐れと不安と絶望感で一杯です。しかし、これで終りません。いいえ、ここから教会は始まりの初めを迎えたのです。なぜなら、望みの絶えたところに罪と死に打ち勝たれた主イエス様が来てくださったからです。主

は来て真ん中に立って言われました。「あなたがたに平和（平安）があるように」。弟子たちを責める言葉は一つとしてありません。驚く弟子たちに、主は十字架上で御傷を示して、まことにご自分であることを教えられます。そしてこの時、弟子たちは主を見て喜んだのです。暗く沈んでいた彼らの顔が、喜びで輝いたのです（ヨハネ20：19～21）。

イエス様は、その後、天に帰られる前、弟子たちに一つのことを命じられました。「聖霊が降るその日を待て」という命令です。弟子たちは喜んで待ちました。なぜなら、第一に、自分たちは力なき弱虫であって、主を証しする力が全く無いことを悟ったからです。そして第二に、主は望みなき自分たちを見捨てることなく、恵みを与え、成し遂げる力をくださる方であることを心深く知ったからです。

こうして、弟子たちが、まことに整えられた後、使徒2章にある通り、約束の聖霊は来て一人一人に豊かに臨んでくださったのでした。主イエス・キリストを証しする教会は、こうして誕生したのでした。主の先立つ恵みを覚え、信頼して進みましょう。（小野田雄二）

【今日の暗唱聖句】 使徒言行録1章8節

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。

そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、
また、地の果てに至まで、わたしの証人となる。

〈ねらい〉

新約聖書時代の教会も、今日の教会も聖霊なる神様が働いてくださるので、いつも新しいのです。そのいつも新しくされている恵みを伝えよう。

〈展開例〉

今日は、教会の誕生日ですね。みんなは誕生日が好きですか。プレゼントをもらったり、ケーキを食べたりできるのでからうれしいよね。普通、誕生日の一番大切なことは何かな？

誕生日は、今日で〇才になったことをお祝いする日だね。5才になった、6才になったってお祝

いする日ですね。

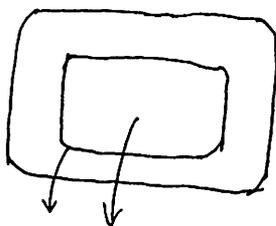
わたしたちの〇〇教会は〇月で〇〇才になります。ずいぶんたちますね。もう年寄り教会かな？

建物はだいぶ古くなったけど、このイエス様の体である教会は、何才になっても年寄りにはならないのですよ。どうしてかな？ 聖霊なる神様が聖書と一緒に働いてくださって、教会にいつも力と愛と喜びと希望を与えてくださるので、いつも新しいし若いのですよ。不思議でしょ。聖霊なる神様の働きと力によるのですよ。教会はいつもその新しい心で神様に仕えていくのです。

〈やってみよう〉

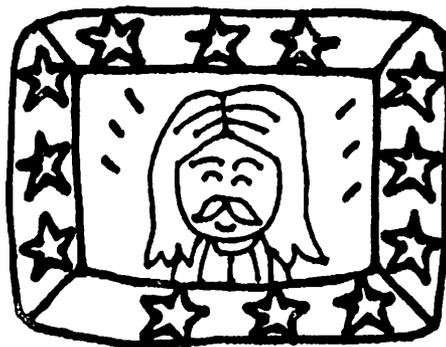
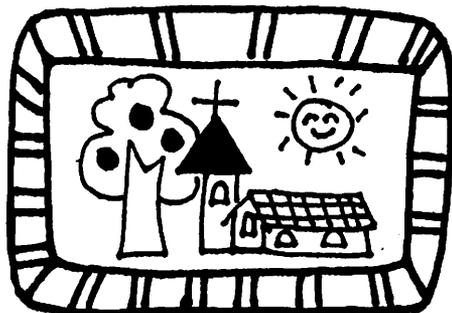
教会の絵をかいて飾ろう！

○スチロールトレイを使って額づくり



- ①切り取って穴をあける
- ②凹面をおもてにして、枠を自由に飾る
(例) リボンを巻く
布を両面テープで貼る
色紙を貼る (ちぎって張る) など

○画用紙に絵を書いて、裏から張る



〈ねらい〉

聖霊なる神様の働きによって、わたしたちがキリストを伝える力と賜物を与えられること、教会を形成出来るようになることを覚える。

〈分級教師へのアドバイス〉

説教と別のお話をするのではなく、むしろ説教のポイントを逃さないように深めることが出来るよう気を付けましょう。

「聖霊」が人格を持つ神様であることに注意して言葉を選びましょう。

〈展開例〉

①ペトロさんたちがお話をした時は、エルサレムの町にはたくさんの国の人がいましたね。どんな国があったかな？

(聖書を開くことができればみんなで読む)

②みんなはほかにどんな国を知っているかな？

(回答例)

・アメリカ、中国、フランス

③アメリカは何語を話すか知ってる？

・英語

④みんなは英語をしゃべれる？

(低学年でも英語教室に行っている子がいるの

で、単語くらいは知っているかも)

じゃあ、中国語は？フランス語は？

⑤弟子たちは、色んな国の人に色んな国の言葉でイエス様のことをお話をしましたね。みんなはできますか？

・できる

・できない

⑥弟子たちは、聖霊なる神様に助けていただいたから、色んな国の人にお話しすることができたんですね。そのおかげで今みんなは、世界中どこに行っても教会に行ってお祈り式に出ることが出来るんですよ。

⑦みんなも聖霊なる神様に助けていただいて、どんなところでも、どんな人にもイエス様のお話しをすることができるようになるのです。

〈祈り〉

天のお父様。聖霊なる神様がお弟子さんたちと一緒にいてくださったおかげで世界中に教会ができて、世界中の人がイエス様を信じる事ができるようになり、ありがとうございます。わたしたちも聖霊なる神様に助けていただいて、イエス様のことをよく信じる事ができるようにしてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①イエス様を信じている者に、聖霊が注がれていることを覚え、②聖霊によって、神様と教会に仕えることができることを確認し、③その喜びを分かち合う。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「聖霊なる神様からいただいている恵みを、互いに話し合ってみましょう。」

2. イエス様を信じている人には、どの人にも聖霊が注がれています。聖霊の働きによって、イエス様を信じていることができます。大人でも、子供でも、みんな同じ聖霊が注がれています。

3. 聖霊が注がれているので、神様に仕えることができるようにされています。そして聖霊の働きによって、人にも仕えることができます。

4. 聖霊が心に満ちあふれると、神様と人を愛する愛に満たされます。また、心が神様を喜ぶ気持ちでいっぱいになります。聖霊からいただいた愛や喜びを互いに分かち合ひましょう。

〈祈り〉

聖霊なる神様、私たちの心に降って、あなたの愛と喜びに満たしてください。そうして、神様と教会に心から仕えることができるようにしてください。その喜びを、私たちが互いに分かち合うことができますことを感謝いたします。

〈聖書をさらに深く〉

1. 十字架と復活（過越祭）、昇天、そして聖霊降臨（五旬祭）への出来事の流れを、カレンダーでたどりながら確認してみましょう。今年で言えば、4月9日の金曜日に十字架にかかられたイエスさまは、11日の日曜日に復活、その後40日にわたって弟子たちに現れた後で昇天されました。そしてその10日後、復活からは七週間後の今日5月30日に聖霊が降りました。
2. これらの出来事の中で、弟子たちの姿と気持ちがどのような変わったか話し合ってみましょう。十字架のときには愚かに逃げ出した弟子たちも、復活のときには驚きながらも喜びます。そして天に昇られたイエスさまからの聖霊の約束を信じて、なお10日も待ち続けましたが、この間の気持ちについても考えてみましょう。そして聖霊が降って、弟子たちは大胆に語り始めたのです。

〈教理を響かせるために〉

1. 子どもたちには聖霊についての理解が最も困難かもしれません。まず聖霊に関わるものとして子どもカテキズム問10を確認しましょう。弟子たちの上に降った聖霊は、神様ご自身であることを覚えましょう。
2. 次に問28以下、特に問30によって、聖霊が働いてくださるからこそ、私たちがイエスさまを信じ、イエスさまと一緒にいられることを確認しましょう。逆に言えば、イエスさまを信じているならば、私たちの中に聖霊なる神様がいてくださることも信じていることができるのです。
3. そして、問65によって、聖霊の働きが教会の誕生と歩みに深く関わっていることを確認しましょう。自分ひとりでイエスさまを信じていくのではなく、教会の中で、教会の人たちと共に、主を信じていくのです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

31日（月曜日）

使徒言行録1章1～11節

- Q. イエスさまが弟子たちに、離れないでいなさいと言われたのはどこ？

1日（火曜日）

使徒言行録1章12～26節

- Q. 新しい使徒に選ばれたのは誰？

2日（水曜日）

使徒言行録2章14～36節

- Q. 神様の霊が注がれるとき、息子と娘、若者、老人は何をする？

3日（木曜日）

使徒言行録2章37～47節

- Q. ペトロの説教を聞いて、その日のうちに教会の仲間に加わったのは何人？

4日（金曜日）

使徒言行録3章1～10節

- Q. 金銀はなかったペトロとヨハネは、足の不自由な男に何をしてあげた？

5日（土曜日）

使徒言行録3章11～26節

- Q. 自分の罪が消し去られるように、何をすればいい？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書10章25～37節

ユダヤ教では、「自らの正当性」を示そうとするために、律法を用います。これは律法を解釈するにあたり、根本的な誤りを犯しています。そしてこのテキストで、主イエスは、律法の正しい用方を教えておられます。

〈律法の用法〉

律法の用法は三つあると言われます。第一に私たちに善悪の規準を示します。第二に神様の規準において自らの生活を照らした時、私たちは、律法を完全に守ることの出来ず、罪を有していることを気が付かせ、悔い改めと主イエスへの信仰へと導きます。そして第三に律法に従った生活へと導かれていきます。主イエスは、この律法の第三用法に注目しておられます。

〈知識としての律法〉

律法の専門家は、「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」と答えたように、律法に何が書かれており、その中心的な教えである永遠の生命を受け継ぐには何が必要かを知っていました(27)。最も重要な二つの戒めです(申命6:5、レビ19:18)。しかし彼は、自らの正当性を主張するために、隣人の定義を狭め、ユダヤ人へのみの限定し、異邦人を除外していたのです。29節の彼の主イエスに対する質問は、そうした背景があります。

30節以降で主イエスが語られたサマリア人のたとえば、律法を知っていても、律法の用い方を知らなかった彼に対する答えとして語られていきます。

〈生きた律法—実践される律法〉

当時の旅では、盗賊が頻繁に現れていました。ですから主イエスのたとえば、当時の人々の身近な問題を取り扱われました。

祭司とレビ人は、ユダヤ教の聖職者として、律法に精通し、率先して律法を実行すべき人たちです。しかし彼らは、誰も律法の咎を指摘しない旅の途上にあつたからか、もしくは助けを求めている者が助けるに値しない罪人だと判断したからか、助けの手を出すことはなかったのです。

一方サマリア人は、ユダヤ人からすれば、混血の外国人であり(17:18)、嫌われていました。しかし彼は、追いはぎに襲われたユダヤ人を宿屋に連れて行き、介抱し、さらに宿屋の主人に介抱を委ねるにあつても、その手当を渡して行ったのです。つまりこのサマリア人は、相手が誰であるかは関係なく、目の前において苦しみ傷ついている人を助け、隣人となっていたのです。

こうした行動は、このサマリア人が、神からの無限の愛と憐れみを受け、神の恵みの内にあることの反映であり、彼の行為に神の無限の愛が示されているのです。

〈信仰から発出する律法の実践〉

つまり、真の隣人愛(第二の重要な戒め)を示すことができるのは、神から与えられた律法により、自らの罪が示され、神の無限の愛により救いへと導かれていることを受け入れ、神との深い交わりが与えられている(第一の重要な戒め)からです。つまり第一の戒めがあつて、初めて第二の戒めが成立するのであり、神の御国の祝福を先取りするような愛の交わりを行うことができるのです。(辻幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問4

子どもカテキズム

問4 私たちの神さまが私たちに望んでおられることは何ですか。

答 神さまを愛することと、家族やお友だちを愛することです。

〈信仰とよきわざ〉

神はイエス・キリストの贖いによって、私たちを罪と死の支配からときはなつて下さいました。そのように一方的な恵みによって罪から救い出して下さった私たちに、神はまたよきわざの实りをも結ばせて下さいます。

それは「キリストがご自分の血をもって私たちに贖って下さったように、そのみ像に似せて、聖霊により私たちを生まれ変わらせて下さる」(ハイデルベルク信仰問答問86)からです。よきわざを救いの条件と考えるのは誤りです。しかし、すでに救われたゆえに、私たちはよきわざをなす者とされているのです。「真の信仰によってキリストにつながれた者にとって、感謝の實を結ばないことは不可能なこと」(ハイデルベルク信仰問答問64)なのです。

よきわざはキリストにある私たちの新しい命の中で、三つの役割を果たします。「私たちが全生涯かけて、主の恩恵に対して神に感謝を表し、また、神が私たちによって崇められるため」「私自身がその実によって自分の信仰を確信し」「私たちの敬虔な行為によって、隣人をキリストに導くため」(同)の役割です。

〈ふたつの戒め〉

聖霊によってキリストのみ像に生まれ変わらせていただいた私たちにとって、今や律法は神の恵みにこたえて生きる感謝の生活の規準、聖化の指標です。

律法の要約が十戒であり、十戒はさらにふたつの戒めに要約されます。ひとつは「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」(申命記6:5)であり、今ひとつは「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」(レビ記19:18)です。前者は十戒の前半(第一～四戒)の要約であり、後者は後半(第五戒以降)の要約です。

つまり律法の全体がこのふたつの戒めに要約されるのです。主イエスも「この二つにまさる掟はほかにない」(マルコ12:31)と仰せになっています。

私たちは神の恵みによって、このふたつの愛の戒めに生き抜くことができるのです。神がまず私たちを愛して下さいだったので、私たちも神を愛し、隣人を愛することができます。神は愛をもって私たちの内に始めて下さったよきみわざを、愛をもって完成へと至らせて下さるのです。

(木下裕也)

テキスト ルカによる福音書10章25～37節

(単元のねらい)

6月は、説教の主題聖句を冒頭に掲げた。説教者が説教の中心を心に留めるためである。ルカによる福音書は、神を愛することの模範として、10章後半のイエス様の話しにひたすらに聞き入るマリアの姿を描き出している。他方、隣人愛は、サマリアのたとえで示されている。このテキストから神と人への愛の両者を語ると中心がぼやけるので、説教は隣人愛に絞り込んだ。神と人を愛する愛は、イエス様に愛されていることへの感謝となって表れることを覚えない。

「わたしの隣人とは誰ですか」

ルカによる福音書10章36～37節

『さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いきに襲われた人の隣人になったと思うか。』律法の専門家は言った。『その人を助けた人です。』そこで、イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにしなさい。』

今日の聖書箇所を読み、説教するたびに、心が苦しくなります。神殿に仕える祭司は、強盗に襲われた旅人を助けずに、道の向こう側を過ぎていきました。神礼拝のお世話をするレビ人も、強盗に襲われた旅人を助けずに、道の向こう側を過ぎていきました。この物語の延長線上に、「今日の教会の牧師も長老も、強盗に襲われた旅人を助けずに、道の向こう側を過ぎていきました」という物語が記されているように思えてならないからです。そして、実際に、助けることができずに、結果的に横を通り過ぎることになってしまった人々の顔が浮かびます。神様の御前で、申し訳ない思いで一杯になります。そして、今度は、「絶対に通り過ぎないぞ」と思うのですが、そのときになると、忙しかったとか、こちらも歩くのがやっこのほど弱っていたとか、様々な理由で、また、通り過ぎてしまうのではないかという不安と恐れが、心に宿ります。

ルカ福音書が書かれたときに最初に読んだ人は、今日の聖書箇所に関して、どのような感想を抱いたのでしょうか。私たちにとっては、通り過ぎて

いった祭司・レビ人の存在が気になりますが、当時の人は、助けたサマリア人により多くの関心が惹きつけられたことだろうと思われまふ。当時の社会で、ユダヤ人とサマリア人とは、犬猿のなかでした。道で出会っても挨拶をしません。第一、ユダヤ人は、サマリア人と出会う恐れがあるところには、近づきません。ユダヤ人がサマリア人を見下げています。もし、目と目が合っただけでも、不機嫌な気分になったことでしょう。イエス様の物語は、そのサマリア人が、一級ユダヤ人である祭司やレビ人ができなかったことをしているというものです。律法学者は、最後のところでイエス様の質問に答えて、「その人を助けた人です」と返答しています。間違いではありません。しかし、「そのサマリア人です」とは答えていません。イエス様は、律法学者に「あなたも同じようにしなさい」と語り、物語を結んでいます。律法学者は、イエス様のお話を理解できたでしょうが、釈然としない思いに捕らわれたことでしょう。隣人を愛するとは、この律法学者が、隣人を愛したサマリア人をまず愛するところから始まります。

この聖書箇所のテーマは、「誰が誰の隣人になるか」です。律法の専門家は、自分が「神と隣人を愛せよ」という律法をよく守っていることに自信を持っています。「わたしの隣人とは誰ですか」という彼の問い掛けに対して、もし、イエス様が、「それは、同胞のユダヤ人です」と答えたとしたら、「それこそ、わたしの心掛けているところだ

あります」と胸を張って答え、自分の義を証明したかもしれません。しかし、イエス様は、「隣人だから愛する」という論理に潜む矛盾点を暴きました。「隣人を愛せよ」という戒めは、「隣人でないから愛さなかった」という逃げ道を、律法学者に残しています。強盗に襲われた人は、ユダヤ人であるのか、サマリア人であるのか、誰であるのか全く分かりません。彼を特徴づけるものは、強盗に襲われて助けを必要としているというだけです。強盗に襲われた人は、襲われた時点では、誰の隣人でもありません。

「隣人であるから愛する」世界は、律法の枠内であり、ユダヤ人の日常生活です。しかし、イエス様は、「隣人だから愛する」世界に留まっていた律法学者を、「隣人になって愛する」世界へと招いておられます。さらに、イエス様は、隣人を愛しているという誇りを打ち砕かれた律法学者に追い打ちをかけるように、サマリア人をその実践者として指し示しました。サマリア人が、ユダヤ人社会からいかに毛嫌いされていても、サマリア人のような愛を実践する人がいないと、強盗に襲われた旅人は死んでしまいます。旅人が強盗に襲われて傷つく社会は、隣人となって愛してくれる人を必要としています。隣人となって愛するサマリア人がいないと、強盗に襲われた旅人を抱える

社会の傷は、癒されることがありません。律法学者は、祭司とレビ人の限界に気づき、たとえサマリア人がどんな人であったとしても、ユダヤ人社会にもサマリア人の愛の実践が必要なことを、受け入れなければなりません。

律法学者は、イエス様の前にひれ伏して、隣人となって愛してこなかった自分の過去を悔い改めるように導かれています。ところで、律法学者に相應しい悔い改めのときが訪れたのでしょうか。あるいは、自分の義の岩に立てこもり、自分の義の世界を攻撃するイエス様への憎しみを募らせたのでしょうか。ルカによる福音書は、この結末を記していません。しかし、ルカに福音書全体のメッセージは、この良いサマリア人のたとえを語ったイエス様は、律法学者やファリサイ人によって殺されたことを伝えています。「隣人だから愛する」社会を、生れや人種や社会階層がどんなに違っても、「助けを必要とする人の隣人になって愛する」社会へと変革しようとして、イエス様は十字架で殺されました。ここに、このサマリア人の愛の物語の真実があります。イエス様は、よきサマリア人が旅人に示した愛以上の自己犠牲の愛をもって、隣人さえも愛することができない罪人の私たちの隣人になろうとして、この物語を語っておられます。(岩崎謙)

[今日の暗唱聖句] ルカによる福音書10章27節より
隣人を自分のように愛しなさい。

〈ねらい〉

わたしたちが人を思いやる心は、神を礼拝することによって神が与えてくださる。まず、神の愛を豊かに味わうことを伝えよう。

〈展開例〉

さて、困っている人を見かけたらどうしよう？
泣いている子がいたらどうするかな？ ころんだ人に「大丈夫ですか」と声をかけてあげる。おとなの人に知らせるとかはできるかもしれないね。でも、こういうことをするにはむずかしいね。愛と勇気がある（必要だ）ね。ちいさい子には無理かな？

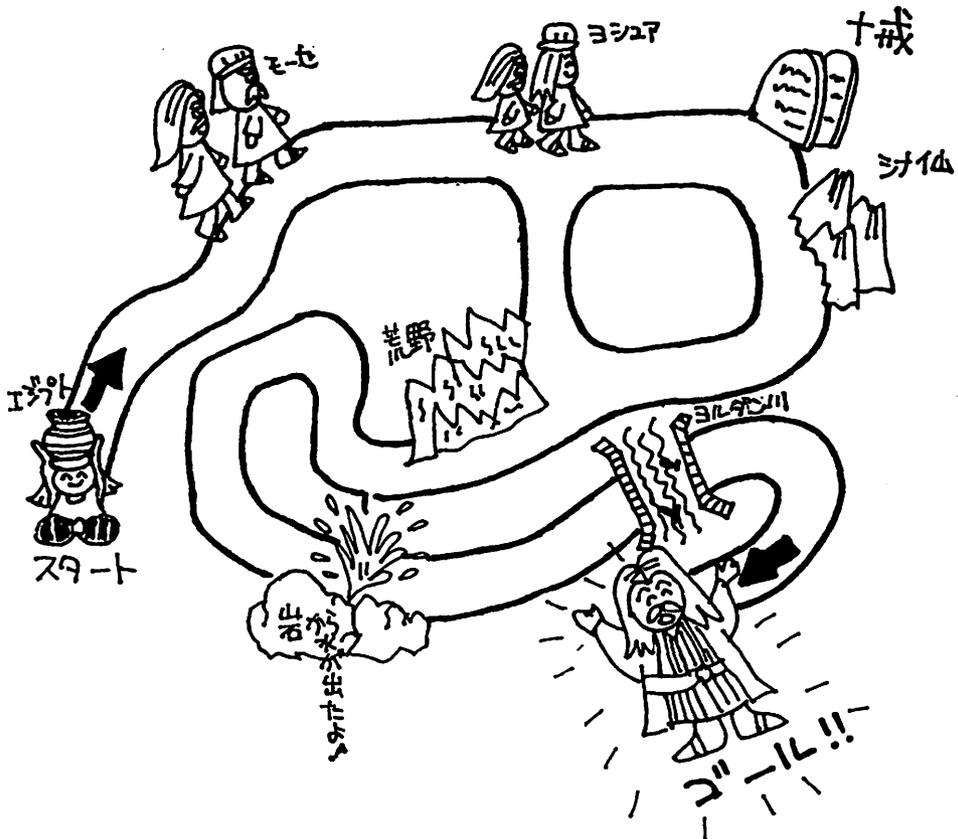
大切なのはその人のことを心配する心ですね。みんなは小さいな子ですからできることは少ししかないかもしれませんね。でもその困った人、病気の人のことを考えたり、心配してあげることができます。そして、その人のために神様にお祈りしてあげることができますね。その心を神様は喜んでくださるのですよ。

その人のことに関心をもつ心はどこから来るのかな。そう、神様をいつも礼拝しているとき、神様がわたしたちを愛してくださっていることがわかりますね。すると、神様がわたしたちに人を愛する心をくださるのですよ。

〈やってみよう〉

めいろ

○シナイ山も通ってゴールしてね。



〈ねらい〉

神様に愛されているという事実が根拠となってわたしたちはすべての人たちへの愛に促されるということを願わせる。

〈分級教師へのアドバイス〉

子どもカテキズムの言う「家族やお友だち」が、愛する対象を限定するのではなく、子どもの住む世界（家庭と学校）におけるすべての人を対象としていることに注意しましょう。

子どもたちの人間関係は、おとなが思う以上にあとけなく、それだけ冷淡です。子ども同士の好き嫌いは、はっきりした理由がなかったり、周りに流されただけであったりするだけに、かえって譲れないものになることがあります。展開例の結論に拒否反応を示す子どももいるかもしれません。あまり追いつめてしまわない方が良いでしょう。

〈展開例〉

①強盗に襲われた人の脇を三人の人が通っていったね。誰でした？

(回答例)

・祭司、レビ人、サマリア人

②強盗に襲われた人の隣人になって助けてあげたのは誰でした？

・サマリア人

③でもね、サマリア人とユダヤの人たちは本当に仲が悪くて悪くて、町であっても挨拶もしない、それどころか、お互いの町には近寄ろうともしないくらい仲が悪かったんですよ。

④みんなは、けんかしていて、だいきらいで、

いつも挨拶しない、シカトしている人が困っているのを見たら助けてあげる？

- ・あげる
- ・あげない

⑤でもね、実は元々はみんなが、神様とけんかして、神様のことだいきらいって言って、神様に挨拶しないで、神様のことをシカトしていたんだよ。

だって、神様が、「愛しあいなさい」って言っているのに、友だちとけんかしたりしてるでしょ。それは、神様ともけんかしていることなんだよ。

⑥そのわたしたちのために、イエス様は十字架についてくださったんですよ。だから今度はわたしたちが、仲が悪くてけんかしていて、無視している人にも親切に、大切に、愛してあげる順番なんですね。

⑦じゃあ、みんなも、今度はけんかしている人と仲直りして、無視してた人にも挨拶して、嫌いな人が困っていたら助けてあげられるようにお祈りしましょう。

〈折り〉

天のお父様。わたしたちが神様に愛していただいて、大切にしてください、愛していただいてますことを感謝します。神様がわたしたちを愛してくださったように、わたしたちも神様を愛し、仲の良い人もそうでなかった人も全ての人を愛することができるようにしてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①神様を知ることは、神様の愛と恵みを知ることであることを覚え、②神様の愛を理解し、感じるときに、神様への愛と隣人への愛に導かれることを理解する。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「今まで、いちばん神様の愛を感じたときは、どんな時でしたか。」

2. イエス様のたとえ話に登場する、祭司、レビ人、サマリア人のそれぞれの行動や態度から、愛について話し合ってみよう。

3. サマリア人の行動や態度の中に示されている神様の愛について、みんなで話し合ってみよう。

4. 人間関係で傷ついたり、自分の罪に悩んだりする私たちのところに、イエス様の方から愛を持って近づいてきてくださり、介抱し、いやしてくださることを覚えましょう。

5. イエス様からいただく愛によって、私たちも家族や友だち、周りの人たちを愛することが出来るようにお祈りしましょう。

〈祈り〉

イエス様、良きサマリア人の例えによって、神様がどんなに私たちを愛してくださっているかを教えてくださいありがとうございます。イエス様からいただく愛によって、私たちも家族や友だち、周りの人たちを愛することが出来るように、あなたの愛を心に満たしてください。

〈聖書をさらに深く〉

1. 神を愛しなさい、隣人を愛しなさいという言葉は、実際に旧約聖書のどこに書かれているか、確認してみましょう。神への愛は、申命記6章5節、隣人への愛は、19章18節です。ふだんあまり開くことのないような箇所（特にレビ記など）にも有名な御言葉があることを知って、聖書を読んでいく励みにしましょう。
2. ユダヤ人の中でも宗教的な指導者である祭司やレビ人が素通りして、ユダヤ人と仲のよくなかったはずのサマリア人が助けたことを確認しましょう。そして、このサマリア人がしてあげたことの一つ一つ（33～35節）を考えながら、話し合ってみましょう。これほどの愛を人に（それも友達でもなかった人に）与えることが私たちにできるでしょうか。

〈教理を響かせるために〉

1. 問4は、問40の十戒についての教えと結びついていることを確認しましょう。そして、よきサマリア人のたとえで教えられたとおり、隣人を愛するとは、自分で自分の隣人を決めて、その人たちだけを愛するというものではありません。カテキズムにある友だちを愛するということも、すべての人と友達になるという意味であることを覚えましょう。
2. そして、このような愛の実践は、ただイエスさまを通して与えられる神様からの愛によって行えることを確認しましょう。よきサマリア人とはイエスさまの姿でもあります。イエスさまが、私たちを愛し、介抱してくださるのです。このイエスさまの愛を知ってこそ、私たちも神を愛し、隣人を愛せるようになります。失敗談も含めて、自分たちの隣人愛の経験を話し合ってみましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

7日（月曜日）

使徒言行録4章1～22節

Q. 私たちが救われるべき名は？

8日（火曜日）

使徒言行録4章23～37節

Q. パルナバは何を売って、代金を使徒のもとに持ってきた？

9日（水曜日）

使徒言行録5章1～16節

Q. 土地の代金をごまかした夫婦の名前は？

10日（木曜日）

使徒言行録5章17～42節

Q. 人間に従うよりも、何に従わなくてはならない？

11日（金曜日）

使徒言行録6章1～15節

Q. 使徒たちは選ばれたステファノら七人に何をしました？

12日（土曜日）

使徒言行録7章1～16節

Q. エジプトに売られたのは誰？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ベトロの手紙二 1章16～21節

〈偽預言者と使徒ペトロ〉

当時、イエス・キリストを主とすることを否定し、キリストの十字架の贖いを拒否する偽預言者と称される人たちが出現していました(2:1)。使徒ペトロは、そうした状況の中、キリストの威光(マタイ17:1-13など)と、キリストの十字架・死・復活・昇天に至る御業の目撃者として証言しています。これは福音の真理が、キリストの歴史的な御業そのものに基づくものであり、また旧約聖書における預言の成就としてなされたものであることを語っています。つまりペトロは、自らの証言と聖書の証言が一致し、さらにそれらがキリストの御業において成し遂げられたのであることを語っています。

〈キリストの威光の目撃者〉

16節においてペトロは、「わたしたち」と語ります。キリストの威光ではペトロは、ヤコブ、ヨハネと共に目撃をした(マタイ17:1)ことを読者に確認させ、ペトロの証言が作り話ではなく、神の御業としてなされたことの正当性を主張しています(申命19:15、マタイ18:16、テモテ一5:19)。

キリストの威光の御姿は、神の御声により、神の誉れと栄光そのものであることが宣告されます(17、参照マタイ17:5など)。これは、キリストが神の御子、主そのお方であることの神の宣言であり、偽預言者たちの語ることが、何の根拠もない偽りであることを裏づけています。ペトロたちは、このキリストに対する神の宣言の目撃者とし

て、今証ししているのです。

〈成就する神の御言葉〉

続いてペトロは、神の御子、救い主イエス・キリストがこの世に来られたことにより、旧約聖書の預言が確かに成就したのであり(19)、私たちが信じるに値する、否信しなければならぬ御言葉であることを訴えます。イエス・キリストの救いの御業は成し遂げられました。しかし神の国が到来する救いの御業の完成(「夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇る時」(19))は、未だ到来していません。この夜は今なお罪が支配する「暗い所」(19)であります。神の御言葉である聖書はともし火として、私たちを照らし、迷うことなく、救いへと導いてくださいます。

ペトロは、キリストの威光の目撃者として、キリストの力と来臨(使徒1:11など)もまた神の栄光が現れるためになされることを、確証しているのです(16)。

〈聖書に立つ信仰〉

だからこそ、私たちは「聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきでは」ありません(20)。救いの確かさは、人間の側で、創作したり手繰り寄せたりするものではなく、神の証言によってなされるからです。そして私たちが聖書を解釈する時、聖霊の導きをお与えくださいます。これは自分で聖書を読むのではなく、神に祈りつつ神に全てを委ねて聖書を読むことにより、神の救いの御業は成し遂げられていきます。(辻幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問5

子どもカテキズム

問5 私たちがそれらを知るために神さまが与えてくださったものは何ですか。

答 聖書、神の御言葉です。

1. 神の栄光をあらわし神を喜ぶ「規準」

私たちが正しく生きていくためには、規準が必要です。どんなに優れたプレーも、ルールを無視すれば反則です。曲がった物差しではまっすぐな線は書けないし、違った尺度では計ることが出来ません。正しいこととは何か、神に喜ばれることとはどういうことかは、神がお決めになることです。人間の物差しや尺度で計ったものが、神の物差しと尺度に合うとは限りません。「神の栄光を現わし神を喜ぶ」とはどういうことかは、神の規準に照らして評価されなければなりません。神の示す基準こそが、私たちの本来あるべき規準です。

そして神は、私たちがまことの神を知り、神の御心を知って、神に従う者となるために、ご自身の方から自己紹介をされました。それが「啓示」です。啓示とは、人間が勝手に造りだし、想像した偶像ではなく、まことの神とその御心を、神の方から人間に示されたものでした。それによって私たちは、神とその御心を正しく知り、従うことが出来るのです。それは「神の方から」示されたものでした。

2. 聖書にある神の言葉—靈感

神の啓示は、昔様々な方法でなされましたが（ヘブライ1:1）、今は停止され、文書に記録されました。それが聖書です（ウェストミンスター告白1章1節）。神は、ご自身の啓示を文書化するために、「靈感」という啓示の方法を取られまし

た。「聖書は全て神の霊の導きの下に書かれ」（テモテニ3:16）、「決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったもの」（ペトロニ1:21）です。だから聖書は、神の言葉そのものです。人間を有機的に用いて、その人の個性や性格、教養や文化、能力や賜物の一切を活用しながら、神の言葉を書かせたものであり、究極の著者は「聖書の中に語っておられる聖霊」ご自身です（ウ告白1章10節）。

3. 「ただ一つの基準」

聖書の目的は「イエスが神の子メシアであると信じるためであり、また信じてイエスの名により命を受ける」ことです（ヨハネ20:31）。「神ご自身の栄光、人間の救いと信仰と生活のために必要な全ての事柄に関する神のご計画全体は、聖書の中に明白に示されており（聖書の十分性、ウ告白1章6節）、また「救いのために知り信じ守る必要のある事柄は、聖書のどこかの箇所です非常に明らかに提出され、開陳されているので、それらについての十分な理解に達することが出来」ます（聖書の明瞭性、ウ告白1章7節）。このように聖書は、信仰と生活について十分にまた明瞭に教えている「信仰と服従のただ一つの基準」（大教理問3）であり、それによって「どうすれば神の栄光をあらわし、神を喜ぶことができるか」を知ることが出来るのです。（三川栄二）

テキスト ベトロの手紙二 1章16～21節

〔単元のねらい〕

6月は、説教の主題聖句を冒頭に掲げた。説教者が説教の中心を心に留めるためである。単元のねらいは、聖書を通して神を知ることができる恵みにある。但し、説教テキストは、聖書の一般論を論じるのではなく、再臨預言の御言葉をどのように解釈するかという個別な問題を扱っている。説教では、聖書テキストに従い、再臨信仰を扱っている。そのことを通して、聖書には、神的な権威があり、人間の勝手な思いつきとは違うことを学んでもらいたい。

「作り話でない神の御言葉」

ベトロの手紙二 1章16節

「わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。」

昔は、遊ぶといえば、外に出て鬼ごっこか相撲とか、草野球とかでした。最近は、遊ぶといえば、テレビゲームとなっています。男の子には、格闘技系のゲームが人気です。主人公が敵を倒して、レベルアップしていきます。時には、敵に殺されることもあります。魔法の言葉で、レザレクション（復活）させることもできます。ゲームの他にも、「ハリー・ポッター」や「千と千尋の神隠し」などの楽しい映画があります。これらの映画は、現実とは違う作り話の世界を描いています。

イエス様の物語が聖書に記されています。ナザレで生れて、十字架で死なれました。イエス様が歴史上に現れたお方であることを、疑う人はいません。イエス様のことは、世界史の教科書にも載っています。イエス様は、生きておられた時、多くの奇跡をなさいました。しかし、奇跡物語を信じない人がいます。また、イエス様は、十字架で死んだ後、三日目に甦られ、五十日目に天に昇っていかれました。さらに、聖書は、この世の最後にイエス様は、もう一度この世にお出でくださるといふ再臨の約束を記しています。復活・昇天・再臨となると、イエス様に愛され、イエス様

を愛しているキリスト者だけしか信じることができません。

イエス様の物語は、人の手による作り話ではなく、イエス様はテレビゲームの主人公のような架空の人物ではありません。しかし、確かに、作り話に過ぎないと主張する人は、この世にいます。それは仕方のないことです。なぜなら、復活・昇天・再臨を信じる信仰は、神様からのプレゼントだからです。再臨信仰は、「信仰」というプレゼントをいただいた人だけが信じることができる恵みの賜物です。人間は、自分の頭で考えたり、知恵を絞っても、聖霊の内的啓明なしに、また、「信仰」というプレゼントなしには、イエス様の復活・昇天・再臨の意味を理解できませんし、信じることもできません。聖霊がイエス様の物語は真理であると教えてくださいます。

そして、わたしたちが、作り話ではないと言いきることができるのは、「これは作り話ではない」と聖書にはっきり記されているからです。ベトロは、明確に、「わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません」と言いきっています。キリストの力に満ちた来臨とは、イエス様が歴史の最後にお出でくださる再臨のことです。このベトロの手紙が書かれたとき、イエス様がこの地に来られたことは過去の事実となっていますが、イエス様の再臨は、まだ起こっていない未来に属しています。未来のことは分かりま

せんので、イエス様の再臨は作り話に過ぎないという非難を、キリスト教会は浴びていたのです。

それに対して、ペトロが語る言葉は、「わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです」という目撃者証言の言葉です。イエス様の再臨を目撃した人は、まだ、誰もいません。使徒ペトロであっても、再臨のキリストを目撃したはずはありません。それでも、ペトロが目撃したと語るのには、理由があります。ペトロが目撃したのは、イエス様の姿が光のように白く輝いた山上の変貌のキリストです。ペトロは、「あの時に見たイエス様の威光と荘嚴の栄光のなかから聞いた『これはわたしの愛する子、これに聞け』という御言葉は、再臨のキリストの威光と栄光を先取して表わしていた」、と言いたいのです。再臨のときに栄光のうちに輝いてお出でくださるキリストが、再臨をまえに、山の上で、再臨の栄光の姿を特別にペトロに垣間見せてくださいました。ですから、ペトロが語るイエス様の再臨は、決して、ペトロの作り話ではありません。それは、山上の変貌のキリストを見たという目撃証言に基づいています。

また、ペトロは、イエス様の再臨が旧約聖書によって預言されていることを解き明かします。その際、おそらく、敵対者は、旧約聖書の預言とは、預言者が、夢か何かを見て、自分で勝手に解釈し

ているだけであろうと、預言の言葉を軽んじていたはずで、それに対してのペトロの応答が、20～21節に記されています。旧約の預言者は、神様から聞いたこと、神様に見せていただいたことを、自分で勝手に解釈して、預言したわけではありません。預言者は、自分の意志に基づいて、自分の思いを語っているわけではありません。神様の霊に導かれて、神様が語る言葉を取り次いだのです。このことは、ペトロが見た山上の変貌のときもそうでした。ペトロは、イエス様の姿を見、神様の御声を聞かせていただいて、それを取り次いだまです。預言者は、神様から語るように託され、目撃場面の意味の説明を神様の口から直接聞いて、その言葉だけを語ったのです。

ですから、わたしたちも、自分勝手に、聖書を解釈することはできません。また、確かな目撃証言に基づく言葉を、人間の作り話と混同することはできません。預言者が神様から聞いた言葉を、神様の解釈にしたがって、理解しなければなりません。神様の言葉を、神様の解釈によって学ぶために、聖書が与えられています。神様は、わたしたちキリスト者に、神の言葉を神の解釈によって記した聖書と、そのことを信じていることができる信仰とをセットにして与えていてくださいます。

(岩崎謙)

[今日の暗唱聖句] ペトロの手紙二1章21節より

預言は、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。

〈ねらい〉

神様が望んでおられる生活を送るために、そのルールとして御言葉を与えてくださいました。それはわたしたちの真の幸せのためであることを伝える。

〈展開例〉

皆のうちにはルールがあるかな？ たとえば、朝は何時に起きることとか……。 (子どもたちに家のルールをあげてもらう)。朝晩歯を磨くこと、テレビは一日〇時間まで、家のお手伝いを一つすることなど。

こういうルールは何のためにあるかわかるかな？ ①家族が一つになって共同生活のため、②家族の健康のためなどだね。それと同じように、わたしたちが神様の家族（キリストの体）として生活するために、神様はルールを決めてくださいました。それは何でしょうか？ そう、聖書です。この神様のルールは、わたしたちが家のルールが時々いやだなあ、と思うのと同じように、いやだ窮屈だということもあるかもしれませんが、でも、この神様のルールは、わたしたちの心が元気で、本当にしあわせに生きるために必要なものなのです。

〈やってみよう〉

まちがいさがし（花の日）

①と②の絵は似てるけれど、すこしちがうよ。

ちがうところが四つあります。さがしてみましよう！

ちがうところに○をつけてね。



〈ねらい〉

聖書が特別な書物であり、私たちがその内容を大切にしなければならないことを伝える。

〈分級教師へのアドバイス〉

今回は特に、子どもたちが聖書を持っていることを前提に話しています。分級の時もそれぞれが聖書を持っている方が好ましいです。さらに、それが自分の聖書であれば、「聖書を大切にする」ということを目に見える形で実行できます。

ただし「聖書を大切にする」のと「聖書という本を大切にする」ことは同じではありませんので注意する必要があります。

〈展開例〉

①皆さんはペトロさんを知っていますか？

(回答例)

- ・知らない
- ・イエス様の弟子
- ・イエス様のそばにいた

②ペトロさんはイエス様の色んなことを全部見たんです。知っていますか？

- ・魚をとる
- ・病気を治す
- ・姿が変わる
- ・復活する
- ・天に昇る

(子どもが「うそー」と言ったら、こっちのもの)

③そんなことはみんなペトロさんや他の弟子たちが見て、聖書の中に書いてあるんですよ。
みんなは信じる？

④ペトロさんは本当に見たんだし、ペトロさん以外の人にもたくさんの人たちが見たんだし、そういうことがみんな聖書に書いてあって、みんなそれを信じてきたんだよ。

先生も、牧師先生も、※※くんのお母さんもみんな信じてるんだよ。

⑤みんな聖書を持ってる？

- ・はい
- ・いいえ

⑥聖書の中には大切なイエス様のことがみんな書いてあります。聖書のお話を聞くと私たちに一番大切なことが全部書いてあるんですよ。

だからみなさんこの聖書を大切に、一生懸命読んでくださいね。

〈祈り〉

天のお父様。神様が私たちにイエス様のことを教えてくださるために、聖書をくださったことを感謝します。私たちがこの聖書の中身を一生懸命読んで、よくわかるようにしてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①聖書を通して神様を知ることが出来ることを覚え、②聖書の権威と恵みを理解し、③聖書を通して今も神様が語っておられることを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）
「どのようにしたら神様を知ることが出来るでしょうか。」

2. 聖書は、神様からの「愛のこめられた手紙」です。大切な人からの手紙を読むと、その人の気持ちや考えが伝わってくるだけでなく、その人がどういう人かということもはっきり分かるようになります。同じように、聖書を通して、だれでも神様を知ることが出来ます。

3. 聖書ほどはっきりと神様の御心を表している本はありません。聖書だけが、神様からの御言葉です。ですから、聖書には権威がありますし、大切な神様からの恵みでもあります。

4. 神様は、どんなときにも聖書を通して、私たちの生活や人生のすべてのことについて語ってくださっています。

〈祈り〉

神様、聖書を通して、あなたを知ることが出来るようにして下さって、ありがとうございます。どうか、あなたの御言葉に親しみ、日々の生活をあなたの御心に従っていけるように導いてください。

〈聖書をさらに深く〉

1. 聖書は、聖霊に導かれて書かれたもので、その本当の著者は神様ご自身であるということを確認しましょう。そして、それは聖書66巻のすべての言葉に当てはまることです。自分の好きな言葉は神様の言葉として信じるけれど、厳しい言葉や難しい言葉は、どうでもいい言葉として読み流すということではなりません。毎日、どのように聖書を読んでいるか話し合ってみましょう。
2. ペトロが語っているキリストの威光を目撃した場面を確認しておきましょう（マタイ17章1～8節など）。聖書の正しい読み方は、このキリストについての理解が鍵となります。エホバの証人、モルモン教、統一協会などの人たちは、今でもキリストを自分勝手に解釈しています。聖書による正しいキリスト理解へと導かれましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 神の靈感について確認しましょう。聖書の靈感は、人間をロボットのようにして神の言葉を書かせたということではなく、人間がどこまでもその人らしい個性を持って書きながら、そこに間違いのない霊の働きを与えたということです。ペトロ2章3章14節以下などは人間らしい言葉でありながら、キリストにある救いの真実を伝えています。有機的靈感、十全靈感などの教理の言葉を学んでおくことも有益でしょう。
2. 私たちは毎日いろいろな言葉や考え方にふれ、影響を受けながら生きています。そのような中で、聖書こそが、私たちの人生の目的と、そのための生き方を豊かに教えてくれます。小さなことであっても、聖書の言葉に従ってよかったという経験を話し合いながら、御言葉への信頼の心を育みましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

14日（月曜日）

使徒言行録7章17～43節

- Q. モーセがイスラエルを助けようと思いついたのは何歳のとき？

15日（火曜日）

使徒言行録7章44節～8章1節

- Q. ステファノの殺害に賛成していたのは誰？

16日（水曜日）

使徒言行録8章1～25節

- Q. サマリアの町で魔術を使っていたのは誰？

17日（木曜日）

使徒言行録8章26～40節

- Q. エチオピアの高官は馬車の中で何を読んでいた？

18日（金曜日）

使徒言行録9章1～19節

- Q. サウロの上に手を置いて、元通り目が見えるようにしたのは誰？

19日（土曜日）

使徒言行録9章19～31節

- Q. サウロを使徒たちのところに案内したのは誰？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書24章13～27節

二人の弟子が暗い顔つきでエマオの村へと歩いています。彼らは、主イエスの十字架の出来事について話し合っています。するとそこに、復活した主イエスが現われ、彼らと共に歩き始められます。しかし、二人の目は「遮られ」(16) たままです。ここに物語の主題が提示されています。信仰の眼が遮られているのです。しかし、信仰の目が遮られているところに主イエスの方から近づいてくださり、働きかけてくださり、眼を開いてくださるのです。

主イエスの働きかけによって、主イエスであられることが分からないまま、彼らは「十字架と復活の証言」について知らせます。(19～24) 彼らが語る事実は、確かに事実ですが、信仰の眼が遮られている者にとって、その事実は何の救いにもなりません。それを突破するために、主イエスは、自ら、「モーセとすべての預言者からはじめ聖書全体にわたり御自分について書かれていることを説明され」(27) ます。ここでの聖書とは旧約聖書のことですが、この御言葉は、旧新約聖書の機能についての証言と言えます。聖書はキリストを証言する書なのです。そうであれば、キリストに出会うことなしには、聖書を読んだことにはならないのです。

ここで、主イエスは、歩きながら聖書を読んだのではありません。もとより手元に聖書はありません。しかし、聖書の御言葉を解き明かしておられるのです。つまり、説教しておられるのです。夕方になり、この二人はなお主イエス御自身が説教しておられることが分かりません。しかし、遂に「目が開かれ」(31) る時が来ます。夕食を共にした時です。古来、教会はこの物語を聖餐の礼

典と関係づけて理解してまいりました。説教と聖餐(礼拝式)において、臨在のイエス・キリストとの出会いが確保され、信仰が与えられ、更新されるのです。

日曜学校の働きこそ、今ここで聖書(御言葉)を通して語られる神の行為に仕える説教に掛かっているとと言えます。何故なら聖礼典の執行はありませんから。

主イエスが共にいてくださることに信仰の眼が開かれた弟子たちは、主イエスが見えなくなりました。もはや肉眼に頼る必要はないからです。復活の証人となったのです。

彼らは語り合いました。「聖書を説明して下さったとき」つまり、生ける神の言葉そのものであられる主イエスによる説教を聞いた時、「心は燃えていたではないか」(32) と。教師の職務の基礎とは、今、イエスさまに出会ったと言う感動、心燃える思いをもって、この事実を告げしらせることです。語っている今この場に、キリストが臨在しておられることを教師が確信するときに、聖霊は必ずや、子らの目を開いてくださることを信じることです。

その意味で、この物語は、私共に起こった救いの出来事を解き明かす物語であり、毎主日あずかっている恵みの現実(言うまでもなく、子どもの礼拝式を含む)を解き明かす物語に他ならないことに目が開かれます。

聖書によってキリストに出会った二人は愛に燃やされています。以前の暗い顔つきは消え去り、希望にときめく顔つきで復活の証人となりました。子らが明るい顔つきで主イエスと共に会堂から出かけていきますように。(相馬伸郎)

カテキズム 子どもカテキズム問6

子どもカテキズム

問6 聖書に書かれていることは何ですか。

答 真の神さまが、私たちのためにしてくださったことと、私たちに求めておられることです。

1. 神が私たちのためにしてくださったことの知識

聖書が教える第一のことは、まことの神とはどのような方であるかということです。ここではそれを「神さまが私たちのためにしてくださったこと」と表現します。ここで人が知るべき第一のことは、「神について何を信じなければならないか」ということですが、それは「神について」、何か抽象的な知識を持つということではなくて、その神が自分にどのようなことをしてくださったかを知ることによって、神ご自身に抱く、愛と感謝と賛美の思いです。神がご自分の一人子を犠牲にして、罪深いわたしを救ってくださった、主イエスは父の御心に従って、自分を捨てて十字架にかけ、命を賭けてわたしを滅びから助け出してくださったという知識です。それは他人事のように持つ、第三者的、傍観者的な知識ではなくて、この自分自身に関わる、それも生きるか死ぬかについての理解なのです。このように聖書は、「あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また信じてイエスの名により命を受けるため」の書物です。そこで私たちが第一に知るべきことは、神についての抽象的で干からびた死んだ知識ではなくて、「神が私たちのためにしてくださった」、命がけの愛と救いについての知識であり、それによる神への感謝と賛美の信仰なのです。

2. 神が私たちに求めておられることの知識

そこから聖書が教える第二のことは、「神が私たちに求めておられること」についてです。それ

は「神の示された（啓示された）み心に服従すること」（小教理39、大教理91）で、内容的には「十戒」「聖礼典」「主の祈り」によって教えられます。これらのことを知り、身につけていくことで、私たちは「神の栄光をあらわし神を永遠の喜ぶ」という、自分本来の使命を果たしていくことが出来るわけです。

ここでまず神を知ることが最初で、次に神の求められることとなる順序が大切です。つまり神への服従は、この神を正しく知ることから、必然的に生じてくるものなのです。「み心に服従」するとは、いやいやながら、本当はしたくないのに強制される事柄なのではなく、信仰者（神を知り、信じた者）の側からまったく自発的に、自由な主体的応答として生まれ出てくるものなのです。なぜか。それは神がそのような方だからです。十戒はその初めに、まず神がイスラエルを救われた、愛と憐れみの神であることを明らかにします。イスラエルはその神によって救いだされたのでした。だからその神に従うのです。神への服従の前提には、その神がどのような方かという知識があります。聖書が啓示する神は、どこまでも愛と憐れみと慈しみの神です。そのご計画の一切は、あくまでも私たちの幸いと救いを目指してのものです。この神を知るにおよんで私たちから溢れてくるのは、この神の恵みに対する感謝と賛美です。ここでいう「義務」とは、そのような恵みの神に対する私たちの感謝の応答以外のなにものでもありません。それは信仰者の、主体的服従であり、信仰的応答に他なりません。それは喜びと感謝の服従なのです。（三川栄二）

テキスト ルカによる福音書24章13～35節

〔単元のねらい〕

6月は、説教の主題聖句を冒頭に掲げた。説教者が説教の中心を心に留めるためである。単元のねらいは、旧新約聖書が神様の壮大な愛の物語であることを伝えることにある。さて、説教聖書箇所は、復活との出会いを扱っている。復活の知らせは、目撃者の証言に基づくことを確認したい。さらに、復活の主が聖書を通して語っておられることに着目したい。神は、説教と聖餐式からなる礼拝の場で用いられる聖書を用いて、今日も、愛をもって語りかけておられる。

「イエスさまとの出会いの証」

ルカによる福音書24章25-26節

『メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。』そして、モーゼとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。』

ルカによる福音書は、クレオバという弟子ともう一人の弟子とのイエス様との出会いを描いています。ルカは、この物語を直接にクレオバから聞いたのでしょうか。あるいは、文章になったものを読んだのでしょうか。それはともかくとして、クレオバは、生きていたに、数限りなく、復活のイエス様と出会った証を語り続けたと思われる。クレオバの証を、ルカによる福音書から思い起こしてみましょう。

私たちは、イエス様のことを行ないにも言葉にも力ある預言者と信じていました。私たちは、この方こそ、イスラエルを救ってくださると望みをかけていましたが、こともあろうに、私たちの指導者は、イエス様を十字架で殺してしまいました。三日目に私たちの女性の弟子が墓に行くとき、遺体が見あたらず、天使たちが表れ、「イエスは生きておられる」と告げたというのです。私たちは、婦人たちが嘘をついているとは思いませんでした。しかし、イエス様は甦ったと聞いても、素直に喜べなかったのです。それで、エルサレムを離れて、エマオに行くことにしました。すると、一人の旅

人が近づいてきたのです。驚いたことに、その人は、エルサレムにいながら、イエス様のことを知らなかったのです。それで、信じていたけれども十字架で死んで失望したこと、また、復活の知らせを受けたものの戸惑っていることを、説明しました。その旅人は、私たちの話を聞いていました。

すると、その旅人は、急に、聖書の話を始めました。「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」と言うのです。私たちは、正直なところ、メシアであるイエス様が十字架で死んだことばかりを思い、復活の知らせを聞いても、理解できないおまけのエピソード程度しか思っていなかったのです。しかし、確かに、旧約聖書は、エジプトの奴隷からの解放、バビロン捕囚からの解放と、苦難とそれに続く解放の希望を語っています。その人の聖書の解き明しを聞いて、聖書が預言しているメシアとは、十字架という苦難を経験しても、それで終わるのではなく、それを乗り越えて栄光にあずかるお方であることが分かりました。その旅人の話を聞き、苦難を経て栄光に入る救い主を思うと、心が燃え、熱くなってきました。

どれくらいの時間を一緒に歩いたことでしょうか。もう、日も暮れてきました。宿をとりましょう。すると、その旅人は、先に進む様子です。ここで別れたら、もう聖書のお話が聞けなくなると思いました。ちょっと強引だったのですが、「一緒に泊まってください」と必死で引き留めました。

無理を聞いてもらい、その旅人は、私たちと同じ宿に泊まることになりました。そして、夕食の時間になりました。その旅人は、過ぎ越しの食事のときのように、パンをとり、賛美を歌い、祈り、パンを裂きました。そのとき、何が起こったと思いますか。

私たちの心の目が開かれたのです。なんと、目の前にいるは、イエス様ではないですか。私たちが道であったときは、エルサレムで起こったことも知らない旅人と思っていたのです。イエス様の顔が変わっていた訳ではありません。復活のイエス様のお顔は、昔のイエス様のお顔です。何故か、最初は、分からなかったのです。心の目が閉じていたとしか、表現のしようがありません。しかし、私たちが、気付かないときから、復活のイエス様は、失望して歩いている私たちの同伴者となって、歩いてくださったのです。婦人たちの話を聞いても信じられずにエルサレムから離れた私たちの不信仰をも受け止めてくださいました。そして、聖書のお話をしてくださいました。そのとき、心が燃えたのは、復活のイエス様をご自分のことを聖書から解き明かされたのですから当然です。しかし、本当にイエス様だと気付いたのは、お話を聞いただけでなく、夕食をともにしたときでした。

私たちの心の目が開かれると、肉の目で見えて

いた旅人のイエス様の姿は、見えなくなりました。たとえ、イエス様は見えなくても、寂しいことは何もありません。復活されたイエス様は、今も、聖書の解き明かしと、パンを裂く聖餐式を通して、ご自分が復活して、私たちとともに歩いてくださることをお示しくださっておられるからです。

旧約聖書は、救い主の預言を記し、新約聖書は、その預言の成就をイエス様と実際に出会った人の証言によって記しています。また、聖書には、イエス様が、ご自分について聖書から解き明かしてくださったイエス様の説教が記されています。イエス様を知るには、これほど確かな証言はありません。また、クレオバは、イエス様と出会った昔話をしたのではなく、ルカもクレオバの思い出を記したわけではありません。彼らは、復活されたイエス様が、聖書と聖餐式を通して、今日の私たちに語りかけてくださると信じて証し、記したのです。私たちの心の目が開かれるまで、クレオバがイエス様を旅人と思ったように、私たちも普通の誰かが聖書のお話をしていると思ってしまいます。しかし、聖書が解き明かされるとき、実は、説教者を通して、復活のイエス様が私たちに語りかけておられるのです。心の目を開いて、御言葉を聞きましょう。
(岩崎謙)

[今日の暗唱聖句] ルカによる福音書24章23節より
主は生きておられる。

〈ねらい〉

今は、わたしたちは新約聖書時代の弟子たちと同じようにイエス様にお会いすることはできません。けれども、わたしたちは御言葉と祈りによってイエス様にお会いすることができることを伝えよう。

〈展開例〉

今日は父の日だね。みんなのお父さんはあなたのことが大好きでかわいくて、すごく大切な子と思っている。いつも声をかけてくれるね。遊んでもくれるね。だから、この人はぼくの（わたしの）パパだって、もちろんすぐわかるね、お父さんはあなたが大きくなり、小学校・中学校、おとなになるまでのことを考えて、教え育ててくれる

んだよ。

それならば、神様の場合はどうだろうか、天の父である神様は一人ひとりが生まれたときから（本当は生まれる前から）、知っていてくださるのだよ。すごく大切に思って、今も、小学生になっても、おとなになっても、おじいさんおばあさんになるまでずっと育て導いてくださるのですよ。どうやって育ててくださるか、導いてくださるか分かるかな？ そう、わたしたちが礼拝するとき、聖書によって教えてくださるのですよ。

わたしはあなたの神ですよ。わたしを信じなさい、わたしに従いなさいと、くりかえしくりかえし教えてくださるのですよ。そう、聖書は神様の心と計画がわかる大切なおしらせです。愛の手紙です。

〈やってみよう〉

お父さんにプレゼントをつくろう！（父の日）

○用意するもの

- ・紙皿 一枚
- ・リボン
- ・絵の具（うすめすぎないように）
- ・色紙、シールなど

○つくりかた

- ・「お父さんありがとう」とかく
- ・紙皿の周りを、色紙を切ったもの、シールなどを貼って飾る
- ・リボンを付ける
- ・濃いめに溶いた絵の具を手にもって、手形を押す



〈ねらい〉

礼拝式が、ただお話を聞く時ではなく、復活のキリストと出会う時であることを学ぶ。

〈分級教師へのアドバイス〉

今回の展開例は、聖書の色々な話を挙げるようになっています。少し難しいかもしれませんが、旧約聖書のお話しにも触れることができれば、よりよいでしょう。

子どもたちに質問させて先生が答える時には、教理的に完全な答えをするのに考え込んでしまうよりも、多少言い間違えてもスラスラと答えて見せたほうが印象づけることができます。

〈展開例〉

①クレオバさんは復活したイエス様から、聖書の中にイエス様のことが色々書いてあることを説明してもらいましたね。

じゃあみんなは、聖書の中でイエス様のことで、どんなお話を知っていますか？

(回答例)

・五千人給食、善きサマリア人、ザアカイ、マルタとマリア、等々

②イエス様はいつでも色々な人たちを助けて、救っ

てあげていましたね。

実は、この厚い聖書の中に出てくるお話はみんな、イエス様が私たちを大切に愛してくださっていることを教えているんです。

③聖書の中に書いてあるイエス様の一番大きな愛はイエス様が私たちのために十字架についてくださったことなんです。

しかもその十字架は、私たちみんなのためなんですよ。

④クレオバさんはイエス様から聖書のお話を聞いて、イエス様がみんなのために十字架について復活してくださったことがわかりましたね。みんなはどうか？

〈祈り〉

天のお父様。イエス様を私たちに遣わしてくださって感謝します。私たちのためにイエス様が十字架にかかり、死からよみがえり、今も天の上から私たちを守ってくださっていることを感謝します。どうか私たちがイエス様のことをよく知ることができるようにしてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①聖書が、神様の壮大な物語を告げ知らせていることを覚え、②神様からの愛と福音を聴き取るように導く。

〈展開例〉

1. アイスブレーク（うち解けるための質問）
「一番好きな聖書の御言葉は、何ですか。」
「それを選んだのは、どうしてですか。」
2. 聖書は、天地創造から新天新地までの、壮大な神様による救いの物語を教えています。その中心は、イエス様の十字架と復活による罪の赦しの契約（約束）です。
3. 聖書を通して、神様は、どの人もこの救いの

約束を知り、受け入れるようにと招いておられます。

4. 聖書は、神様からの愛と福音をひとりひとりに伝える「愛の手紙」です。大切に、心をひらいて、聖書を読みましょう。

〈祈り〉

イエス様、聖書を通して、天地創造から新天新地までの、壮大な神様による救いの物語を教えてください。ありがとうございます。イエス様の十字架と復活によって救いの約束を与えてくださってありがとうございます。これからも、聖書を大切に、心をひらいて読むことができるように助けてください。

〈聖書をさらに深く〉

1. 二人の弟子とイエスさまがエマオへの道のり(60スタディオンは11キロぐらい。地図で確認しましょう)を共に歩く様子を思い描きながら考えてみましょう。最初はイエスさまと気付かない弟子たちが一方的に話していますが、25節からはイエスさまが聖書全体にわたって語り始めます。イエスさまの言葉に聞き入るようになっていく二人の変化に注目してみましょう。
2. その後、二人の目は開け、イエスさまだと気付きました。私たちにも、それまで分からなかった聖書の言葉や説教のお話が、あるときから分かるようになったという経験があるでしょうか。話し合ってみましょう。また、この場面の食事と聖餐式との関係にふれながら、受洗・信仰告白、陪餐へと招き、励ましましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 問6は、聖書全体の要約であり、同時にカテキズム全体の要約です。前半部分と後半部分をバランスよく知る事の大切さを確認しましょう。傍観者のように、神がしてくださったことばかりに関心を持って、逆に義務感にかられて自分がすべきことばかりに関心を持っていてもいけません。自分はこちらの方に関心があるかを考えながら、話し合ってみましょう。
2. 両者を「契約」という言葉によって理解することも大切でしょう。聖書は神と人との契約の物語です。そして、そのとき、神が契約において私たちにしてくださったことがまず先にあり、その契約への感謝の応答として私たちのすべきことがあるという順序の大切さも確認しましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

21日(月曜日)

使徒言行録9章32～43節

Q. ペトロが生き返らせた婦人の名前は？

22日(火曜日)

使徒言行録10章1～33節

Q. コルネリウスに天使が現れたのは何時の祈りのときだった？

23日(水曜日)

使徒言行録10章34～48節

Q. 聖霊の賜物が誰の上に注がれるのを見てみんなは驚いた？

24日(木曜日)

使徒言行録11章1～18節

Q. 聖霊が降ったときにペトロが思い出した主の言葉とは？

25日(金曜日)

使徒言行録11章19～30節

Q. アンテオキアで弟子たちは何と呼ばれるようになった？

26日(土曜日)

使徒言行録12章1～25節

Q. ペトロが助け出されたとき、マリアの家の人々は何をしていた？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネによる福音書4章23～24節

「神は霊である」(24)。これは、既に4月18日、25日の二回に渡って取り扱った主イエスとサマリアの女性との対話の一部です。(これらの聖書研究をご参照ください。)これが、この単元《問7》のための引証聖句です。黙想は、この聖句に集中します。

この対話の主題は「真の礼拝」(23)にあります。主イエスは「神は霊である。ダカラ、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」とおおせになられました。そうであれば、霊なる神についての教理教育は、一およそすべての教理教育に当てはまりますが一礼拝体験に根ざして語る以外にその正しい道がないことが分かります。また、霊なる神について語ることは真の礼拝について語ることに結びつかざるをえないのです。

しかし、この主イエスの「ダカラ」という論理、つながりは分かりやすくはないのではないかと思います。神は私どもを人間として創造するために、神の命の息を吹き入れられました。こうして人間は生きるものとなりました。つまり、もともと人間は霊的な存在つまり、神の御前に立つ存在、神と向かい合う存在、神との交わりに生きる存在としてつくられました。ですから、神が霊である以上、私共は礼拝することができるし、しなければならぬのです。

サマリアの女性は、この霊的な渴きを満たそうとして、五人の男性と結婚を繰り返し、当然、それはかないませんから、満たされない思いの中で生きていました。この渴きを「偽りの霊」つまり偶像で満たそうとしていたのです。彼女の偶像は、男性であったのです。霊なる神に向かい合う存在としての人間の心の中には、大きな空洞がありま

す。それは、霊なる神によってのみ埋めることができ、満たしていただくことができるのです。

ですから、主イエスは、彼女に、この井戸水を飲むなら、渴くばかりであるが、御自身そのものであられる「生きた水」を飲めば、即ち信じるなら、満たされ、癒されるとおっしゃいました。のみならず、泉となって、永遠の命に至る水が湧き出ると約束されました。私共は今、この水の泉とされています。その泉として子らの前に立たされているのです。

今、子どもたちは、この真の飲み物、神の霊を必要としながら、飢え渴いています。その渴きを満たそうとして、偽りの霊の虜になって行きます。ですから教会は、霊なる神を紹介しなければなりません。もちろん、命そのもの、生命の水なるキリストを証し、信仰へと至らせるのは私どもの働きではなく、聖霊の御業です。礼拝式を成立させるのは、今ここにはたらく神の霊、聖霊の御業です。それが「霊」(24)による礼拝です。しかし、同時に聖霊は私どもの信仰の奉仕を通して働かれます。私共は、キリストが聖霊において臨在しておられる礼拝式において、「真理」によって、つまり「神の御言葉＝教理」によって、真の生命を汲み上げ、子どもたちに提供することが許され、命じられています。

本日の引証聖句から、問7全体を語ることは不可能です。皆様の困難を拝察いたします。カテキズムによる説教、教理を主題にした説教(分級)は、いきおい説明に流れやすいのですが、礼拝式の体験を深めることによって体得されることを信じ、一回で納得させようと力むことはないのです。

(相馬伸郎)

カテキズム 子どもカテキズム問7

子どもカテキズム

問7 私たちの神さまはどのようなお方ですか。

答 神さまは霊なるお方です。

ですから、私たちを包み込んでくださり、永遠で変わらないお方です。

1. 神さまは霊なる方

神が霊であられるとは、神が人格を持つお方ということです。それはただ単に存在する「物」ではありません。霊ということで、神は人格的存在であられることを明らかにします。しかもそれは物的存在ではありません。神は人間のような身体を持つ方ではありません。物質は有限です。空間的にも時間的にも制限を受けます。しかし神は霊として、無限なお方です。空間、時間の一切の制限を受けることはありません。

2. 神は「無限、永遠、不変の霊」

しかもここでは神が「唯一の霊」とは言われていません。霊的存在は他にもいるからです。しかしそれらは皆、神から造られ、神の霊にその起源を持ち、また神の霊に依存しています。神は「霊」として、すべての造られたものの起源であり、生命の源なのです。だから小教理問答では、その「霊」に「無限、永遠、不変」という条件がつけられ、被造物の霊との区別がなされます。「無限」とは、限界がないということです。それが空間的な意味での無制限とするなら、時間的な無制限とは、「永遠」です。

「永遠」とは、初めがなく、終わりがなくということ、過去、現在、未来といった時間を超越

しておられることです。単なる時間の延長、無限に引き延ばされた時間なのではなく、時間とはまったく質的に次元を異にします。時間そのものが神の被造物で、神は時間に制約されたり、時間に閉じ込められることはありません。神にとってはすべては等しく「現在」であって、「永遠の今」を生きておられます。被造物は時間の中で生きるのに対して、永遠とは神の存在形態です。永遠の生命とは、神ご自身のみが持つ生命であって、唯一の永遠存在であられる神との生ける交わりそのものことであり、私たちは、この神との永遠の交わりの中でのみ、永遠の存在でありうるのです。そして神との交わりに生きている今、既に永遠の生命に生きているのです。

このように神は、無限で永遠の方だから、不変の方でもありうるのです。被造物は変化し、流転し、発展し、成長します。しかし神は永遠の存在なので、神とその御心は、決して変わることがないのです。変更や変心がないから、私たちは心から神を信頼することが出来るのです。しかも神は、慈しみと慈愛に満ちた人格です。自己を偽ることなく、一貫して調和と統一を保っておられる方です。私たちは、この方の愛と恵みの中で抱きしめられ、包み込まれ、覆われながら、永遠に守られて生きていくことができるのです。（三川栄二）

テキスト ヨハネによる福音書4章1～42節

〔単元のねらい〕

6月は、説教の主題聖句を冒頭に掲げた。説教者が説教の中心を心に留めるためである。単元のねらいは、神様が霊であることを説き明し、三位一体の神について理解する備えをすることにある。さて、説教聖書箇所は、サマリアの女とイエス様との語らいと、それによってサマリアの女と彼女の町の人々がイエス様を信じるようになったことを扱っている。霊なる神は、イエス様と人との関わりの中かで、人を造りかえる働きにおいて理解されねばなりません。

「霊と真理による礼拝」

ルカによる福音書4章23～24節

「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」

イエス・キリストの父なる神様が、礼拝する者を探し求めておられます。もちろん、私たちが礼拝を行ないたいと願って神様を礼拝するのですが、私たち以上に、神様がご自身を礼拝する者を求めておられます。私たちが行なう礼拝は、礼拝者を探し求める神様の熱意によって、実現したものです。

神様の熱意による礼拝は、「霊と真理」による礼拝です。このことは、神様が霊なるお方であることと結びついています。神様は、目に見えるお方ではありません。神様は、どこか特定の場所におられるお方ではありません。サマリアの女の物語において、礼拝するのに相応しい場所は、エルサレムのシオンの山かサマリアのゲリジム山かという問いかけがなされています。それに対してイエス様は、どちらの山でもないと、イエス様の父なる神様への礼拝が行なわれると返答されました。神様は、霊であるお方ですから、場所と結びついてはおられず、私たちが心から礼拝するならば、私たちがどこにいても、どこからでも神様

を礼拝できます。

実は、どの山で礼拝するべきかという問いかけは、場所の問いかけであるよりも、誰によって礼拝されるべきかという問いと密接に関わっています。エルサレムのシオンの山であれば、ユダヤ人によって、ゲリジム山であれば、サマリア人によってとなります。神様をどこでも礼拝できるとは、ユダヤ人とサマリア人に限定されることなく、誰でも神様を礼拝することができるということになります。神様は、霊であるお方ですから、人種や血族と結びついておられず、私たちが心から礼拝するならば、私たちがどのような生れの者であっても、神様を礼拝することができます。

このヨハネ福音書の驚きは、ユダヤ人だけでなく、サマリア人が、神様を礼拝する民として招かれていることです。これは、私たちにとっての驚きでもあります。「霊である神を、霊と真理をもって礼拝する」という聖書のなかで一番大切な礼拝の教えが、サマリアの女に語られていることです。この教えは、3章に登場するニコデモに対してではなく、イエス様の十二弟子に対してでもなく、ユダヤ人から見れば、異邦人であるサマリア人に、サマリア人から見ても、5人も夫を取り替える特別な女性に語られています。

そして、このサマリアの女は、イエス様との出会いと語らいを通して、イエス様を信じる者に劇り変えられています。さらに、4章の後半では、サマリアの女が住む町の多くの人が、イエス様の

言葉を聞いて信じたことが記されています。「霊と真理による礼拝」の教えを聞いた女性も、その女性からイエス様のことを伝え聞いた者たちも、礼拝のあり方を学んだのではなく、まさに、その場で、イエス様を通して父なる神様を礼拝する者に変えられました。

ヨハネによる福音書によれば、「神は霊であるから、霊と真理をもって礼拝するように」という教えは、神は霊であられるから、人々を霊的な神礼拝者に創り変えることができるという教えです。私たちが、人間の知恵で無理をして霊的な礼拝を演習する必要はありません。どこでも、誰でも、どんな世俗的な人でも、神は霊であるお方ですから、霊なる神様がその人に働きかけてくださるなら、その人は、霊と真理をもって神様を礼拝する人に創り変えられます。「神は愛である」という言葉は、「神様が私たちを愛してくださる」という意味です。それと同じように、「神は霊である」とは、「神様が私たちを神様を礼拝するに相応しい霊的な者へと創り変えてくださる」という意味です。

霊である神様が、霊的に働きかけてくださいますので、霊と真理をもって行なう礼拝がこの地上に起こされます。それも、ユダヤ人もサマリア人も誰も想像ができない仕方、その神様の御業は、

サマリアの女に表わされ、サマリアの女が霊と真理をもってする礼拝者に変えられました。この神様の御業は、今日も続いて行なわれています。ですから、この日本の地で、神様を知らなかった私たちが、神様を礼拝する者に創り変えられました。また、私たちの想像を超えた仕方、キリスト者が起こされています。

イエス様は、「今がその時である。父なる神が礼拝者を求めておられる」と語られました。父なる神様は、礼拝者を求めて、御子イエス・キリストを遣わしてくださいました。イエス・キリストが地上に来られた今が、新しい礼拝者が起こされる今です。イエス様の御声を聞く「今・この場でこの礼拝の時」が、父なる神様を礼拝する今です。父なる神様が、イエス様を通して、まことの礼拝者を求めて、探しに来てくださいました。イエス様と出会った者が、父なる神様を礼拝する者に変えられます。ヨハネによる福音書1章14節の「恵みと真理とに満ちておられた」イエス様が、3章24節の「霊と真理をもって礼拝」を行なうことができるように、私たちを整えてくださいます。聖霊が、私たちに注がれ、私たちがイエス様を信じ、イエス様のうちに留まるとき、私たちは霊と真理をもって行なう礼拝者へ創り変えられていくのです。(岩崎謙)

【今日の暗唱聖句】 ヨハネによる福音書4章24節

神は、霊である。

だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。

〈ねらい〉

礼拝は、目に見えない神様がわたしたちに語りかけ、わたしたちに平安や喜びや希望を与えてくださる。そしてわたしたちが信仰の応答をするところです。神様はその礼拝へとわたしたちを招いてくださることを伝えよう。

〈展開例〉

ある日のこと、3才の女の子とお母さんが教会にやってきました。「すみません。教会を見せてください」「はい、どうぞらんください。二人は礼拝堂を少し見てから、玄関に戻って来ました。その女の子はお母さんに言いました。「ねえ、神様いなかったね」。そう、神様は見えないですね。目に見えないから神様はいらっしゃらないの

ではありませんね。神様は霊なる存在で、人間のように体はありませんから見えません。

けれども、その神様が聖書によって話しかけてくださるのです。「わたしはあなたたちの神様です、あなたたちに命を与え、この世で生活できるようにしているのです。キリストによる救いを与えているのです。自分の罪のために滅びないようにわたしを信じなさい」と。

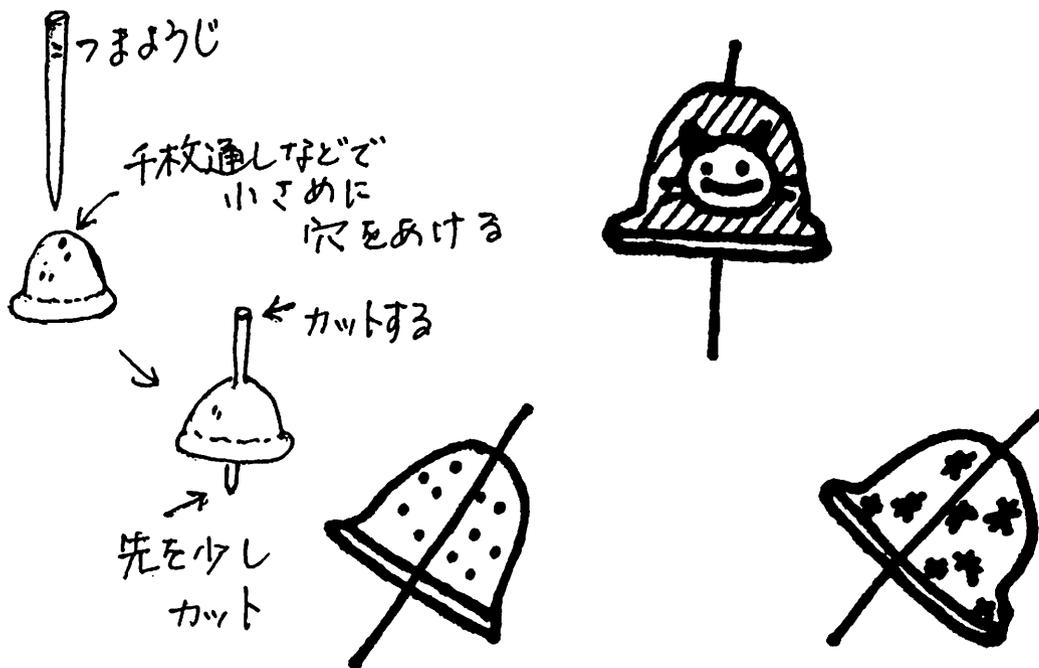
ですから、わたしたちはこの見えない神様を信じて礼拝できるのです。本当に不思議なことですが、神様の方から働きかけてくださるのです。

神様は、まだ神様を信じない人、教会に来ない人も愛しています。その人たちが教会に来て礼拝に来たら、いつか必ず信じられるようになるのですよ。

〈やってみよう〉

UFO ゴマを作ろう！

○プチゼリーなどの容器を使ってコマを作ってまわそう！



〈ねらい〉

子どもカテキズムから、神様が「霊である」ということの広がりをも具体的に考える。聖書箇所との関連で、本当の礼拝式がどんなものかを考えることができれば。

〈分級教師へのアドバイス〉

子どもたちは、「霊」について非科学的と否定しながら、オカルトや迷信を信じています。霊がただ人を驚かす存在ではなく、神様が霊であるからこそ、絶えず私たちを守ってくださる存在であることを強調しましょう。

〈展開例〉

①子どもカテキズムを読んでみましょう。

②「神様は霊なるお方です」ってどういうことかな？

(回答例)

・幽霊、おばけ

③それはどうかなあ。

みんなは体を持っているよね。だから、※※くんがこっちの部屋にいたら、向こうの部屋にはいない。※※君のお兄さんは向こうの部屋にいるからこっちの部屋にはいないよね。

でも、神様は霊なるお方だから、こっちの部屋でお祈りしているとこっちの部屋にいらっしゃるし、向こうの部屋にお祈りしていると向こうの部屋にいるの。

日本でお祈りしていても神様はいるし、アメ

リカでお祈りしていても神様はいる。アフリカでお祈りしていても神様はいるの。

そうでしょ？

④どっか決まった場所に行かなきゃ神様を礼拝できないって言ったら大変だよ。

⑤神様は、私たちの中にも神様の霊を与えてくださるから、私たちはどこでも神様に礼拝することができますんですよ。

⑥だからみんなが礼拝する時は、目に見えないけど神様が、私たちと一緒にこの教会にいてくださるんですよ。

⑦礼拝式の時だけじゃなくて、みんながお家にいる時も、学校にいる時も、一人にいる時も、遊んでいる時も、あんな時も、こんな時も、みんながおとなになっても、おじいさんおばあさんになっても、神様は霊だからいつでもどこでもずっと一緒にいてくださるんですよ。スゴイよね。

〈折り〉

天のお父様。あなたが霊なるお方であることを感謝します。あなたがいつでもどこでも私たちと一緒にいてくれて、私たちを守ってくれて、私たちの礼拝を受けてくださることを感謝します。私たちが霊をもって礼拝することができますようにしてください。イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①神様は、霊であり、人格的な神様であられることを覚え、②目には見えない生けるまことの神様を仰ぐ。

の心を通い合わせることが出来ます。神様を喜ぶとき、神様も喜んでくださいます。悲しいとき、神様はその悲しみを分かってください。

〈展開例〉

1. アイスブレーク（うち解けるための質問）

「今まで、神様がおられることを感じたことがありますか。それは、どんな時でしたか。」

4. 神様は、目には見えませんが、生きておられます。私たちに聖書を通して語りかけておられますし、生活のいろいろな出来事の中で、私たちを守り導いてくださっています。

2. 神様は、霊です。ですから、私たち人間のよ
うな体を持ちませんし、疲れたり、病気に
なったりなさいません。いつでも、どこに
でも、力強くおられる方です。

3. 神様は、体は持ちませんが、心をもってお
られるお方です。ですから、私たちの心と神様

〈祈り〉

神様、あなたは生きておられ、日々の生活の中
で、いつも一緒にいてくださいますから、ありが
とうございます。どうぞ、聖書の御言葉を読むこ
とによって、賛美したり、お祈りすることによっ
て、私の心があなたの心と強く深く通い合うこと
が出来るようにしてください。

〈聖書をさらに深く〉

- ユダヤ人とサマリア人の敵対的な関係は、礼拝する場所の違いとしても現れ、サマリア人はこの山（ゲリジム山）で、ユダヤ人はエルサレムで礼拝をしていました。私たちも場所や建物という見えるものにこだわりながら、礼拝をしていることはないでしょうか。または、この人とは礼拝をしたいけれど、あの人とは一緒に礼拝をしたくないということはないでしょうか。話し合ってみましょう。
- イエスさまが言われた霊と真理による礼拝について考えてみましょう。例えば、コリント二3章17節には「主の霊のおられるところに自由があります」とあります。この自由とは、ユダヤ人とサマリア人の間にあったような偏見やねたみの思いから解放された自由です。私たちは、どこでも、いつでも、自由な心で礼拝ができていますでしょうか。

〈教理を響かせるために〉

- 問7が教える神様について、まず、人間との違いという視点から考えてみましょう。人間は物質によって作られている目に見える存在ですが、神様はその物質や人間を創造された目に見えないお方です。また、物質としての人間は空間的にも時間的にも制限された存在ですが、神様はその空間も時間をも創造された方ですから、無限、永遠の存在です。
- 次に人間への関わりという視点から考えてみましょう。霊なる神様は、人間を、神様との霊的な交わりに生きる者として創造されました。また、その無限性、永遠性、不変性は、私たちがどこにいても、死んでも、変わることのない救いにあずかるということと結びついています。霊と言うと、一般的には少し怖いような印象がある中で、聖書の神様は愛に満ちた霊であることを確認しましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

28日（月曜日）

使徒言行録13章1～12節

Q. キプロス島にいた魔術師の名前は？

29日（火曜日）

使徒言行録13章13～25節

Q. 会堂でイスラエルの先祖の話をはじめたのは誰？

30日（水曜日）

使徒言行録13章26～41節

Q. 話の中で引用された詩編は何編？

1日（木曜日）

使徒言行録13章42節～14章7節

Q. パウロとバルナバの言葉を聞いて信仰に入ったのはどんな人？

2日（金曜日）

使徒言行録14章8～20節

Q. リストラの人々はパウロとバルナバのことを何と呼んだ？

3日（土曜日）

使徒言行録14章21～28節

Q. パウロとバルナバは教会ごとに何を任命した？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

成人科

〈成人科の新設に際して〉

いつも本誌をお用いくださいますことに、心から感謝を申し上げます。この第13号より、本誌の名称を『教会学校教案誌』と改めました。それは、「本誌の基本方針・教会（日曜）学校像について」に記されているとおり、教会全体の教育的営みに資するものでありたいと願うからです。そして、そのための一つとして、成人科を新設することにいたしました。

この成人科は、毎月一回程度の頻度で行われる各会・各部会（男性会・兄弟会、婦人会・姉妹会、青年会など）で用いられることを意図しています。教会規定によれば各会・各部会も教会学校の働きの一部であり、適切な教案が提供されることが必要です。個々の教会において、さまざまなテキストを用いて学びのときを持っておられることと思いますが、その一つとして候補に加えていただければ感謝です。

編集部には、これまでもすでにいくつかの教会から、この教案誌を成人科で用いているとの声が届いています。その場合、聖書研究やカテキズム研究、説教展開例などをテキストとして用いてくださっているようです。毎主日の日曜学校の一部として行われる成人科については、そのように、主日ごとの聖書研究やカテキズム研究などをお用いくだされば感謝です。

この教案誌が、日曜学校とその教師のためばかりではなく、教会に生きる信徒一人一人においても用いられ、皆様の信仰の成長と成熟の益となることを、心から祈り願っています。

〈「20周年宣言」の学びに備えて〉

この成人科の具体的な内容としては、教会全体の信徒教育ということですから、まず改革派教会の宣言を取り上げようと考えました。牧田吉和教師（神戸改革派神学校校長）が20周年宣言の解説を執筆して下さいます。第14号から掲載する予定です。

今回は、牧田吉和教師の過去の講演の一部を掲載して、その備えとさせていただきます。それは、

名古屋岩の上伝道所におきまして創立宣言の解説として行われた講演の中から、「教会形成と信条」について論じておられる部分です。月一回の各会・各部会での学びを想定して執筆されたものではありませんので、この掲載に際しても分割せずに掲載させていただきました。それぞれの教会の状況に合わせて、適宜区切りながらお用いください。

講演

「日本キリスト改革派教会とはどのような教会か」（牧田吉和）より抜粋

II. 教会形成を考える場合の根本的問題

実質的内容の話に入りたいと思いますが、この点での具体的内容に入る前にもう少しこれからの話の前提となる根本問題について考えておくことにします。その根本問題とは教会形成の本質に関わる問題です。この点が、日本キリスト改革派教会の教会形成論を理解していただく鍵になりますし、「名古屋岩の上キリスト教会」の教会形成における今後の歩みを考えていただく場合の根本問題にもなると私は確信します。

①日本キリスト改革派教会の教会形成論の核心

日本キリスト改革派教会の「創立宣言」は次のように述べています。

「神のみ明らかに知り給う所謂『見えざる教会』は全世界に亘り、過去、現在、未来なる全歴史を通し地上と天上とを貫きて聖なる唯一の公同教会として存在す」。

創立宣言はこれに続いて、さらに次のように述べています。

「然れども、我らは地上に於いて、見えざる教会の唯一性が、一つ信仰告白と、一つ教会政治と、一つ善き生活とを具備せる『一つなる見ゆる教会』として具現せらる可きを確信す」。

すなわち、教会形成において目指すところは、「創立宣言」の別の表現を用いれば、「一つの見え

ざる教会を、一つ信仰告白と一つ教会政治と一つ
暮き生活とによって『一つの見ゆる教会』として
具現し、之を以って唯一の聖なる公同教会の枝た
る事実」を確証するところにあります。唯一の聖
なる公同の教会に連なる教会を、しかも最も純正
に、この歴史の中で形成しようとする決意がここ
には示されています。そしてここに日本キリスト
改革派教会の教会形成論の核心があります。

②終末論的視点の重要性

以上のような教会形成論を前提にしたうえで、
私自身は終末論的視点の重要性を指摘しておき
たいと思います。終末論的視点とは、「聖なる方、真
実な方、ダビデの鍵を持つお方」(黙示録3:7)の
前で、その方の審判に耐え、永遠の神の御国に入
れていただけるような教会の形成を絶えず念頭に
置くということです。すなわち、終末の御国にお
いては、真のキリストの体なる教会が完成され、
全き形で出現します。これは、上記の宣言にある
「見えざる唯一の聖なる公同の教会」の見ゆる教
会としての完全な具現化、ニカイア・コンスタン
チノポリス信条(381年)の表現を用いれば「唯
一の聖なる公同の“使徒的”教会」の完成形態と
も言えるでしょう。私たちがこの地上において教
会形成に努めるとは、結局のところ、この終末に
おいて完成されるキリストの体なる教会を目指し、
その教会の実質を歴史の中で見える形でより鮮明
に具体化することに努めることに他なりません。

教会形成は歴史的行為ですから、この歴史的行
為がダイナミックな姿をとるためには、実際には
このような終末論的視点が大切だと私は思います。

また、歴史における教会形成の歩みには様々な
問題が生起し、事柄が混乱し、度々何を軸にして
考えたらよいか分からなくなることも起こりえま
す。その時、この終末論的視点を堅持することが
できるならば、教会形成の基本的方向を間違えな
いで済むでしょう。すなわち、教会が歴史の中に
生きようとするとき、終末において完成する神の
国へと流れ込むその流れに教会が絶えず正しく方
向づけられ、位置付けられるように注意すること
ができるからです。

③教派形成の必然化とその問題点

以上のような教会形成論に立脚するとき、迫害
下などの特殊な状況は別にして、通常の場合は原
理的に教会が各個教会主義で満足するというこ
とは終わらないはずで、終末における公同的教
会を見つめつつ教会形成する場合には、歴史の中
でも一致と公同性を追求する態度が必ず生まれ
てくるからです。そこでは各個教会主義の孤立した
姿ではなく、教会の一致を具体的に見える姿で追
求する教会形成の在り方が生まれてきます。すな
わち、聖書的教会の形成についてのそれぞれの神
学的確信に従った教派形成が歴史的には必然化す
ることになります。

この意味において教派形成を真剣な課題として受
けとめるべきですが、教派形成を真剣に受け取る
ということと教派の独善性とは必ずしも同じこと
ではありません。独善性は、ちょうどこの世の
何々会社の進展と繁栄の努力と同じような意味で、
“日本キリスト改革派株式会社”の発展と繁栄に
邁進すると言ったような状況になるときに起こる
病いです。そしてこの病いの危険性も小さくない
ことは注意して置く必要があるでしょう。しかし、
既述のような終末論的視点を堅持した公同性の自
覚において教派形成に真剣に取り組む者は、教会
の頭である再臨の主イエス・キリストの前で自ら
の教派形成の決断が場合によっては誤り得るこ
とも覚悟しています。歴史の中での決断には“絶対”
はあり得ず、相対性は避けられません。ちょうど
私たちの最善の決断でさえ最後的には最善ではな
かったということがありうるのと同じです。さら
に、歴史的教会の形成においては、たとえ教派形
成の決断が正しく、最善に公同性の追求の道が成
し遂げられ、そこに最善の教会が形成されたとし
ても、終末論的視点では、すなわち再臨の主の前
では、首を削り取られた塑像のように欠けのある
教会でしかないことも承知しているはずで、従っ
て、教会の真の公同性を追求している者は、教派
形成に対する自らの〈強い確信〉と同時に〈謙遜
さと開かれた態度〉をも持ち合わせているはずで
す。むしろ、公同的教会の形成を厳密に追求する
者こそが、教派形成に対する強い確信と同時に他
に対する開放性・対話性を合わせ持つことになる
と言ってよいのです。

日本キリスト改革派教会の創立も単なる教派意識によるものではありませんでした。この点に関しても、「創立宣言」は教会形成論の最後の部分で次のように明確に述べていることに注意をしていただきたいと思ひます。

「以上の略述によりて明白なりと言ふ可べきは、我が日本基督改革派教会は毫も所謂分派的精神に由来するものに非らざる一事なり。道に従って成る教会の公同性、一致性は我等の最も重んずる所、我等の教会観の真髓なり」。

この一文も、単なる教派主義ではなく、公同性の追求の姿勢を堅持し、閉鎖的ではなく、開放的であり、教会一致の道も常に視野におくべきことを明らかにしています。

以上のような意味で教派形成が必然化するのであれば、具体的には、どのような教派、どのような教會の流れの中に自分たちの身を置いて、自分たちの教會の教會形成をするのかということが問題になります。確かに、どのような教派、どのような教會の流れの中に自らの教會の場所的設定をし、あるいは牧師としての自分自身の教會的働きの位置付けをなしてそのような公同性を追求する道を歩むかは、実に悩ましく困難な問題です。それは間違いなく一つの決断の問題となります。その場合にはっきりしていることは、そこでは単なる人情や行きがかりといった人間的な枠ではなく（このことは無視することのできない現実的重さを絶えず持ち続け、深く悩むではありますが）、最後のところはその枠を超えた信仰的・神学的判断に基づく決断が要求されるということです。

以上の点を、これからの具体的問題を考えるうえで、前提的なそして根本的な事として明らかにしておきたいと思ひます。

III. 日本キリスト教史における日本キリスト改革派教會の位置

実質的内容の話に入りたいと思ひますが、最初に日本キリスト教史における日本キリスト改革派教會の位置について考えることにします。この点については、小野静雄牧師の『日本基督改革派教會史』を読んでいただければ十分過ぎるほどですが、私自身は組織神学を専攻する者ですから、歴

史的な点を問題にしつつも、組織神学的観点を加味して少し考えてみたいと思ひます。

日本キリスト改革派教會は1946年4月に日本基督教団から離脱して8教會200名の会員をもって新しく創立された教會です。この新しく創立された教會は、急に浮上して来たわけではなく、それ以前の流れを持っています。すなわち、新しく教會を創立したメンバーは、戦時中は日本基督教団に属していましたが、元來は（旧）日本基督教會に属する教師たちでした。（旧）日本基督教會は、日本基督一致教會、更には日本基督公會にまでさかのぼる歴史を持ち、長老主義・改革主義の伝統を保持する、日本のキリスト教界において指導的役割を果たした教派です。その意味では、日本のプロテスタント教會の主流部分には長老主義・改革主義の伝統が存在した、ということです。

このような（旧）日本基督教會の流れは、戦後主として三つに分かれました。第一は、日本基督教団にそのまま残った人たち（一例として「連合長老會」などのグループ）、第二は（新）日本キリスト教會として新しい教派を形成した人たち、そして第三は日本キリスト改革派教會を創立した人たちです。現在でも、この三つのグループは「日本改革教會協議會」などの窓口を通して交わりがあります。また私たちの教會と（新）日本キリスト教會の間には公的に話し合う場も設定されています。この三つのグループには個人的にも今も親しい交わりがありますし、肌合いも似通った点があります。しかし、これらの三つのグループは、それぞれが自らの現在立っている位置について、神学的に説明する必要があるでしょう。皆様の教會も、少なからず長老主義・改革主義の立場の教會に親近感を覚えておられることと思ひますので、自分たちの教會がどこに立とうとするのかという点についてやはり弁明できる用意が必要だと思ひます。

私自身としては、この講演では、他の二つの立場を批判的に論ずることよりも、少なくとも日本キリスト改革派教會はこのような理由で新しい教派を創立したのだというその点、すなわち日本キリスト改革派教會の創立の意義を積極的に明らかにすることに努めたいと思ひます。そしてここで断定的に申し上げることが出来るのは、こ

の点については私たちの教会の場合には決してあいまいではないという事実です。多分、皆様も既に読んでおられることと思ひますし、既にその内容の一部に言及もしましたが、私たちの教会の「創立宣言」にその点は明確に文章化されています。自らの教会の創立の意義を神学的宣言という形で明確にして出発した例も日本の教会の歴史の中では非常に珍しいのではないかと思います。この意味において、日本キリスト改革派教会は明確な神学的主張の上に創立されたと教会と言って間違いありません。

その創立宣言は、二つの神学的主張を持っています。一つは「有神論的人生観・世界観」の主張であり、今一つは日本における「聖書的教会の形成」の主張です。

前者については「創立宣言」は次のように主張しています。

「今後より良き日本の建設の為に我等は誠心誠意歴史を支配し給う全能にして至善なる神の御心に適ふ者とならざる可からず。その誠命の如く神を敬ひ、隣人を愛し、単に精神文化的部面に於てのみならず、『食ふにも飲むにも、何事をなすにも凡て神の栄光を顕す事』を以て至高の目的となさざる可からず。此の有神的人生観乃至世界観こそ新日本建設の唯一の確なる基礎なりとは、日本基督改革派教会の第一点にして、我等の熱心此処に在り」。

後者については既に触れましたが、煩をいとわず引用しますと次の通りです。

「見えざる教会の唯一性が、一つ信仰告白と、一つ教会政治と、一つ善き生活とを具備せる『一つなる見ゆる教会』として具現せらる可きを確信す。是日本基督改革派教会の主張の第二点なり」。

すなわち、「聖書的教会の形成」を上記の引用にある三つの柱を軸にして実現するという主張です。

以下、この創立宣言の二つの根本主張の意味を明らかにすることにわらいを定めて、日本キリスト改革派教会とはどのような教会であるのかを説明したいと思います。最初に第二点の「教会形成論」、次に第一点の「有神論的人生観・世界観」の

主張を扱うことにいたします。(編集部注：ここでは、第二点「教会形成論」の信条について論じる部分を掲載させていただいています。)

IV. 日本キリスト改革派教会の教会形成の理念と〈信条問題〉

日本キリスト改革派教会の教会形成論の第一の柱は、「一つ信仰告白」と言われるように〈信条問題〉です。信条の問題を考へるときに、先ず押さえて置くべきことは「なぜ信条を必要とするのか」という根本的問題です。この点はじっくりと考へておく必要があるでしょう。

①日本のプロテスタント教会と信条問題

日本のプロテスタント教会は、歴史的に見ても、信条問題に関して明確な認識を持つことが困難な体質を持っています。この体質は既に日本基督公会の時から今日に至るまで引きずっている問題と言ってよいでしょう。それは、日本に入ってきたプロテスタント・キリスト教自身が米国の大覚醒運動の影響を強く受けたキリスト教であることに少なくとも一因があります。この場合のキリスト教は、教会形成的というよりも、教派を貫く超教派的運動としての色彩をもち、そして聖書主義的キリスト教ではあっても、信仰基準の点では福音主義キリスト教の簡単な個条的綱領を有するだけのものであったのです。日本の教会は、日本基督公会以来、様々な歴史的経緯がありましたが、教会形成にあたってこの簡単信条主義の立場を採用し、基本的にはこの立場を保持し続けたと言って良いと思います。日本キリスト改革派教会の創立は、教会形成におけるこの点の根本的克服が目指されたものです。

②なぜ信条を必要とするのか

しかし、基本に立ち戻って、「教会にとってなぜ信条は必要なのか」という問いを考へておきたいと思います。皆さんの学んでくださった「改革派信仰の特色」のパンフレットの中でも明らかにしていますように、聖書の中にある「岩の上に家を建てた賢い人」の譬えを思い起こしてくださると良いと思います。まことに摂理的なことですが、皆さんの教会は「名古屋〈岩の上キリスト教会〉」

となっています。神の言葉の上に教会をしっかりと建て上げたいと願っておられるからでしょう。どの教会もプロテスタント教会は、聖書のみ原理に立ち、神の言葉の上にしっかりと教会を建て上げたいと願っていることと思います。この点で、聖書観は聖書の教会形成の根本的前提として意味を持つと思っています。少なくとも私たちは信仰と生活の唯一の規準としての聖書の絶対的權威を承認することが必要であると信じています。そうでなければ神の言葉の上に教会を建て上げるにしても、その第一歩から不安定となり、揺らぐことになるでしょう。

しかし聖書の權威をどんなに真実に告白しても、それだけでは聖書の教会を形成することは出来ません。いくら神の言葉の上に立って教会を形成すると力説しても、実際には神の言葉を正しく把握することなしには神の言葉に従って教会を建てること、岩の上に家を建てることはできないからです。神の言葉を聞いて正しく理解して、はじめてそれを行うことが出来、岩の上に家を建てる事が出来ます。すなわち、教会形成論的に言えば、神の言葉の上に教会が建てあげられるためには、神の言葉の真理を出来る限り正しく把握し告白した〈信条〉を公的に保持し、その上に教会を建て上げることが具体的にはどうしても必要になってくるといことです。ここには、〈聖書〉と〈教会〉と〈信条〉との有機的・不可分の関係があります。

以上のことをより明確に認識するためには、逆のケース、すなわち教会が信条を持たないケースを具体的に考えてくださると良いと思います。もし教会が信条を保持しないで教会を建て上げようとするれば、次のような問題に直面することになります。

(i) 教会の一致が保てないこと。教派的一致という点で考えて見ても、その教派が信条的基盤を持たない場合には、各個教会における説教や教育が教理的な点でバラバラになり、とうてい真理の柱なる教会としての一致をそこに期待することは出来ません。各個教会というレベルで考えても、その教会が信条的基盤を持たない場合には、赴任してきたそれぞれの牧師の神学的立場によって教会は右往左往

することになり、長い歴史の中で真理に基づく一貫した教会形成は難しくなります。いずれにしても、信条的基盤を欠いた教会形成では、結局「信仰の一致と神の御子に関する知識の一致」（エペソ4：13、新改訳）を目指す教会形成は出来なくなります。

(ii) 福音の純粹性を確保できないこと。教会には様々な誤った福音理解が、場合によって偽教師も入り込んできます。そのとき、教会は、信仰の基準としての信条を持たなければ、その誤りを認識することも排除することもできないでしょう。これは「真理の柱、真理の基礎」（テモテ3：15）としての教会の使命を果たせないことを意味します。

(iii) 外部の人たちに対しても無責任な結果になること。その教会がどのような教えの上に立っているのかが公的に明らかにされなければ、自分たちの教会がどのような教会なのかを責任ある形で説明することはできません。またその教会に加入しようとするときにも、そのような公的な信仰基準が明示されていないときには、その教会に安心して自分自身や自分の子どもたちを委ねることはできません。

以上のように考えてくるとき、教会形成にとってなぜ信条が、すなわち教理的基準が必要なのかを理解していただけるのではないのでしょうか。

③なぜ簡単信条では不十分なのか

しかし、問題はさらに深い問いになります。信条が必要であることが理解できたとしても、なぜ〈簡単信条〉では不十分なのか、なぜ〈詳細信条〉が必要なのか、という問題を検討しなければなりません。

日本の教会の中には、使徒信条、ニケーア・コンスタチノポリス、カルケドン更にはアタナシウス信条の線で、つまりいわゆる「共同信条」の線で教会形成を行おうとする考え方もあります。私自身はそのような考え方を全面的に否定するつもりはありません。それは教会形成の上で不可欠なことだからです。キリストの二性一人格論、更には三位一体論を無視するようなキリストの教義あり得ないからです。

しかし、問題は、教会はその後、歴史の

教改革を経験し、「聖書のみ、恵みのみ、信仰のみ、キリストのみ」の宗教改革的真理を見だし、宗教改革以降にも聖書の真理のより正確な告白の努力をなし、多くの信条を生み出して来たという事実があるということです。つまり、宗教改革とそれ以後の歴史、そしてそこで生産された信条をどのように評価するのかという問題に突き当たるのです。あるいは次のようにも表現出来るでしょう。聖霊に導かれてきた教会の歴史、聖霊に導かれて聖書の真理を告白してきた教会の歴史は、ニケーア・コンスタンチノポリス、カルケドンなどで終わってしまったのか、あるいは時代を下げて宗教改革で終わってしまったのか、それとも宗教改革を経てその後の教会の信仰告白の中にも聖霊に導かれた真理の告白の展開を承認するのか、という問題なのです。

日本の教会においても公同信条の内容だけでは必ずしも満足できず、福音主義の教理や更には改革主義的教理の伝統などを“加味した”信仰個条も作成されてきました。それは確かに公同信条の線にとどまるのではなく、宗教改革の、そして宗教改革以後のより改革主義的方向を示す要素が付加されたことを意味していますが、〈簡単信条〉という大きな枠を超え出ることはありませんでした。〈簡単信条〉は、事の本質上、結局は解釈の幅を大きく許すことになり、事実上教派内に右から左までの神学的立場を広く許容する結果になります。更に加えて、その信仰個条は実質的には法的拘束性と緊密に結び付くことはありませんでしたから、上記の傾向はいよいよ強められることになります。

日本キリスト改革派教会の場合はウエストミン一信仰基準という〈詳細信条〉を自らの信条採用しました。度々、これは幼い日本の教

す
に
は
?で宗

すぎる鎧とか、ヨーロッパの詳細な信条でも仕方がないと言って一笑に付されるも同じような事情にあるでしょう。がこれを採用するのは、その種のなく、もっと本質的なことであり、その理の普遍妥当性の問題なので、聖書と取り組み、苦闘し、ようと努め、そこよりしてきたのです。そうした聖書の真理の告

白を土台にしてこそ、神の言葉により堅固に、より深く立脚した聖書の教会を建て上げることができる、と私たちは確信しているのです。ウエストミンスター信仰基準の中に、そのような聖書の真理の告白のより発展した、より厳密な信条的表明があるというのが私たちの確信です。

「創立宣言」は、この点について次のように述べています。

「教会ハ古ヨリ使徒信条、ニカヤ信条、アタナシウス信条、カルケドン信条ナル四ツノ信条ヲ教会ノ基本的、普遍的信条トシテ共有シ来レリ。宗教改革時代ニ至リ、改革派諸教会ハ其等諸信条ノ正統信仰ノ伝統ニ立チ且ツ是等ニ止ラズシテ純正ニ福音的、否全教理ニ亘リ更ニ純正ニシテ且ツ優レテ体系的ナル信条ノ作成ニ導カレルルニ至レリ。其ノ三十数個ノ信条ノ中ニテウエストミンスター信仰基準ハ聖書ニ於イテ教ヘラレタル教理ノ体系トシテ最モ完備セルモノナルヲ我等ハ確信スルモノナリ」。

ここに明らかなように、日本キリスト改革派教会は宗教改革以降の信条的発展の歴史の中に聖霊の導きを信じ、普遍的真理が最も厳密にウエストミンスター信条の中で告白されていると信じて、これを採用したのです。この伝統に連なることが真の教会形成の伝統に連なる道であると信じたのです。これは神学的判断であり、神学的決断です。

このところで「教会形成を考える場合の根本問題」を思い起こしていただきたいと思います。教会形成とはあの終末的神の御国を目指しての教会の営みです。あの完成された唯一の聖なる公同の教会を歴史的に追求する道は、それがキリストの体である以上、キリストの支配が最も良く行き渡っている教会を追求する道であり、キリストの支配はご自身の聖霊と聖書による支配であり、従って聖書によって最も良く支配されている教会を追求する道です。ニケーア信条によって告白されている教会の使徒性とは、使徒的教えにおける使徒性であり、その意味では聖書の真理に堅く立つことにおいて使徒性は最も厳密に継承されるものと私たちは考えています。すなわち聖書の真理に最も厳密に根差す教会こそ、あの教会の公同性を最も鋭く追求しようとしている教会であり、教会の

使徒性を最も厳密に継承する教会であるということです。このような確信に立って、日本キリスト改革派教会はウエストミンスター信条こそ、聖書の教えを最も厳密に告白する信条であり、この信条的伝統に結び付くことが教会の公同性を追求する王道であると信じたのです。

④異教的環境にある日本の教会と〈詳細信条〉の必要性

この関連で、特に異教的環境の中にある日本の教会の状況を十分に考慮する必要があります。異教的な環境の中にある教会が聖書の真理を厳密にまた詳細に表明した信条を基礎として形成されなるときには、そこで極めて脆弱な教会が形成され、その結果異教的なものとの関係においてあいまいさを残すことになり、異教的なものに足元を救われることになります。

例えば、国家と教会の問題を考えてみてくださいと良いでしょう。日本における国家、あるいは政治的権力は歴史が証明するように常に宗教性を、しかも異教的宗教性を帯びる傾向をもっています。従って、そのような国家との関係における教会の在り方も絶えず問題とならざるをえません。ところが、いわゆる〈簡単信条〉には教会と国家との関係についての明確な告白はありません。たとえ信条において信仰義認の教理が正しく表明されていたとしても、教会と国家の問題が不問に付されたままである場合には、日本における教会形成は極めて危ういものになります。歴史を振り返って見て、もし日本の教会が天皇制絶対主義の時代にあつて教会と国家に関する明確な信仰告白を保持していたなら（勿論、その場合にそれだけで当時の教会が犯したあのような罪を逃れ得たとは単純には言えないとしても）、当時でさえもう少し違った教会の在り方を示したのではないかと思います。少なくとも戦いの一つの武器を装備していたことは事実でしょう。日本の教会にはこのような武器を持つとする認識が体質的に初めからなかったのです。簡単信条主義では、このような認識は生まれて来ないからです。この意味において、日本の教会にはドイツ告白教会における「バルメン宣言」のような告白も、そのような告白に基づいた戦いも生み出す基盤がはじめから存在しな

かったのです。

日本キリスト改革派教会は30周年宣言として「教会と国家に関する信仰の宣言」を告白しました。これは、以上のような日本の教会の弱点を自覚し、教会の「信仰の宣言」として表明されたものです。この種の宣言は、日本キリスト改革派教会の信条観を前提にしてはじめて出てきたものです。少なくとも、このような信条的文書を教会が公的に告白しているならば、国家的・政治的次元における異教主義に対しても今後〈教会的戦い〉をなすことができるはずで

⑤「更ニ優レタル信条」を求めて

改革派教会は「御言葉によって絶えず改革され続ける教会」の意味であり、信条観においてもこの原理は妥当します。従って、私たちはウエストミンスター信条が最終的なものとは考えていません。この意味では、日本キリスト改革派教会は、硬着した静的意味における「信条教会」（ベケントニス・キルヘ）ではなく、絶えず新たに告白し続ける動的意味における「告白教会」（ベケネンデ・キルヘ）であろうとしている教会です。

従って、「創立宣言」は、上記の文章に引き続いて次のように述べています。

「我等日本基督改革派教会ハ我等ノ言葉ヲ以テ更ニ優レタルモノヲ作成スル日ヲ祈リ求ムルト雖モ此ノ信仰規準（ウエストミンスター信仰基準のこと）コソ今日我等ノ信仰規準トシテ最適ノモノナルヲ確信シ賛美ト感謝ヲ以テ教会ノ信仰規準トス」

ここにはウエストミンスター信仰基準の採用の理由と共に、「更ニ優レタル信条」を自分たちの言葉で作成したいという願いも明らかにされています。事実、新信条作成の準備作業が、改革派教会のこれまでの歩みにおいて既に始まっておりま

す。これまでに30周年には前述の「教会と国家」について、40周年には「聖書」・「福音の宣教」・「聖書」について、50周年には「予定」について、それぞれ「信仰の宣言」が出されてきました。さらに、60周年には「終末についての信仰の宣言」が出されることに決まっています。これらはすべて、新信条への準備作業としての意味を持ってい

ます。このように信条との関係で明確な神学的確信に立ち、粘り強く具体的な努力を傾けているのは日本キリスト改革派教会の特色です。このようにして私たちの教会はより聖書的真理に教会を基礎づけたいと願ひ、貧しいながら努力を重ねています。つまり、より使徒的なる教会、より公同的

教会であらうと願ひ、労苦しているのです。決して、何らかの改革派セクトを作ろうとしているものではありません。

(1997年6月21～22日、名古屋岩の上キリスト教会修養会講演より)

『日曜学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『日曜学校教案誌』を発行しています。教案誌はすでに第13号を数え、中部中会においては三分の二を超える教会がこの『教案誌』を採用してくださっています。また、他中会、他教会においても採用して下さる教会が与えられています。皆様のご支援に心から感謝を申し上げます。

この『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由献金によってご支援いただきたいと願っています。この献金は、『教案誌』の編集・出版のための費用として用いられます。子どもたちの信仰教育のための『教案誌』の発行のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。『教案誌』を購入くださることも、発行のための支援となります。信仰の養いの益ともなりますので、ぜひ『教案誌』をご購入いただき、ご支援いただきたいと願っています。よろしくお願い申し上げます。

目標金額	30万円
期 間	2003年7月～2004年3月末
送 金 先	郵便振替 長谷川正一 00840-3-3192

※『教案誌』自由募金である旨、振込用紙にご記入ください。

※中部中会2004年度第一回定期会において、引き続き自由募金を
行うことを提案する予定です。

日曜学校 2004年度カリキュラム (2004年7～9月)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単 元 の 目 標			
7月4日	唯一の神	問8	ウ小教理5
		使徒17:22-34	
子どもの救いと成長を阻害する多神教から決別することへと招く			
11日	生ける神	問9	ウ小教理5
		出エジプト32:1-6	
生ける神の愛を教える。神の愛を裏切らないことへと励ます			
18日	三位一体の神	問10	
		マタイ3:13-17	マタイ3:17
三位一体の愛の交わりに生きておられる生けるまことの神を提示する			
25日	三位一体の神の交わり	問10	
		ヨハネ4:7-16	ヨハネ4:16b
三位一体の神の交わりに招き入れられる救いの御業とその喜びを伝えよう			
8月1日	主権者なる神	問11	
		マタイ8:23-27	コロサイ1:16
天地を統べ治めたもう主権者、全能者なる神への信頼を証ししよう			
8日	天地創造	問12	ウ小教理9、ウ告白4章
		創世記1章	創世記1:1
この世界と自然は神の作品。そこに在ることの喜びと感謝、責任を証ししよう			
15日 (平和)	平和を創り出す	—	ウ告白20、23章
		マタイ5:43-48	マタイ5:9
平和主日として礼拝をささげる。敵を愛せよとの御言葉から、平和を考えよう			
22日	摂理の神 (一)	問13	ウ小教理11、ハイテ26-28
		マタイ10:26-31	マタイ10:30
神は今も働いておられる。わたしたちに慈しみ深く働かれる神に感謝しよう			
29日	摂理の神 (二)	問14	ジュネ28-29、ハイテ94-95
		ルカ7:11-17	ローマ8:28
占いやたたりなどを恐れる思いを取り除こう。主がわたしたちと共におられる			
9月5日	人間の創造	問15	ウ小教理10
		創世記2:6-25	創世記2:7
神の息を吹き込まれて生きる人間のすばらしさを証ししよう			
12日	罪と墮落	問16、17	ウ小教理12-15、ハイテ7-9、62
		創世記3:1-7	ローマ6:23
人間を愛しておられる神の悲しみのまなざしの中で、人間の罪と墮落を学ぶ			
19日 (敬老)	罪の悲惨	問18	ウ小教理17-19
		創世記3:8-24	創世記3:9
キリストを仰ぎながら、人間の罪の姿を学ぶ。自らの姿を省みることへと招く			
26日	わたしも罪人	問19	ウ小教理16、ハイテ5
		ローマ7:13-25	ローマ7:24-25a
自らの罪を知り、悔い改めを新たにす。神の御前にひれ伏し祈ることへ招く			

日曜学校 2004年度カリキュラム 年間計画

(2004年4月～2005年3月)

2年サイクル第1年(子どもカテキズム問1～33)

月 日	教会暦・行事	主 題 (仮 題)	子どもカテキズム
2004年			
4月4日	受難週主日 進級式	十字架のキリスト	
11日	復活祭	復活のキリスト	
18日		第一部 人生の目的 一、人生の目的 人生の目的……礼拝	問1
25日		神の栄光をあらわす	問1
5月2日		救いの恵み	問2
9日		神の子ども	問2
16日	母の日	御言葉の礼拝	問3
23日		キリストの体なる教会	問3
30日	聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	
6月6日		神と人を愛する	問4
13日	花の日	第一部 人生の目的 二、聖書、神の御言葉 神の御言葉	問5
20日	父の日	愛の手紙	問6
27日		第二部 信仰の道 一、三位一体の神さま 霊なる神	問7
7月4日		唯一の神	問8
11日		生ける神	問9
18日		三位一体の神(一)	問10
25日		三位一体の神(二)	問10
8月1日		第二部 信仰の道 二、父なる神さま 主権者なる神	問11
8日		天地創造	問12
15日	(平和)	平和について	
22日		摂理の神(一)	問13
29日		摂理の神(二)	問14
9月5日		第二部 信仰の道 三、人間 人間の創造	問15
12日		罪と墮落	問16, 17
19日	(敬老の日)	罪の悲惨	問18

月 日	教会暦・行事	主 題 (仮 題)	子どもカテキズム
2004年			
9月26日		わたしも罪人	問19
10月3日		神の怒り	問20
10日		あがない主の必要性	問21
17日		第二部 信仰の道 四、御子なる神さま 二性一人格 (一)	問22
24日		二性一人格 (二)	問22
31日	宗教改革記念	主は救い、イエス	問23
11月7日		神の御子、キリスト	問23
14日		謙卑のキリスト	問24
21日		高学のキリスト	問24
28日	アドベント	待降節	
12月5日	アドベント	待降節	—
12日	アドベント	待降節	—
19日	クリスマス	降誕祭	—
26日	年末	一年の感謝	—
2005年			
1月2日	新年	預言者イエス	問25
9日		大祭司イエス	問26
16日		真の王イエス	問27
23日		第二部 信仰の道 五、聖霊なる神さま 恵みのみ	問28
30日		選びと有効召命	問29
2月6日	(信教の自由)	キリストとの結合	問30
13日	レント	罪の赦しと義認	問31
20日	レント	神の子とされる	問31
27日	レント	聖化の恵み	問32, 33
3月6日	レント	愛の歩み	問32, 33
13日	レント	キリストの苦難	
20日	受難週主日	十字架のキリスト	
27日	復活祭	復活のキリスト	

編集後記

●話を聞いている子どもたちを思い浮かべつつ幼稚科部分を書きました。(やってみよう)の部分はとても苦手です。家内のアイデアと教会員の姉妹のカットにより楽しいものができました(大西敏雄)。●初めての奉仕で苦勞しましたが、教会に遊びに来る近所の子どもたちの顔を思い浮かべながら作りました(長田詠喜)。●小学上級科の分級展開例を書かせていただきましたが、内容が中高生向きになってしまいました。各クラスの状況に合わせて、適用していただきますようお願い

いたします(持田浩次)。●全国の中学生たちのことを考えながら奉仕することができて感謝でした。御言葉が若い魂に届きますように(石原知弘)。●執筆者が大きく広がっていることを感謝しています。今後の継続のためにお祈りとお励ましをお願いいたします(木下裕也)。●執筆者の広がりと共に編集作業が複雑になり、またていねいさも求められ、四苦八苦しながら作業しています。皆さんのお祈りとご支援に励まされており、心から感謝申し上げます(望月信)。

今号より、『教会学校教案誌』に名称をあらためさせていただきました。また、『子どもカテキズム』を中心としたカリキュラム編成に戻り、2004年度・2005年度の二年間、キリスト教教理の学びを中心に据えた礼拝を目指して参ります。成人科を新設いたしました。今号はまだ備えの段階がありますが、次号より月ごとの学びのテキストを提供して参ります。これは、日曜学校教師の学びの材料としてもたいへんよいでしょう。それぞれの教師会でぜひお使いください。

それらにともない、教案誌の価格を1号から8号までと同じ一部900円に戻させていただきました。経済情勢の厳しい中ではありますが、よろしくをお願いいたします。

そのほか、編集部の一部の交代、購読料の振替口座の変更などもあります。有志の志により始まった業ではありますが、継続的なものとなるにつれて、教会的に整えることがますます求められています。この点でも、皆様のご意見をお寄せいただければ、感謝です。

2004年度の歩みにおいて、日曜学校・教会学校の再建を課題として挙げておられる教会も多いようです。教会学校の営みは、教会の伝道の最前線と言えます。福音の言葉が子どもたちの心に届き、豊かな実りを結ぶものであるよう、心からお祈りしております。

Soli Deo Gloria!

☆ 本文執筆者一覧 ☆

聖書研究

村手淳 太田伝道所宣教教師
春名義行 津島伝道所宣教教師
辻幸宏 大垣伝道所協力牧師
相馬伸郎 名古屋岩の上伝道所宣教教師

カテキズム研究

望月信 高蔵寺教会牧師
木下裕也 豊明教会牧師
三川栄二 稲毛海岸教会牧師

説教展開例

相馬伸郎 名古屋岩の上伝道所宣教教師
小野田雄二 上野緑ヶ丘教会牧師
岩崎謙 神港教会牧師

分級展開例

幼稚科

大西敏雄 尾張旭教会牧師
山田亜矢 尾張旭教会会員

小学科下級

長田詠喜 高松東教会牧師

小学科上級

持田浩次 三郷伝道所宣教教師

中学科

石原知弘 北神戸キリスト伝道所宣教教師
表紙デザイン 宮川裕希子 名古屋教会会員

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上传道所宜教教師
木下裕也	豊明教会牧師
辻幸宏	大垣伝道所協力教師
春名義行	津島伝道所宜教教師
望月信	高蔵寺教会牧師

定期購読・バックナンバーの申し込み

春名義行 〒496-0038 愛知県津島市橋町2-30 津島伝道所
Tel/Fax. 0567-26-4221

郵便振替口座 00840-3-3192 「長谷川正一」

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2004年4・5・6月号 (季刊)

第13号

2004年2月29日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校教案誌編集部
名古屋岩の上传道所 宜教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701

編集・印刷 株式会社あるむ
〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価 900円 (本体価格)
